918.6
I95

始

918.6
I95ㄉ

泡鳴全集

第七卷

正
10 7. 1
內交

目次

部落の堰……一
蜜蜂の家……七
わが子のやうに……一二
二食主義者……一四九
お……一七五
常……一四一
山の總兵衛……二七一
催眠術師……

918.6
I95
ウ

部落の娘

母の立ち場……三三三
お増の信心……四〇七
燃える稲粋……四七九
難船……五三九
鐵公……五五五
狐の皮……六〇九
犠牲……六三九
湯の舞日記より……六六九

一

東京と云ふところへ行きさへすれば、自分のこの悲しい境遇を免れることができると思つたばかりに、高子は決心して七條停車場へ出かけたのである。さて、停車場へ來て見ると、どう云ふ手續きをしたらいいのか分らなかつた。ただ多くの人がどや〳〵してゐるのに先づ氣がのぼせてしまつて、切符とか云ふ物をどこでいくら出して買へばいいのかにまご付いた。

廣い建て物だけれども、その高い天井が自分を押し付けるやうで――聽き慣れない色んな聲の爲めに自分の耳が何となく遠くなつた。そしてぼんやりと行き來の人々の間に突ツ立つてゐたが、やがてまたいつもの情けないそして恐ろしいことを思ひ出したのである、――

『若しこの中にわたいの顏を知つてる人がおしたら！』

その顏がその場に靑くなつたと思ふと同時に、からだ中がぞツと身振ひをした。それを、知らない人々にも見られたくないので、ちよツと自分で自分の氣を引き立てて、それとなく場所の隅の方へ足

を運んだ。そしてそこから見てゐると、自分と同じやうにひさし髮を結つてる人や、同じやうに牡丹色の帶を締めてる人も、見ツともないほど氣をあせらせて、他の男や女同樣に、丁度自分と反對のがはに付いてる窓へ行つて、入れかはり、立ちかはり、何かを買つてる。それが切符なのであらうが、自分はいくら出せばそれを買へるのか分らなかつた。その窓の上の方にかかつてる大きな額のやうなものをあふ向いて見てゐるおぢイさんの人もあるので、それが値段書きででもあらうかと考へたけれども、そこへ進んで行くのさへ氣が引けて、自分は時間をすごしてゐた。

そのうちに人々は大抵狹い入り口から小さい札のやうな物を切つて貰つて、奥の方へ這入つて行つた。殘つてるものは僅かになつた。すると、自分のやうにけば〳〵したなりをしてゐる者は一層人の注意を引くやうに思はれて、なほ更らのぼせて來た顏をちよツとそばの壁へ向けた。そしてそこにかけてある何か書いた物を見てゐるふりをして、自分で自分の氣を休めた。が、『鐵道』とか、『上り』、『下り』とか、その他にまた大きな字だけは目に這入つたけれども、澤山の小さな文字や數字らしいのは今の自分にはただごちや〳〵として、何のことだか讀めなかつた。

不思議にも、その讀めない額面の眞ン中に、自分よりも二つ三つ年うへかと思はれる男が浮んでゐた。これも鐵道に關係ある人らしく、特別な帽子に洋服を着て、左りの腕には赤い幅びろの何かのしるしを卷いてる。通辯さんとでも云ふのか――別に年寄りや田舍ものくさい人の世話も親切に燒いて

る外にも――西洋人が來ると、一々、その世話をしてやる。ここへ來て初めて見たのだが、それが何となくなつかしかつた。日本人と西洋人とが違つてゐるやうに、一般の京都人と自分らとも亦違つてゐる。そして西洋人が嫌はれるやうに、自分らも亦さうだ。それにも拘らず、西洋人に親切な人だから自分らにも親切にして呉れるだらう。あア云ふ人ばかりがこの世にゐて呉れるなら、自分もわざ〳〵東京などへ逃げて行くには及ばないのだが――。

ぎゆう〳〵と云ふ靴の音がして來たので、その方へふり向くと、さながら自分が待ち受けてでもゐたやうに、その人が矢ッ張り親切さうな笑みを帶びながらこちらへ近づいた。俄かにまた自分の顏が赤くなつたやうだ。たッた今、自分のうッとりと想像してゐたことでやッと少しばかり心が落ち付いてたところであつたのに。

『あんたはどこへお行きですか?』

『東京へ行きとおすのどすけれど――』ちよッとどぎまぎしたあとで、兎に角、斯う答へることができた。それから、直ぐ心を定めてはッきりと問ひに進んだ、

『どないしましたら、行けまひようか?』

『あすこで』と、その人は腕にしるしのある方の手をさし延ばして、さきに皆の集つた窓を返り見てから、またこちらをしげ〳〵と見ながら、『切符をお買ひになれば行けますが――』

『……』こちらには向ふのうゐみ多い目がこちらの腹の中までも見ぬくやうで、おそろしくも見えたが、なほその親切さうな口ぶりにたよつて、その切符を買つて貰はうかと云ふ氣になつた。

『東京には』と、向ふは言葉をつづけた、『御親類でもおありなのですか?』

『……』親類！　こんな關係やこれを知つてるもの等のゐないところへ放たれたいのであるから、この言葉を聽くさへもいやであつた。それを努めて見ぬかれないやうにからだを堅くして、『おへんのどすけれど――』

『では、お知り合ひでも――?』

『なにも――』ゑがほを見せてゐたいのだが、それが自由に出ない。答へはほんとうのことで、決してうそではないが、若し實際には何かの關係が東京にあつたとしても、矢ッ張り、こちらは同じ答へをするのであつた。それほど自分の血すぢと周圍と世間のうわさとが恨めしかつた。それほど、自分は父の種を母が宿して呉れなかつたらよかつた。

『それでは、――少し立ち入つてお聽きするやうですが、――あんたは一體何の爲めにお行きになるおつもりです?』

『……』こちらは向ふをその年の割りに優しさうだと見たのに、その問ひが案外に人のお腹をゑぐるやうなことに受け取れた。赤くなつてた顏がまた眞ッ青に變はつたかと思はれるほど、自分は自分

の心を引き締めて、この人にも矢ッ張りうか〳〵物は云へないぞと警戒しながら、それでもまだ訴へるやうな氣持ちでその人の顏を見つめてゐた。

『立ち入つてお聽きするのは如何にも失禮ではありますが、お見受けしたところ、何かわけがおありのやうですし、今伺へばまた別にお知り合ひもなくこの地をお立ちですので、あんたのお爲めをおもひまして、間違ひのないやうにお尋ねするのですが――？』

『……』さう事を分けて男らしく云はれたので、こちらも何とか返事をしないではゐられなくなつた。丁度、おない年ぐらゐの兄さんが朝鮮へこれも逃げて行つて靴屋になつてゐるのを思ひ出してだ。若し自分が當り前の家の娘であつたら、きッと直ぐあまへた涙をこぼしてゐたであらうと思はれるほどの素直さで、『ちッと悲しいことがおして――。』

『そんなら、なほ御注意してあげたいことがあります。まア、こちらへお出でになつたらどうです』と云つて、その兄さんとおない年はこちらを一二等待ち合ひ室と書いてあるところへ案内した。

『……』こちらは親の血を分けた兄の外には若い男から斯うして話しかけられることがなかつた。そして、それも、もう今から二三年前までのことであつて、兄が朝鮮へ行つてからは、今が初めてだ。嬉しいやうな耻かしいやうな氣もして、然しそれにまたこの人も自分らの仲間以外の人だからと云ふ顏えるやうな警戒心が加はつてゐた。

『まア、おかけなさい。』同ふも少し聲が顫えてゐたが、角のあるおほテイブルの長いがはに面して置いてある長椅子の脊に奥の方で右の手をささへて、こちらに賴母しさを與へるだけの禮儀を以て、『さうしたらわたしもかけますから。』

『へい。』こちらは改まつてお辭儀をした。そして再び向ふと顏を見合はせた時には、何を云ひ出されるのだらうとおそろしかつた。それが遠慮してゐるのだと見えたかして、

『では、このままでお話し致しますが』と斷わつて、名刺をこちらに渡してから、『實は、わたくしはそれに書いてあります通りここの案内掛りで――』

『……』如何にも、よく見ると、赤いしるしにも『鐵道案内』と書いてあつた。

『すべてのお客さんをお世話してあげてをります。若し御言葉通り東京行きの切符をお買ひですなら、いつでも買うておあげ致しますが、別に當てもなしに、ただ悲しいことがある爲めの御旅行なら危險ですよ。東京と云ふところは、御存じないのでは京都と同じやうに呑氣なところと思はれましようが、すりが多く、また朦朧車夫と云ふて、方角の分らぬ女と見れば、怪しいところへ引き込んでしまう車屋も澤山をります。それに、いろ〳〵惡いことをするものがあつて、殊にあなたのやうな身なりも綺麗な御婦人で手賴るところもないと見れば、どんなことをされるか分りません。わたくしが申し上げたいのはそれで――若し大して御必要もないのなら、思ひとまる方がよろしうございましよう。

またどうしてもお行きになるなら、誰れかお附き人をつけて行くのが安全でしよう。』

『さよどす、な。』こちらはぼうッとのぼせてゐた。自分が何も知らないで人の眞似をして見ようとしたのをきまり悪かつた爲めでもあるが、また一つには、いつのまにか、自分も同じ椅子の脊に手前の方でつかまつて、その左りの手のひらを堅い木にこすりつけてゐたのが、何だか向ふから傳はつて來るあたたか味をおほびらに享け樂しんでたやうに思はれたからである。それに氣が付くと、直ぐその手を放して、自分の胸のところへ持つて行つた。この時、反對の手にはひわ色の絹張りかうもり傘があつた。お金の外に持ち物はただこればかりで――秋とは云へど、まだ日中を歩くにはこれが必要であつた。

『今一度お母アさんなり、お父さんなりに御相談なさつたらどうです?』

『お父さんはをりまへんのどす』と、つい入らないことを云つてしまつた。不斷から、父の死と共に父の血緣も切れたと云ひたい、云ひたいと思つてたのだ。

『では、お母アさんに相談なさつて御覽なさい。』

『さよどす、な。』少しらくな氣ぶんで微笑も浮んで來た。そして言葉もはツきりとなつて、『別に、けふに限つて行かねばならんわけでもおへんさかい。』行けたら行くと、一度は、もう、別れを告げて來たのだけれども、今のやうなことを聽かされて見ると、この地で考へてたやうな容易なものではなかつた。自分らの仲間のむかし話には、或さむらひが門の前を通つたのを部落の人が無理に連れ込んで一ケ年もそとへ出さず、そのあひだにそこの娘に人間並みの種を宿さしめたとある。それだから、自分もその反對に人間の手ごめに會ふほどのことは覺悟の前である。女子大學とやらへ這入つてゐて男を見つけると直ぐ、卒業などのことは――どうせ目的でなかつたのだから――棄ててしまつたものもある。つまり、正しい子だねさへ得て來れば、それで望みを達しられるのだが、折角得たその種が惡人やどろ棒のであつたら、矢ッ張り、なんにもならぬのである。

『さうして、若しなほお分りにならんことがありましたら、またいつにてもわたくしが御相談相ひ手になつてあげましよう』と、向ふの云ふことはその目つき、ゑがほによく釣り合つて、まん更らうそでもないやうであつた。

『……』こんな人がこの地にもまだ澤山ゐるなら、わざ〳〵東京三界までもそれを求めに行くには及ばないのであるが――。

この時、二三名の客が一緒に這入つて來たので、自分のくねらせてゐたからだが急にまたきッとなつた。習慣として、人が自分のそばに來れば、先づ自分を知つてる人ではないかと心配するのだ。が、さうではなかつたので、安心はしたものの、それッ切りなつかしい言葉を聽くことはできなかつた。

『わたくしの住所は』と、向ふも言葉が改まつて、『名刺に書いてありますから。』

『ほしたら、都合によりましてまたお伺ひ致しますかも知れません』と答へて、自分は名殘り惜しく別れを告げた。

誰れか知つてる人が來はしないかと左右を返り見ながら、顏をかうもり傘に隱して、烏丸通りを停車場から離れて行くと、お晝近くだけれども、自分と同じく世間にうそを云つてるやうな秋の日の光りが殊に寂しくしみ〴〵とからだ中に感じられた。そして自分は今の人に呼びとめられながらも、罪深い爲めに、鴨川の水のやうにうす暗く透きとほつた地獄の底へとめ度もなく落ちて行くのが見えた。

二

『惡い因緣にからまつて』と思ひながら、からす丸を七條通りに出て、その角から東本願寺を拜んだけれども、心の明るくならないのはいつもの通りであつた。地獄の七條通りだ。その底を東に向つて行くと、そのどん詰りには高瀨川や鴨川を越えて東山が見える。

『蒲團着て寢たる姿』とあるのを思ひ出しても、浮き世の人が羨ましい。自分のかど口からいつも見る、あのひら底の高瀨舟になつてもいいから、その血緣につなぐ綱がぷツつり切れて、ここまであがつて來た肉體を、早く逆に野を過ぎ、海を越えて、いツそのこと、今しがた見たやうな西洋人の國へでも流し運んで呉れたらよかつた。

ことしもまたすがれが見えて來た柳並み木の川まで來ると、幅二間ばかりの板橋だが、これを渡るのがこの七條通り全體をでも渡り返すやうにつらい。それを渡つてから、川に添つて下ると、直ぐ自分の家だけれども、けふ、一たび決心して見棄てた家へ二時間とたたぬうちにまた這入るのが、一段とつらかつた。有名になどならないでもいいのに、惡い意味で有名になつてるところの柳原と云ふ部落にあるからである。

私かにこちらも見知つてる一人の船頭が、長い綱を引いて一方の肩にかけ、ちから一杯にからだをかた向けて、川ぶちをあがつて行くところであつた。が、こちらの不斷よりも着飾つてる黑地に赤縞のお召、から草に鳳凰を出した牡丹色繻珍の丸帶なる、よそ行き姿を見ると、それとなく冷かしの挨拶でもするつもりでか、俄かにこちらへ當て付けのやうな歌を歌ひ出した。

『むすめ島田　に
てふ〳〵　が　とまる、
とまる　筈だ　よ
花　だ　もの！』

『……』こちらは今島田を結つてゐないけれども、そしてその船頭はてふてふのやうに優しい人で

はないけれども、貧乏なそして獷暴さうな男の聲を聽くだけでも恐ろしかつたので、それをちよこちよこ走りに行き違つてしまつた。つい二三日前の思ひ出が浮んだからである。

自分は母の代りに古着をしよつて、或皮剝ぎの家へあきなひに行つた。すると、そこの常からいやらしいことを云ふ主人が僅か一圓六十五錢の物をきツちり一圓に負けろと云つた。五十錢までにしますと答へたけれども、なか〳〵買はなかつた。そして丁度誰れもほかにゐなかつたのをしほに、こちらを押し伏せて怪しいことをしようとした。その場はやツと免れたけれども、如何にも失禮なことには、

『穢多のくせに、生意氣や』と一と言、おのれがおのれを罵るやうなことを云つた。

『……』こちらは寧ろどちらが多く卑しい血を受けてるのか、考へて見ろと答へてやりたかつた。が、あんな向ふ見ずの人だから、またあとの祟りがこわいので、相ひ手にしないで引き上げた。

そのことも然し俄かに東京へ行きたくなつた一つのわけ合ひだが、――一間のこまかい出格子窓につづく、これも格子のくぐり戸を明けた時には、二時間または一時間半前までは母と共に住み慣れた家だけれども、何だか自分の家に歸つた氣はしなかつた。

『どなたどす』と云ふ母の聲が、おもてから眞ツ直ぐにとほつた土間の奥から聽えた。流しもとでちやらちやらと茶碗を洗つてる音がするのを見ると、今おひる御飯をすませたところらしい。こちらが歸つて來たとは知るまいから、よそ〳〵しい言葉振りであつたのは不思議でも何でもないが、いツそのこと、その通り母が自分の他人であつて呉れたらと云ふ氣が自分に動いてゐた。また、たとへ母が兒を產むにしても、亡くなられた父のやうな物を養子にしないでもよかつたものを！

『わたい』と、汲事のおもてでは優しくした。

『どないおしたんえ？』

『……』こちらは、もう答へはしなかつた。土間をなか仕切りのさる戸を明けて母のそばへ行くのも臆劫であつた。くつぬぎをおもて六疊へあがつたが、そこに積んである赤や黃いろの反物や古着の荷を見るのも亦いやであつた。

『赤い切れを見れば穢多村だと思へ』と云はれるほど、なんで皆赤なら赤、黃なら黃ばかりの原色を好きなのであらう？自分はさう云ふ色を見るだけでもけがらはしいやうに思ひながら、中の茶の間へとほつた。

かみがた風の家は、中の間がおもて窓からか、裏の緣がはの方からかでなければ日光を取れないので、いつもうす暗いのだけれども、けふはまた一層暗く見えた。いつも母を主人としてさし向ひに坐わる長火鉢のそばの場所とは遠つて離れてるところへ、お佛壇の前近く、ぺッたりと腰をおろした。

やがて母は、洗つた物を、流しもとにつづいて壁のおもてに押しつけてある戸棚へしまつてから、

あがり口の板の間と奥のふすまとで角を成してるところに近い火鉢わきの主人の座に着くと、直ぐこちらのもじ〳〵してゐるのを見やつて、『なんでそないなとこに坐わつてゐるのやえ、なア？』近く進んで來いと云ふ意味らしかつた。

『……』こちらは足も勞れてゐたが、氣づかれもしてゐた。その上、母に産んで貰つたことを心ですねながら、悲しいやうな、――そして泣きたいやうであつた。これまでにもこんな感じが出ないでもなかつたやうだが、――そして身うちのものは、亡き父をでも、また一緒にゐる母をでも、一切慕はしくもなつかしくもなかつた。それが――どうしたものか、けふに限つて――停車場へ行つて來てから、殊に甚だしく情けないやうに感じられた。自分のからだがお白いのやうに融けて、朝の顏を洗ふ水に流れて、おしまひには、そのにほひと共に消えて行つて呉れればよかつた。こんな機緣には二度と再び生れて來たくはない。自分の身をも心をも通り拔けた、ずツと、またずツと深い底の底から停車場で逢つた人と同じ年輩の兄さんばかりが、毛だ物の皮のにほひの全く取れた別人として、今は不思議にも自分の目の前に戀しく浮んで來た。物憂く、ぐツたりとして、自分で自分の置きどころがないやうなからだを、疊に左りの手を突いてささへて見たけれども、殆ど手ごたへがなかつた。自分は、もう、ここにはゐたくなかつたけれども、またどこへも行きたくもなかつた。ただ自分の聲を何か外の物からでも出る響きかと感じながら、それでも『鐵道の掛りの人に』と云つたのには自分の心に滲みとほる親しみをおぼえて、『問ふて見ましたら、東京へもうか〳〵行けまへん。』

『どうしてや？』

『惡いものが多いいさうやで。』

『廣い云ふ東京でもわてらをむごういちめるんかい、な？』

『……』ぎよツとしたことには、何でもないことをも母は自分らのことへ持つて行くのであつた。こちらは少しむツとして、『そないなことやあらしまへんが、な！泥棒や惡い車夫がをつて、不慣れなものをだますんやさうどす。』

『ほ！そら困つた、なア。』こちらを哀れんで呉れるやうな顏つきをしたが、さほどありがたくもなかつた。母は言葉をつづけて、『折角、わてらが儲けて溜めたお金を取られては仕よがない。』

『わたい、行きたうない！』こちらは自分で云ひ出したことを人から押し付けられてたことのやうに斷わつて、かしげた肩のゆすりに駄々を捏ねて見せた。

その駄々のわけは停車場でけふの人を見たことにあつたが、それが、しんみりと意識できると同時に、朝鮮の兄がどうしてゐるだらうと頻りに思はれた。

この時、丁度、人が來たので、母はおもて六疊の方へ出て行つた。すると、もう、こちらへは毛だ物くさいにほひがして來たやうで、直ぐそのお客さんは井戸のつるべのことをつぶれとしか云へない

連中の一人であることが分つた。それだけおのれからおのれの賤しいことを見せるのだのに、なんでかれ等は赤や黄の木綿を好いたり、つるべをつぶれなど云つたりするのだらう？　こちらはかれらとは、幸ひにも、育ちや學校が違つてた。兎も角も、高等女學校を三年までは一般の人と一緒に教育を受けて來たが、成績がよくなるに從つて憎まれ出したのがもとで退學したのだ。

友達を避けてゐたのは自分も惡かつたけれども、今となつては、たツた獨りでもいいから相談に乘つて呉れるものがあつて欲しい。

『正しい種さへ受けてお來やつたら』と、母は今更ら母の昔を後悔してゐるやうに容易に東京行きを賛成したのだが、自分としてはさうも容易でないことが分つた。

『あの鐵道案内の人のお云やした言葉では』と、さながら兄の新らしい寫眞をでも受け取つたほどのなつかしさを以つて自分はさきの名刺を右の手で帶の間から出して見た。それを貰つた時には氣がわくわくしてよくも讀まなかつたところが、堀川通り七條下る、下魚の棚專心寺かた植原庄三郎とあつた。それを先づ、母の方には見えないやうにして、ありがたく押しいただいて拜んだ。そしてその名刺を見つめながら考へて見ると、なに三郎とある以上はあと取りではなく、他家へ養子に行ける人だらう。それがここからさう遠くもない下魚の棚にゐるのだ！

そんなことを取りとめもなく繰り返して考へてると、疊に突いてた左りの手がしびれて來たので、臆却ながらそのかた向いてる半身を起した。そして右の手なる名刺をあわててもとの通りに押隱した。客が何かを買つて歸つたので、母が立ち戻つて來るのであつた。

『やめなら、べべを着かへはつたらどうや――さきも喰べんならんさかい？』

『……』こちらはどうでもいい氣でだが、おもい腰をも起して明り取りに明けてあるふすまの明きから奥の間へ這入つた。壁につけて箪笥が三さを並んでる、その一番緣の方に近い一つ――これには多く不斷着がしまつてある――の前に、まだ自分の銘仙の衣物がぬぎッ放しになつてゐた。『ほツたらかしといて』と、母の不精をつぶやいたが、矢ッ張り、このままどこかへ行つてしまひたいやうでもあつた。

障子を荒らかに明けて緣に出た。裏庭を越えて向ふを眺めると、樹木で一面にむツくりした東山にも色づいた葉が雲か霞のやうに縫ひ込まれてゐる。その南に當つて、また伏見のいなりさんの山が見える。秋の寂しい日光はさう云ふ見慣れた景色の中へもこちらを誘つて消え入らしめるやうだけれども、自分の心の目だけは――どうしたものか――あと戻りをして、自分の家や、川や停車場よりも後ろに當るところの魚の棚の方ばかりを見てゐた。

そして折角、斯う遠方行きの用意をした姿を再びこの部落にうづめ返すことがつらかつた。親切な相手さへあらば、どこへでもこのまま出奔してもよかつた。

喉のかわきをおぼえたので、奥の間から土間へ下り、その前なる流しもとの手桶から水を柄杓で口移しにした。その音が聽えたかして、母は、

『べべよごれるが、な！』

『子どもやおへん』と云つてやりたかつた。

『ままを喰べたらどうや、な？』

『……』こちらもとう〳〵その氣になつて、先づ帶を解き初めた。そしてぬぎツ放しのに着かへたが、そのあとをまたぬぎツ放しにして、自分で自分のお膳を拵らへて茶の間へ持つて行き、母の火鉢に近い板の間のところで食事をした。そして茶づけのお香々をぽり〳〵云はせながらだが、停車場で注意を與へて呉れた人の親切を、わざとにも落ち附いて、ぽつり、ぽつりと話して聽かせた。そして最後に、『年の若い割りにはしツかりしやべらはる人どしたえ』と讃めた時には、それでも、われ知らず、箸をくはへた自分の顏が赤くなつた。

三

夜になると、二人は一緒に奥座敷に這入つて、いつも別々な床で西をまくらに寢るのだが、母は必ずも簞笥に近い方をえらぶのであつた。

『若いものは泥棒が這入つて、引き出しを明けても知らへんさかい、な』と云ふわけの爲めだ。『泥棒云ふものは、な、簞笥の引き出しを上から明けんものや。上から明けたら、また締めてからでなければその下のが明からん。そやさかい、いツち下の引き出しさへ明かんやうにそのそばに寢てをりや、大丈夫なもんや』とも母は語つたことがあつた。

『……』今夜は、然し、高子自身には毎晩母と二人でし飽きた泥棒の心配などをしてゐる餘地もない程、自分の心を占領してゐるものがあつた。それは或物には違ひないが、何物であるかを自分ながらはツきり攫めなかつた。そのもどかしさに母ともいつもの通り親しく話をすることができなかつた。そして獨りで私かに考へつづけたのである、一旦思ひ付いたことを、けさ、とどこほりなく實行してゐたら、今ごろは、もう、長い旅の半分以上を行つたかも知れないと。

まだしたこともない旅と云ふものにも興味を持つてゐたのである。女學校に這入つてゐた時には、毎年修學旅行があつたけれども、そして多少それとなく同情を持つて呉れたお友達からその旅行に行つた方がいいと勸められたこともあるが、いつも皆と一緒に行く氣にはなれなかつた。父にかまはず、母の身うちから云へば、皆に對しても決して遠慮は入らないのだが、どうしても何だか馬鹿にされてるやうなのが面白くなくツて、いつも自分自身から遠慮だか敬遠だかをしてしまつた。そしてあとでは、その度毎に、思ひ切つて行けばよかつたか知らんとも殘念がつた。今もまたそれと同じやう

に惜しい氣がしてゐる。あのがや〳〵した停車場をあさ出た汽車は、今も進んで行きつつあるに相違ない。だのに、自分はおひるからゆふがた、夕がたから夜へと、もう再びは決心をしかねて時間をただあと戻りばかりした。

さきへ進む汽車とは自分は段々に後れるばかりで――それをばかり考へてると、丁度、試驗の時間に早いものは四五名も答案をすませて教場を出はじめたのに、自分はまだ問題を半分までも考へてないその苦しさ、つらさ、消え入るやうな思ひ。そこにも嵯峨やお室、さては高雄の紅葉に滲み込む秋の景色がゐ坐わりに自分の神經に現はれて――その方が矢ッ張り自分の氣を落ち付かせるやうでもあり、また落ち付かせないやうでもあつた。

『そないに思案ばかりしてたかて切りあらへんが、な』と、母も見かねて注意して呉れたのをしほに、こちらはほほゑみにまぎらせて聽き返した、

『ほしたら、どうしまひよ?』

『どないにと云ふて、わたいが聽かれても、仕よがないやないか』との答へであつた。『あんたのこッちやさかい、あんたが前の通りきめるだけや、な』

『……』こちらはさう云はれるとなほ自分の決心がぐらついて行つて、心がただむしようにかき亂れた。いッそのこと、やめるならやめろときッぱり親としての命令を發して貰ひたかつた。

『わたいは前の通りどッちやでもかめへん』と云つた母は、まだこちらの話の決着がつかないのに、寢床へ這入ると直ぐ、枕もとへ置いたランプをふき消してしまつた。

『……』こちらはわざと自分の床の中でそッぽうを向いてゐたのだが、闇の夜同樣の底もない國へ落ちて行くやうな氣持ちであつた。自分は今一度着て行くかも知れないと思つたので、いい衣物を重ねたままふすまの鴨居へ衣紋竹で掛けてある、その黑地に幅一分ほどの赤縞が一寸置きにすら〳〵と並んでるのを、つぶつて目さきの神經にちら付かせながら、あれを見て呉れた人には自分がまさか貧乏くさい家の娘でないことだけは分つただらうと嬉しかつた。尋ねて行きさへすれば、きッとまた親切に會つて呉れるだらう。と、蓋し、さう思ふには、あすは朝早くそれを尋ねて行つて見ようと云ふした心があつた。その樂しみを私かに樂しむやうに自分をあふ向けにして、うんとからだを延ばして見た。そして母にもそれを今からうち明けて置く方がよからうと考へたが、あたまを枕につけたままごろりとその方へ向いて、『おかはん』と呼んだ時には、笑ひごゑでだが、別なことを口に出した、『わて、矢張り東京へ行た方がよろしおすやろか?』

『さう、やなア』と、母もまだ眠つてはゐなかつた。が、返事は見當はづれで、相變らずもどかしかつた。『正しい子だねは欲しいけれど――おかねも惜しいし、な、若し取られでもしたら。』

『……』こちらは母の見當外れをそのはづれのままに理窟で押し付けて置かずにはゐられなかつ

た。無理を云ふ時のやうな聲なり憤りなりを以つて、『そんでも、あんたの家の爲めやないか？』

『そやさかい』と、母はむきになつて、『わたい、反對はしやへんやないか？』

『……』こちらはそれッ切り默つて、また横を向いてしまつた。當り前の親なら、年ごろの娘を仲へ這入つた人が達てどこそこへ呉れないかと云つて來ても、なか〳〵威張つておいそれとはやらないのらしい。それをうちではあべこべに親からのしをつけてやらうとするどころではなく、その娘自身をして自分の相ひ手を探させようと云ふ。それも止むを得ず、尤もなことでないことはない。

『むかし、手の指が六本ある人と人とが夫婦になつたら。その子に矢張り六本ゆびがでけたけれど、その六本ゆびと當り前の人とのあひだにでけた子は、ひとりが同じかた輪であつても、今ひとりは人並みであつた。さうしてその人並みの子には、もう、かた輪がでけなかつた。』

『……』こちらは母のむかしばなしを自分の子供の時から聽かせられてゐたのだが、それが自分の將來に對して最もこころ得て置くべきことであつたことが初めて分つた時には、自分は母と共に抱き合つて泣いた。

『泣かんすな、泣かんすな』と、母は慰めて呉れても、取り返しの付くことではなかつた。『これでもわたいの生れだけは穢多でも六本ゆびでもない。たッた一代か二代かでもと〳〵通りになるこッちやさかい。』

『そんでも、わてのからだは一生直らへんやないか』と云つて地團駄を踏んで泣きわめいたのであつた。自分は頼みもしないのに、自分のこの生きた血といのちとを生まれた時から穢してゐたのは母だと思ふと憎ましくもあり、恨めしくもあつた。そして斯う怒らないではゐられなかつた、『なんでまたあんたはそんなお父さんを養子にしやはつたんや？』

『もう、そないなこと云はんでおいてんか、みなわたいが悪かつたんやさかい。』母はなほその娘に向つて詫びごとを云つた、『あんたやあんたのにイさんにすまん、すまんおもて、毎日罪ほろぼしに佛さんを拜んでをります。』

『……』如何に佛さんを拜んでも、また幾たびすまないと云つても、然し、それですむことではなかつた。自分も親のならひをそのまま受けてお佛壇は――殊に、うちのは金ぴかのそれだから――大切にしてその前で念佛申すことを今でもしないではない。が、その佛壇の中には自分の父も這入つてゐることに思ひ及ぶと、その度毎にいやな反感が生じるのである。けれども、母はそのさきの所天と二度目の所天との戒名をいつも一緒に並べて唱へてゐる。して見ると、二度目のも――母の四十近くになつてからのであつたのだが――それほど慕はしかつたのであらうか？お負けにさきのには子がなかつたのに――尤も、ひとりは生れたが死んだと云ふに――あとので自分らふたりを產んだのだ。それさへ、自分らから見ればいやらしいのに！どうせ後家をとほさないでまた男を持つなら、當り前の

男を持つて呉れたらよかつたものを――。

その失敗を母は今やその娘をして取りつくろはしめようとしてゐるのである。そしてこちらも亦その氣になつてたのだが、その相ひ手が――東京までも行かないかツて――手近にありさうで、何となく樂しいのである。

『負けとく、負けとく！』母は出あきなひの夢を見たかして、寢ごとを云つた。

『……』こちらがぞツとするまで思ひ出させられたのは、こないだ、あきなひに行つて自分もすんでのことでまた母の二の前に落ちかけたことをだ。自分はそれでも無事に逃げて來たけれども、昔の母はそんなことからでも素性のよくない男と仲よくなつてしまつた。『みだらな人』と心に云はせて、母のぐう〳〵云ふいびきを目をつぶつて聽いてゐた。が、自分も亦ひとりで隨分自由な心になつてあたたまつた床の中に自分のからだを延ばした。そしていい夢を見て目がさめたり、また眠つたりして夜が明けてしまつた。

珍らしくも、母よりさきに起き出でて、先づ緣がはの雨戸をくり明けると、ゆふべからの樂しさに見渡される景色までが殆ど全く違つたやうに思へた。そして初めてこの家へ這入つて來たのかと思はれるほどのいい空氣に、氣がすが〳〵してゐた。

『なんでそないに早う――』母はこちらに先んじられたのを不平さうであつた。

『わて、けふ』と、こちらはこれまでに見せないゑがほを以つて、『鐵道へ出やはらんうちに、あの人に逢ふて來まツさ。』

『それもよろしいやろ、な。』

いつになくおかゆやお膳の手傳ひをして、速かに食事をすませると、高子は急いで自分の鏡臺に向つた。そしてひさし髪を結ひかへながら、いつも思ふことだが、鏡に映る自分のまる顏が圓いなら圓いでもツと正しくあつて呉れたらと思つた。初めは買つた鏡が惡いので、人の顏をうへしたにつぶしたやうに見せるのかと考へたが、母の顏をよく見くらべて見ると矢ツ張りそれなので、これも遺傳の一つだとあきらめた。けれども、けさはそれが笑ひを帶びてゐるのである。いつも靑いやうに憂ひを帶びてる眼つきにも、どことなく明るい光りがあつた。そして

『植原さんが』と、今やその名によつてその人を私かに思ひながら、『あんたのやうな、身なりも綺麗な御婦人』と云つたには、ただ身なりばかりでなく、顏のことをも云つて呉れたのだらうかと嬉しかつた。

きのふから重ねたままの衣物に手をとほして見たが、全く同じのでも面白くなかつたので、藤色地に白く秋草をこかまく刺繡した襟のを拔いて、襦袢は玉子色に源氏香を刺繡した襟のに換へた。帶もひわ色地に白く龜甲がたを織り出した博多のにした。そしてむらさき縮緬の三紋羽織をひツかけた。

そわ〳〵して出るのが自分にも氣はづかしかつたので、笑ひながら申しわけのやうに、

『あんじよう相談に乘つて呉らはつたらえいけれど、な』と云つて見た。すると、母はこちらが實際に東京行きそのことに知慧を貸して貰つて來るつもりだと思つてだらう、きのふの朝と同じやうに機嫌よく、

『まア、行て來なはれ』と答へた。

四

七條通りを眞ツ直ぐに西へ堀川に突き當り、川に添つて僅かばかり南へ下ると、その川はまた西へ曲つてゐる。そのかどの石ばしを渡ると、直ぐの白い練り塀が專心寺であつた。川ぶちから塀は十間ばかりもつづいて、その眞ン中に大きな門があつた。

途中から車に乘つたので、思つたよりも早く來た。そして車屋は門前で乘り棄てて歸してしまつた。この時刻にまさか、もう出てしまつたと云ふわけもなからうと思つたからである。蘇鐵や芭蕉の植わつてる庭を左りへ行つて、玄關で、

『きのふ停車場でお目にかかりました栗原高と申します』と云つて、小僧さんに先づこちらの來たことを植原さんへ通じて貰つた。が、自分の如きものに家に於いて會つて呉れるかどうかが俄かに疑問になつた。

『お會ひ致したうは存じますが、これから直ぐ鐵道へ勤めに出なければなりまへんさかい』と云ふやうなことにでもかこ付けて、體よく斷わつて來はしないだらうかと思ふと、自分のあんまり心を安んじて出て來たのが大膽すぎて、わざ〳〵の恥さらしではなかつただらうか？

母の話によると、部落の人はよそへ行つても弱みのある爲めに氣が引けて、初めから決して人の玄關の敷き居をまたがない。またいで叱られる位なら、前以つてそんな耻ぢのうは塗りをしない方がいと云ふ愼しみである。そしてその愼しみが男でも段々ひがみ嵩じて、

『お前は穢多だからきん玉が二つあるだらう』と云はれると、

『どう致しまして——矢張り、旦那がたと同じやうに一つほかありまへん』と、うそを以つて答へるさうだ。が、なんて、まア、女としては耻かしいことをこんな場合に考へ出したのだらうと思つて、自分の顏が赤くなつたのをおぼえた。若しや自分もさきの人に、

『穢多の子などにお目にかかることはでけまへん』とでも云はれたら——？

然し、——さうだ、自分は男ではない。さうだ、それから、自分がそんな女であることは分つてゐない筈であつた。また出て來て、

『どうぞお通り』と云ふその小僧さんに案内されて行くと、門から云へば眞正面に當るここの御本堂

に這入つた。

『……』むツと押し迫つて來た線香のにほひに、自分の素性をいつはる心が返り見られて、そら恐ろしい信仰をいつも通りに感じながら、お佛壇の前をとほつて、その横手に在る一室に達した。

『よう來て呉らはりました、な』と、言葉ぶりでは植原さんもかみがた者らしかつた。あわてて、まだ敷蒲團をかたづけてゐた。

『早うあがりまして――』こちらは思はずぺたりとその室の外の疊へ坐わつてお辭儀をした。

『さア、どうぞお這入り――どうぞ。』その促す手つきもその言葉と共に年に似合はず巧者であつた。

『……』この人はうちのにィさんよりは恐らく世間慣れてるのだらうと思ひながら、室の中の方へ膝をすり入れた。

『ちょッと失禮します、顏をあろて來ますから』と云つて、渠は齒みがき楊子と手ぬぐひとを持つて急いでおもての方へ行つた。

『……』まア、よかつたと、こちらは安心したやうな、またなか〳〵おそろしいやうな氣がして、獨りになつてもまだ取りのぼせてゐるのが直らなかつた。明けッ放しの坐敷を一番下座の太い角ばしらのわきから見渡すと、上座の方にすゑてある低い机のうへには、お經のやうな物がのせてある外に、小說本らしいのもある。この人も桃郎の『琵琶歌』を讀んだことがあるか知らんと考へて見るだけでも一層のなつかしみをおぼえた。

そのうちに、小僧さんが植原さんの食事を運んで來た。こちらの想像通り、渠はこの寺に下宿してゐるのであつた。まだ奥さんがなければ、そんな風にでもして貰はねばならぬだらう。もッとうちが近ければ毎日のやうに世話をしてあげてもいいがなと思つてると、多少は心が落ち付いて來た。そして自分の鼻には自分のお白いのかをりと共に襟もとから發する自分のあせばんだ肌のにほひが嗅ぎ取られた。すると、またこのにほひによつて自分の本性をあばき出されてはと云ふ恐れが出て、兩手できちんと自分の襟をかき合はせた。

『やア、失禮しました』と云つて、この時、渠は臺の附いた火かきに炭火を入れて自身で持つて來た。そして小さい瀨戸の圓火鉢に火を入れて、その方へ來いと無理に勸めたので、

『では、遠慮せんで』と、こちらも少しはあまえる氣味になつて近づいて行つた。

『けふは幸ひわたくしの休暇日です。』

『さよどすか？そんなら、ゆるりとお休みでけますところを、あんまり早うお邪魔しまして――』

『なんの、かまひません。ゆるりとお話を伺ひましよう。その代り』と、渠は色じろの福々しさうな顏に無邪氣さうな笑ひを見せて、『ちょッとその前に食事をさせて貰ひます。』

『ほしたら、わたい』と、こちらも向ふのほほゑみに釣り込まれてゑがほを見せながら、渠の一方の手を出した一人前のお櫃をこちらへ引き取つて、『お給仕致しまひよ。』斯う云つてしまつてから、初めて氣が付いて見ると、その蓮葉さに自分で自分の顏を赤くした。

『では、すみませんが――』渠もきまり惡さうに他方に持つてる茶碗を出した。

こちらが止むを得ず給仕をしてゐるあひだは、向ふも氣が詰つたかして、茶碗の受け渡しに遠慮がちな挨拶をするだけで、別に言葉はなかつた。それが丁度こちらのうちの居さふらふをでもしてゐるかのやうで、氣の毒にも見え、またをかしくもあつた。が、いよ／＼火鉢を中にさし向ひになつた時には、何とかこちらからここへ來たわけをほのめかしでもしなければならなくなつたので、

『どうでしよ、わたし、矢張り、東京行きはやめた方がよろしゆおすやろか？』

『さやう、さ、な――一體、あんたの悲しいわけとは何でしよう？』

『……』こちらはそれを云ひに來たのではないので、まぎらし笑ひをして、ただ『そこにそこがおして、な。』

『それをうけたまはらんでは、わたくしも返事に困りますが――』

『……』こちらは向ふが堅苦しく出ただけに一層返事がでなかつた。『えらう勝手のやうどすけれど、それだけは云へまへん。』

『では、そのことは別にして』と、少し興をそいだやうすであつたが、なほ渠は問ひをつづけて、『あんたは東京へ行て何をするつもりです。』

『女子大學へでもはいろおもひまして。』これは、然し、必ずしも望んでることではなかつたが――。

『そんなら、それで方針がつきましよう。あすこには寄宿舍もある筈ですから。』

『さよどすか？』自分ながら見當違ひのことだけれども、――だから、また、うはのそらで――同大學に關することを相談するやうにいろ／＼聽いて見た。ところが、渠にも詳しいことは分つてゐないのでか、いい加減なことを以つて答へながら、話を別な方へ持つて行つた。こちらもその方が氣がらくになつてよかつたので、渠と同じ程の年輩の兄があることなどを語つた。

『わたくしは、また』と、渠も云つた、『六人兄弟です。そのうちのうへ二人、した一人はみな俳倡です。わたくしも滋賀縣の或寺へ養子に貰はれて行てをりましたが、坊主になるのがいやでそこを逃げ出しました。』そして十四歳の時から苦學生であつたさうで、三日三晩も食はず飲まず中學へ通つたこともあるとのこと。それに、どうした間違ひか、役場の戸籍に生れたことが落ちてゐたので、小學校へやツと這入れたのが十歳の時からだから、今でも中學校に學籍を置きながら、兵隊をのがれて自活をしてゐるのであつた。

『をとこはんは皆自由でよろしゆおす、な――わたしの兄も朝鮮へ逃げて行きましたのどす。』それ

は、然し兵隊や坊主ぐらゐをいやの爲めではなかつた。どこまで逃げてものがれ難い血のつながりには、その實、自由と云ふものはないのであるが、そこまでは無論うち明けることができなかつた。

『男子は兎も角えらうなりたいとか、何か大きなことをしたいとかおもて逃げ出すのですが、あんたのは』と、渠はちよツと笑ひを見せながら、『おかアさんの我がままからでも逃げたいのやあらしませんか？』

『さうどすやろか？』

こちらも無理に笑つては受けたが、母を思ひ出させられるのが、一番つらかつた。それだのに、渠は何かにつけて段々とこちらの東京行のきわけを聽きたさうにするし、こちらはまたそれを云ひたくないしするので、話はいろんなことに飛んでも、結局は行きづまつてしまうのであつた。

手すりのついてる高い緣がはを越えて、綺麗に造つてある可なり廣い庭の隅に八つ手の花が白く咲いてるのが見えるその方へ、こちらは度々目をやつてると、その塀のそとから川の水の流れる音が聽えて來た。自分の家の前を流れる高瀨川のとは違つて、ちよろ〳〵と可愛い音だ。そしてそれが今自分とさし向つてる男の住むところによく釣り合つてると思ふと、私かにまた顏が赤くなつた。

『高あたりは、今えいでしよう、な。』

ちよツと目と目を見合はせたが、こちらも何か云はねばならぬ氣がして、つかない返事ではあつたが、

『えい庭どす、な』と賞めた。柳原の一番ひどいところへ行けば、喰つた魚の骨でも何でも、勝手の前や何かに、ところかまはずうち棄ててある。わるぐさいのは當り前だ。それに引き比べて見ると、ここのお寺などは、掃除もよく行き届いて氣持ちがよかつた。人並みに四方の紅葉狩りなどには少しも行きたくないけれども、ここにはもツと心を落ち付けてゐたかつた。

けれども、さう思ふほど心の落ち付きが却つてなくなつて來たので、苦しいやうな、名殘り惜しいやうな思ひをしていとまを告げた。

『まア、よろしゆおすやろ』と、すツかり京都口調で云つて、見送つて來て呉れた。山形縣鶴岡の生れだと云ふけれど、十四の時からかみがたに來てゐる爲めだらうか、なか〳〵こちらの氣ぶんにもしツくり合つてゐるところがあるのが嬉しかつた。が、『あんたは一體どこどす』と聽かれた時には、こちらの住所を知つてひよツこり來て貰つては困るので、

『間の町を七條から上つたところの小さい呉服屋どす』とばかり、うそを以つて答へた。けれども、分らない爲めにつけ加へた小さいと云ふことだけは今度逢ふた時には取り消したくもあつた。おもて向きはつまらぬ商賣をしてゐるけれども、昔から母の家に附いてる相當な財産があることは知らして置きたかつた。都合によれば、

『もツと正式な勉強をしたいのどすけれど』と云つた植原さんの學費ぐらゐは、こちらで出してあげてもいいと思つてるのであるから。けれども、間の町とだけはいつまでもそを云つて置く必要があつた。

その間の町の角をも曲らないで、なほ眞ツ直ぐに歸りを急ぎながら、自分は、もう、あの人を朝鮮のにィさんとは見ないで、實際に專心寺の植原さんとして思ひ浮べてゐた。そしてふときのふの朝から自分の兄を思ひ出してゐたのは、植原さんを見てからの自分の戀であつたことも分つた。

『まだおひるにはずツと前やけれど、ままなど喰べんかてえい。うちへ歸つたら直ぐ休んだろ。さうして床の中で十分に植原さんのことを考へたろ。』斯う心に云はせながら、橋を渡つて自分の格子ぐちまで達した。そして格手に手をかける前に、いつもする通り、後ろをふり返つて、誰れか自分の素性を探りにあとを附けて來てゐはしないかと見たのである。

すると、意外にも、植原さんその人が橋のたもとなる柳のそばに立つて、こちらを見てゐた！

俄かに天が落ち、地が崩れて來たやうな仰山なおびえを以つて、こちらは家のうちへ飛び込んだのである。

五

『誰れや！』

留守居がな　なるのでけふもあきなひには行かぬと云つた母も、びツくりしたかして、奥の方からけたたましい聲であつた。

『……』こちらはそれに對する返事をもできなかつた。鬼か泥棒でも這入つて來るのを防ぐやうに締めた格子戸にかきがねの輪をはめてから、奥に這入り、衣物をぬぐが早いか、箪笥の前に自分の床を出して、それにもぐり込んだ。そしてきのふからつもり積つた樂しい夢を見ようとしたのがあべこべにぐれてしまつたことを獨りで歎いた。

直ぐ歸つて來なかつたらよかつた――西山の方へでも車でまわつてもみぢでも見てゐたら！間の町など云はないで――反對の方の上御靈とでもして置けば！自分はうそを云ふにも、考へが足りなかつたのである。いや、からだはゐても心のゐない家などへ歸つて來ないで――直ぐ東京へ行つてた方がよかつたのだ！、いや、いや――さうだ、いツそのこと、この世に生れてゐなかつたらいいのだ！

年の割りに利口なあの人には、もう、何もかもこちらのことが分つてしまつただらう。多分、向ふへ歸つてから、渠はあさ喰べた物をもどすほどむなくそ悪く思つてはゐなからうか？こちらもまた、をなどの辯に初めて尋ねて行つたところで、而も若い男の人に向つて、よくも、まア、あんなに遠慮なく、お給仕などができたものだ。今更らながら、穴へでも入りたいほどで――向ふが鹽でもまいて

そのあとを清めながら、ぷり〳〵怒つてるやうすまでが、如何にも氣恥かしく想像される。

それが最も殘念で溜らないのである。いッそ行かなかつたらよかつたのにと思ふと、自分のそんなことを考へたこころ根までが憎ましくッて、あふ向けになつた自分の胸を兩手でかきむしりながら、からだを左右に振りもがかせた。そしてくやし涙が枕の方へとめどなく流れた。

『ぼんまにどないしたんや』と云つて、母はまたこちらの枕もとへやつて來た。これまでに、もう、二度も來て、いろ〳〵聽いて呉れたのだけれども、こちらの胸が一杯になつて返事をしなかつたのだ。この三度目にも亦、母は斯うつけ加へた、『けたたましう 歸つて來たばかりで、何もやうすを云はんで？』

『……』こちらは自分の母の心配さうな顏を下から自分のひたへを越えてにらむやうに見つめて、矢ッ張り、默つてゐた。

『また、男にけたいなことしかけられたんやないか？』

『それどころやおへん！』もッとひどい目に會つたと云ふ意味を不平たッぷりに聽かせたのであつた。

『ほしたら』と、母は案外にもその黑みを帶びた皺くちやがほに若返つたやうな恥かしみをも見せて、こちらの意味を取り違へたらしい、『却つてこッちやに都合よろしゆおしたやおへんか——向ふの男はんが殘多やない以上は？』

『……』まだ東京へ行つて來たのではないと叱つてやりたかつた。が、間違つてでも自分らの望みのことに云ひ及ぼされたので、こちらもちよッと顏が赤くなつて、『そないなこと云ふてやへん！』

『ほしたらなんや？』母はまたもとの通りたよりなささうになつた。

『まるでちどてるやないか？』こちらも氣がむしやくしやしたので、かけ蒲團をはねのけて敷き蒲團のうへに半身を起して坐わり、目は引きつづいて母を見つめながら、『あんたは、な、ようも、ようも、わてをこないなやくたいな人間にお產みやした、な！あの人がわてをけたいにおもて、あとをつけて來たやおへんか？』

『ほ！なんでや？』

『なんでや！』と、こちらは母の呑氣さうな言葉を押し伏せるやうに繰り返してから、『そないにおとぼけやして濟みまッかい、な？』

『つけて來たら』と、母はこちらの目と言葉とをさけるやうにして、『ちよッと横へはづしやはつたらよかつたやないか？』

『誰れがあの人のついて來たのを知つてます？』

『あんたやないか？』

『わて、知つてやへなんだもん！』

『ほしたら、もう、あきらめるより仕よがないが、な。』母もこちらの心を受けたやうに失望のやうすであつた。

『間の町と云ふて置いたんどすけれど、こツちやの知らへんうちについておいでやしたんやさかい。』

斯う云ひながら、こちらはまたどろりと横になつて、蒲團をかぶつてしまつた。ひる御飯を取れと勸められたのをも斷わつた。そしてこちらのぬぎ棄てて置くよそ行きは、もう、殆ど全く用もなくなつたと思はれるのだが、母が頻りにたたんで呉れてるのを枕のうへから見てゐた。

母に注意される前からあきらめてはゐるが、なほ何となく悔し涙がこぼれた。この着物を着てゐた自分のあとをつけて來た人が憎いやうでもあり、またこの着物と共に可愛いやうでもあつた。

『またいつでも來て下され』と、親切ぶりを以つて云つたではないか？

『……』その人が直ぐついて來たとはあんまり意外でもあり、あんまり早わざでもある。而も橘のたもとの、柳がもとに――！何だか、曾て母と共にこツそり聽きに行つた淨瑠璃『三十三間堂』の文句にでもありさうだ。お柳はやなぎの精であつたが、あの人の姿もひよツとすると自分を思つて呉れてる精神がそツくり現はれたのではあるまいか？それならそれで、おそろしいやうだが、自分の思ひは叶ふわけだらうけれど――

またさうでなくとも、自分の思ひが途々俄かに切になつたところから、わが身でわが身の思ひをまざまざとかたちに見せたのではなからうか？鳥うち帽を眞ぶかにかぶつた白い顏がこちらと目を見合はせた時に、にツこり笑つたやうであつた。そして手を帽子の方へ擧げたのは見えたが、その時、實際に脫帽したかどうかは――こちらが家へ逃げ込んだ爲めに――見きはめなかつた。今一度出格子からこツそりのぞいて見て、ほんとの人間であつたか、それとも幽靈ではなかつたかを突きとめたらよかつたものを。今更ら惜しいやうな氣がした。

それは兎もあれ、あの人とこれから交際して親しくなればなるほど、どうせおしまひには住所を云はなければならぬだらうと思ふと、繼どころか、ただの交際さへも斷念するより仕かたがなかつた。

『わたくしはこんな武骨ものですけれど、あんたさへおつき合ひ下されば、これから末長うおつき合ひ致しましよう』と云はれたことも、ほんの糠よろこびであつた。

『一筆申しまゐらせ候。けさ程はいろ〳〵お話を承はり、ありがたく存じ候へども、母とも相談の上東京行きはやめに致し、大阪の方へまゐることに相成候へば、もう、お目にかかることもなくと存じ殘念に候。何卒おからだを御大事に――栗原高子』と書いて、そのハガキを夜になつて自分で郵便箱へ入れて來た。そして母には別にそれに就いて何ごとも語らなかつた。どうしてもいま〳〵しかつたからである。

その翌日、かの女は自分でとう〳〵床を出なかつた。尤も、前夜、少し隔たつてる郵便箱まで秋の夜冷えに對する何の用意もなしに出かけたので、少し風を引いた氣味でもあつた。そのうちに、長火鉢のそばに臺ランプの光りがついたことがこちらのふすまの明きから見えた。母はけふのことを終はつて、佛壇のお燈明をいつもの通り改めたやうすである。と、やがて例の念佛が初まつた。また二人の旦那の佛名をも唱へるのだらうが、こちらもいつか自分の養子を貰つて死に分れたら、それを二度目のも同樣にして、植原さんのと一緒に念じてやらうなどと考へてゐた。

すると、そこへ尋ねて來て呉れたのは思ひも寄らぬその人であつた。

六

思ひも寄らぬその人が尋ねて來て呉れたので、――それは、もう、その聲で分つたのだ、――高子は今まで全く失望の爲めにぐツたりしてゐた自分をはね起して、先づ茶の間とのさかひのふすまをこちらから締めてしまつた。そして算筒の上にあつた手燭に火をともして姿見に向ふと、自分の圓い顏は嬉しさうににこにこしてゐた。相變らず深いゑくぼが兩方の頰に出た。

お念佛を中止して挨拶に出た母は一旦立ち戻つて來たが、こちらの樣子を見て取ると、何も云はないでまた出て行つた。そして

『あんたが植原はんどすかいな、――まア、おあがり』と云つて、渠を茶の間へ案內して來たけはひだ。

『……』こちらにはそのけはひが實際に見えるやうな聲さとなつて、心の目から胸にまで滲みとほつた。そして今夜の母ほど恐らく世にありがたい人はなからうと云ふ想像をゑがいた。

『ようこそ尋ねて來ておくれやした、な』と云ふ母の言葉が火鉢の坐からまた繰り返された。すると、渠の聲で、

『けふ、勤めから歸つて見ましたら、おハガキが來てをりましたので――』

『ほ――、あんた』と、母は優しくこちらへ呼びかけて、『わざ〳〵お呼び申上げたんかい、な?』

『ちがひますが、な――』こちらは假りの化粧を急ぐ爲めにこなお白いの毛ばけを頰に叩きつけてゐたが、自分ながら俄かに晴れがましいほどの聲になつてるのをおぼえた。『わて、もう、お目にかかれんかおもてましたのどす。』

『さよか?――娘は、もう、お目にかかれんかおもてましたのどすやさうに、まア、ようおいでやしとくれやしたえ、なア――こないなむさくろしいとこへ。』

『いえ、どう致しまして――』

『上御靈にをりましたんどすけれど、な、あきなひの都合でこないなとこへ引ツ込みまして。』

『……』こちらは十年あまりも以前の事をさう初手から辯解しないでもいいのにと思つた。却つて自分らの弱みを自分から白狀するやうなものではないか？

『御靈のあたりもよろしいです、な。』

『こないなとこに比べましては、な。』

『……』しツと、こちらは靜止でも命じたかつた。たとへこんなところにでも、若し當り前の、そして相當なをなごがゐると見えるものなら、先づ、一と通りは、かまひはしないではないか？丁度、鼻が夜の光りに成るべく高く見えるやうに、お白いのこなをそこへつけてるところであつた。

『むさくろしいとこどすけれど、まア、ゆるりとして行てお呉れやし。』

『ありがたう。』

『よんべから風を引いたとか云ふて、寢てましたのどすが、な、今起きて來まツさかいに。』

『御病氣ですか？』

『へい――少し風を引きまして。』

『……』こちらは自分のことが云はれてゐるのをもとの子供に立ち返つた氣持ちで聽いてゐた。が、やがて銘仙の不斷着に着かへると、今度は風引きを大きく見せて粗末な假り化粧の巾しわけにする爲め、きのふも持つて行つた白の絹ハンケチを喉に卷いた。そしてそよにも劣らぬ算筒が三さをあることをそれとなく見せるつもりで。手燭をつけッ放しにしてふすまを明けた。

『おう〳〵』と、母はこちらを見向くが早いか、力を添へるやうに、『おめかしやしたこと！』

『おいでやす。』こちらは先づにッこりして見せてから、渠が火鉢の長さの方のかみに坐わつてるその後ろをまわつて、母の坐と相對するがはの、それも少ししも手へ來た。そして疊のはづれの板の間へ渡つて坐わり、渠と少しはすかひに向ひ合つた。うちのことだけに、きのふほどはきまりも悪くないが、努めて平氣に見せようとしたその笑ひ聲には自分ながら顫えをおぼえながら、『風を引きまして、な、こないな風をしてます』と、渠と母とを等分に見つつ手を突いた。『きのふはお邪魔致しまして。』

『なんのお愛相も無うて失禮でした。』

『……』こちらが見ると、男の堅苦しくさう云つた目つきにも可愛味があつた。『わたし、嬉しゆおした、わ、――あんたがゐてて。』

『丁度休暇でして。』

『そんで』と、母はこちらを見て、『ゆツくりして來たんやな？』

『いろ〳〵お話も伺ひましたのどす、え』と、こちらの代りに渠が受けた。しッかりした返事で、なかなかうち解けてないけれども、その目が母とこちらとの孰れに向くかと見たら、矢ッ張り、こちらへ向いた。

『……』目と目とが出くわすと、こちらはまた微笑を促されたが、あとさきを考へるひまもなしに、斯う云つた、『あんた、どんな小説をお好きどす？』

『なんのこツちやい、な、出しぬけに』と、母は口を入れたが、こちらにはそれが聽き漏らして殘念であつたことの一つだ。

『いろ〳〵讀みましたが――』と云つて、渠はちよツときまり惡さうにこちらの視線をさけるやうにしたが、

『そのうちで』と、こちらはなほそれを目で追つて行つて、『何がおもしろおした？』

『さうです、な――』渠も亦こちらを見た。

『……』あれであつて欲しいと思つたら、果してさうであつた。

『琵琶歌でしようか、な。』

『ほんまに、なア』と、こちらは喜んで、『あのさとのは可哀さうやおへんか？』

『わたくしはまたあのさとのの兄にも同情します。』

『……』こちらには、渠がさう重ねてあの兄弟に同情して呉れるのが結構であらねばならぬのであつた。同じやうにこちらも特殊な部落の血を受けた兄弟であるから。ところが、今、渠がさう云つたには、こちらの素性を既にそれと判斷して來たのではないかと云ふ疑ひが出たので、自分ながらまづいことを云ひ出したものだと後悔された。で、聽きたい聽きたいと思つたことではあつたが、それツ切りで話を他に轉ずるつもりで、『「ほととぎす」も可哀さうな小説どす、な。』

『然し』と、まだ渠は同じことにとどまつてゐて、『あの不如歸はあんまりあま過ぎて、わたくしにはつまりませんが、琵琶歌の方は多少深刻で、意味ある同情を引き起します。』

『……』こちらはそれにしても穢多と云ふ言葉を一邊でもここで使つて貰ひたくなかつた。渠もそれをそれとなく遠慮してか、ただ

『兄にせよ、妹にせよ、あア云ふ境遇に置かれての悲しみなり、憤りなりは』と云つて、『讀む者の心の底から眞に同情を起させます。單にしうとの爲めに仲のよい夫婦が引き裂かれて、浪子が肺病になつて、死ぬなんて、わたくしには作者がただあり振れた感情をもて遊んだやうにほか思はれません。が、さとのが特殊な境遇に生れた爲めにあんな悲慘に落ち入つたのは、その周圍や社會が惡かつたことになつてをります。』

『さうしますと、なんどすかい、な』と、こちらもつい釣り込まれて、『さとのはんが所天のおさんにけたいなことをしかけられたのも、生まれが惡かつた爲めどして？』

『いや、わたくしの考へでは、生れその物に善惡はありません――所天のお父さんが嫁さんの生れを卑しみ馬鹿にした爲めに、あんなことをやつて見ようと云ふ氣になつたのです。』

『……』こちらはこの時自分の母が佛壇の方へ目を向けてたのを自分の父を思ひ出してるのかと見て、いやな氣になつた。少し自分の顏をしがめながら、『さう書いてありましたかい、な？』

『はツきりとは書いてなかつたかも知れまへんけれど、わたくしはさう解釋します。ところが、わたくしの生れた國では、あア云ふ人を特別に區別せんで、矢張り同等につき合ひますので、わたくしも子供の時からそんな人を習慣として卑しんだり、馬鹿にしたりして來ませなんだのです。』

『それがほんまどす、わ』と、母は口を出した。その癖、母も穢多と云ふものをいやだ、いやだと口ぐせのやうに云つてるのである。そしてそれがこちらにも自分の當り前のやうに思へてるのだ。穢多を所天に持つた母は勿論、自分はまだ半ばそれでありながらも、その穢多を嫌つてるのに、この人だけがそれを何ともないと云ふのが俄かに興ざめて不思議であつた。

『……』ちよツと自分は母に目くばせしたのである。その意味は、渠がきツとこちらをそれと見てゐるに相違ないのだから、注意せよと云ふに在つた。が、母はさう取らないで、自分がうちの系圖を見せてあげろと云つたことに取つたらしい。

『世間の人はみな身勝手なもので、わたいらがこないなとこに住んでをりまツさかい、矢張り穢多の仲間のやうに申しますけれど、うちには立派な系圖があるのどす、え』と云つて、こちらがわざと明け放して置いた奥の間へ這入つた。そして箪笥の引き出しへ行つた。

『……』あすこを見て奥れいと渠に云はぬばかりにして、こちらは『お母はん』と呼びかけた、『來る時に蠟燭を消やしてお奥れやし。』

『あんた、ほんまに大阪へお行きですか？』

『えい――いいえ――』こちらは何と云つて渠の問ひに答へたらいいのかにまご付いた。別にそのつもりがあつたわけではなかつたので、病氣にかこ付けて、『こないに風を引いてをりましては、な。』

『それは直ぐにおなほりでしようが――』

『……』では、生まれ付きの穢れはさうでないと云ふのか？

『東京にしても、大阪にしても、都會ですから、な、うか〳〵行くとあぶないですよ。』

『さよどすか？』こちらは母の立ち戻つて來る方へ目を轉じて渠の視線をさけたが、渠の可愛い口もとに見えた微笑はこちらの胸まで達した。

『これがうちの系圖どすが、な――よう見てお奥れやす』と云つて、母は渠の向ふがはに坐わつた。そしてお經のやうに折り本になつてるのを開らいて、熱心さうに說明をした。先祖は山科の宮つきざむらひで、それから分家してこの栗原の家は母が五代目である。代々、上京室町の上御靈に反物屋をしてゐたが母の代になつてから少し商賣が思はしくなくなつたので、得意さきを別な方面へ廣げる爲めに、餘り人の好きぬ柳原の部落へも手を出した。それが人から卑しめられる初めとなつた。

『……』こちらもそれは本統だから本統だと云ひ張へたかつた。

『そんでも、な、わたいはあきなひの爲めやさかい、人が何と云ふてもほたらかして置いて、夏でも冬でも、反物を脊中に負ふて來てたのどす。そのうちに後家になりまして、二度目の養子を貰ひました。』

『……』それも事實には違ひなかつた。

『ほしたら、どうどす、世間ではそれが穢多や云ふやおへんか？その系圖にも書いておす通り、立派に大阪の人どすのに。』

『……』系圖には無論、大阪府西成郡云々なる農家の次男としてあることはある。けれども、それは自分らには眞ッ赤なうそであることが分つてゐた。母が父にせついて、誰れかにさう書いて貰つたのだとは、さきに母が自分に向つて白狀した。

『世間と云ふものは、何も知らんで知つたかぶりを云ひまッさかい』と、渠は答へた。

『さよどす、な。』母はそらとぼけて、『それがこの兒や兄の生まれました時にはひどなつて、御靈の神主さんまでがお宮まゐりをさせて呉らはらなんだのどす。太政官のお布れで穢多非人の稱を廢すと云ふことがおすのに、その穢多でもないわたいらの兒に氏がみさんを持たせて呉らはらんのどす。』

『……』それも、然し、そんな世間としてはありがちなことだと、こちらにはまた寧ろ母に對する反感が起つた。母は非人でも何でもないのに、わざ〳〵考へもなく穢多の兒を產んだのではないか？

『それはひどいです、な！』渠の斯う受けた言葉が特別に力づよかつたので氣が付くと、その顏には赤みを帶びるほどの昂奮が見えた。

『……』こちらには、渠のその昂奮と自分の反感とが何かに於いて一致したやうに感じられた。

『佛敎では』と、渠はその言葉の力をつづけて、『殊に眞宗では決してそんなことは致しません。』

『……』さうだ、信仰から來る一致だらうか？

『そやさかい』と母は喜んで、『わたいらはいつも阿彌陀さんを拜んでますが、な。』

『わたくしも眞宗ですから、彌陀の歸依には贊成します。』

『あんたもどすかい、な？』

『……』こちらには、然し、母がさう正直さうにそんなことをうち明けていいか、どうかと云ふことを考へられた。この部落に住んでゐて、さう眞宗熱心と見えれば、きッと部落の仲間に見られてしまうにきまつてゐた。

『ほんでも、な、世間にはあんたのやうにえい人ばかりゐてて呉れまへん。わたいらは町內の人にいぢめ拔かれまして、よんどころ無う、こないなとこへ引き移りましたのどす。けれど、な、あきなひの都合どすさかい、決して穢多である爲めやおへん。』

『十分御同情申します。』

『……』こちらには、母ばかりが急いでその身をいさぎよく云ひぬけようとしてゐるかのやうにしか取れなかつた。

七

『わたいの家は決して機多やおへん』と、母は誰れにでも少し親しみを感じて來ると必ず云ふのである。

『……』けれども、こちらの考へではさう〳〵辯解ばかりしてゐたくない。人がお前は馬鹿だぞと云つたに對して、いいや、わたしは馬鹿ではない、馬鹿ではないと云ひわけしてゐたツて、それが必ずしも信用を恢復する道にはならない。その上、それがあまりくどくなると、却つてあべこべに自分からその馬鹿と云ふことを證明してゐることにもなつてしまうだらう。

そしていよ〳〵そのやうなまづい結果になつたとしたら、困るのは母ではなく、その娘なる自分ではないか？自分の母には少しも賤しい血がまじつてゐないのだから、たとへ自分の父の血すぢが賤しかつたと云ふことが皆に分つたとしても、母自身には何ともないかも知れぬが、自分にはそれは最もいま〳〵しいことである。それも、自分が阿彌陀さんに向つた時は、隱し切れないことであるから諦らめてるが、せめては世の中の人にだけなりと隱しおうせればと思ふのである。

だから、一番おしまひのところだけをうそで堅めた系圖ではあるが、ただ一應は見せるのもいいけれど、それを種にくどい辯解はさせたくなかつた。

『……』植原さんはまた植原さんで、こちらが見てゐると、系圖の中に何かのけがれをでも見つけ出さうとするかのやうに、頻りにそれを繰り廣げてゐるのであつた。

『そんな物、見たかて仕よがおへんが、な』と、こちらは渠に向つて云つた。

『なにを云ふのや？』母はこちらを咎めたが、なほ渠に向つてまことしやかに押し付けるやうに、『系圖と云ふものは家のたからどすさかい、な。』

『お母はんもそないな物しまひなはれ』と、こちらはまた母を押し付けるやうに答へた。『もツと何かおもしろい話でもしまひよ。』

『あんたは家のこととなると、よういやがらはります。』

『……』當り前ではないかと思つた。が、默つてゐた。

『これなら御立派です』と、渠は廣がつたのを折り疊むが早いか、それを兩手に持ち擧げてちよツと押し戴いてから下に置いた。

『……』こちらはその仕ぐさを見て、さきに渠が坊さん育ちだと云つたことを思ひ出した。そして

若しそれが渠の本心から出た仕ぐさなら、こちらがうその物を拜ませたのが勿體ないとまで思つた。そこに二人が信仰なり愛なりの一致點を見付けて、お互ひに全くうそ拔きなほどの親しみを感じたかつたが、こちらは一方にそう云ふ正直な心が出ただけ、また一方には私かに殆ど近づけないほどの隔たりができてゐた。

けれども、母は渠をそツくり信用したらしく、

『まア、さう云ふわけどすさかい、な、あはれな親子やおもて、末長うつき合ふてお呉れやすや』と云ひながら、渠のそばを離れてもとの坐へ戻つた。

『あんたがたさへお構ひなくば』と、渠もその氣になつたやうに、『わたくしはこれからいつでもあんたがたのお力にも、御相談相ひ手にもなりましよう。』

『さうしてお呉れやしたら、この兒も喜びまひよ――兄がひとりおすけれど、遠方へいとりまツさかい。』

『さうやさうです、な。』

『もう、お聽きやしたかい、な』と、母は嬉しさうに笑つた。『えらうおしやべりの兒やさかい。』

『……』こちらはそれでもあの時そんなことしか話の種がなかつたのであつた。今夜だツても、折角來て貰つてゐながら、最早や何も云ひ出すことがないやうにもどかしかつた。第一、上茶を入れて出したのだが、渠が飲んで呉れるかどうかを心配した。それから、飲んで呉れても、いや〳〵飲んでるのではないかと思はれた。

次ぎに、どうせ自分のこの思ひはぢかにうち明けられないので、信仰のことにでもかこつけて段々進めたいのだが、世間のこととは違つて、信仰のやうな、自分に眞面目なことは、いつはりを抱く身の口に出しては畏れ多くて、渠と共にはとても語り切れなかつた。

それに、また渠も眞宗の信徒だと云ふことに照り合はせて考へて見ると――こちらを穢多だと知りながら――そして知つたに相違ないのに――尋ねて來たのが既に不思議な上にも、こちらと共に容易に昂奮したり同情したり、平氣でこちらの茶を飲んだりしたのが、いよ〳〵以つて疑へば疑はれた。この種族の人で坊主になつてる人も多くあると聽いてゐるのだ。それが坊主をいやだと云つて逃げて來たからとて、若し當り前の家なら、若い者をさう獨りで貧乏させて置くわけがなからう。

『あんたの悲しい云はれたわけはお母アさんのお話でざツと分りましたけれど、東京なり大阪なりへ行て何を勉强するつもりですか』と、渠が尋ねたので、

『あんたも鐵道にゐてて』と、こちらも問ひ返して見た、『何におなりやすのどす?』

『實は』と、渠は正直さうに答へた、『もツと學問をしたいのですけれど、親が學費を出して呉れませんので、あア云ふことをやつてをります。』

『お父さんがおかねを出して呉らはらんのどすかい、な？』

『さうです』と、渠は今度は母に向つて答へた。『逃げ出して來ましたので。』

『若い者はみな親から逃けたがるものどすかい、な？』

『さうきまつたわけでもありますまいが――』

『……』その逃げたと云ふことも亦こちらのと同じ事情ではなかつたのだらうか？して見れば、こちらの思ひは全く破れてしまうわけだ。東京への希望が渠を知るに至る手續きであつたとすれば、大阪へは――都合によれば――渠と一緒にでも行きたかつたのである。

『あんたのやうなえい人に――親がかねを送らんとは、な――』

『……』うちで出してあげたらどうだとも云ひ添へたかつたのだが、あんまり云ひたいこと、聽きたいことが胸一杯になつてゐて、却つて一つも口へは出せなかつた。

『そんでも、あんたは男はんやで結構どす、わ』などと、母はこちらの心も察しないで、こちらのやツと物を云はうとし出す腰を折つてしまうことがたび〳〵であつた。

『……』こちらは母のおしやべりにむツとしてゐたので、渠が京都と云ふところは見物の箇所が多いと語つた時、『一度あんたと一緒にもみぢ見に行きまひよかい、な』と云つて見た、『お母はんはほたらかしといて？』

『それも結構です、な。』

『逃げられるよりやましどすか』と、母も仕かたなしのやうに他の二人と笑ひを共にした。

『……』一度は何とかして、誰れもほかに人がゐないところで、兎に角、心と心とを突き合はして見たかつた。

『けふはこれで失禮致しますが――』と、渠はやがて歸り仕度になつた時、顏を赤くしてゐた。

『まだよろしゆおすやろに。』こちらも赤い顏になつたやうで――斯うなると、何だか、もツと止めて置きたいのであつた。渠も一旦坐わり直してかたちを正したまま、もぢ〳〵してこちらを見つめて、

『あんたは、しかし、ほんまにいつ大阪へお行きです？』

『……』まだそのことを心配してゐるのかと思ひながら、微笑にまぎらせて、『實はわたい、どこへも行きとおへんのです。』

『それではまたお目にかかります。』斯う云つて、渠がいよ〳〵いとまを告げて歸つて行つたあとを、母は矢鱈に讃めて聽かせた。そして、

『わたい、あの人すツきや』などと繰り返した。

『……』こちらは母の相ひ手になるべき人でもないのにと思ふと、その席に母のゐたのが殘念であ

つた。そして母があの人に對して好き嫌ひを云ふのさへ妬ましかつた。今や云ひたいことも云はないですんだその自分ながらの不平の持つて行きどころがないのを、ここにゐない渠のうへに持つて行つて、『そんでも、な、あの人は矢張り穢多かも知れへんで。』

『どないしてや？』母はその目を一杯に圓くした。

『でも、貧乏なうへにあんまり話が平氣やさかい。』

『あ、そや〳〵！わてもちよツとさう思はんでもなかつた。』

『……』さうだ、さう思つてをれ、思つてをれ！そのあひだに、こちらは獨りで渠のさうでないところを十分に考へて樂しんでゐたいのであつた。

八

それからと云ふもの、高子は自分が世間に對する恐れや戀しさを全くたツた一人の植原さんに集めてしまつた。

自分は自分の周圍の世間に對してはこれまでの經驗上恐れや憎しみを持つと同時に、自分から遠いところの世間を想像して、何となくそれが戀しく慕はしかつた。ところが、この二箇の別々な世間が今や自分に一つになつて、憎みにも慕はしさにも植原さんばかりがただ一つの相ひ手になつた。一方では、若し

『あんたほんまに穢多でしよう』とでも渠が云ふなら、こちらも直ぐ

『あんたこそ、そやおへんか』と云ひ返してやる覺悟は用意してゐながら、他方ではまた三日と置いて渠の顏を見ずにはゐられなかつた。そしてこちらが渠を尋ねて行けない時は、渠に必ずこちらへ來て貰つた。

そしてこちらの不思議なことには、渠が段々と子供ツぽく見えて來たのである。初めはその年の割りになか〳〵おとならしい物の云ひかたをしてゐたのが、親しくなるに從つて、その四角張つた他國ものらしいかどが取れて來て無邪氣に京都人そツくりの言葉使ひをすることもある。

或時、ひるまはうちにゐたが、

『その代り、けふは夜勤どす』とのことであつたので、夜、こちらもそれとなく遊びがてら停車場へ行つて見た。すると、他人に向つては鹿爪らしい言葉を使つてたのが、こツそりこちらのそばへ來て、訴へるやうに『何かうまい物たべとおす、な』と云つた。可愛くもあり、氣の毒でもあつたので、こちらもこツそりようかんを買つて來てあげた。すると、また、それが役員中のおほ評判になつて、

『あのをなごは何ものや——何ものや』と、四方八方から渠を取り卷いたさうだ。そのことをあとで

渠は面白さうに語つて、

『あれは僕のねえはんや云ふてやつた』と嬉しがつてゐた。

『ほんでも、な、わてのこと云ふたら聽きまへんさかい。』斯う念を押したのには、こちらが柳原のものであると云はれたくなかつたのは勿論、またこちらが渠自身に向つてほれてるのだともだ。但し。こちらは毎晩夢にまで見てこの情を折りある毎に示めしてはゐるのだけれども、肝腎の渠がいつも氣付いて呉れないのである。それほど子供でもあるまいにと思ふと、却つて憎らしくもなるのだ。いや、その憎らしいと云ふことを今一歩進んで考へると、渠はこちらをてツきり例のだと見て、まだなか〳〵脅戒してゐるのかも知れなかつた。

一度もみち見の約束を果す爲めに、二人であらし山へ出かけた時、嵯峨停車場を下りて川添ひをのぼつて行くと、どうしたわけか渠がずん〳〵さきへ行くので、こちらはそのあとをちよこ〳〵と急いで追ひ付いた。すると、その時丁度意地悪さうな顏をして行き違つた女の子がこちらに向つて、小癪にも、

『よう似合ふてます』と冷かした。

『……』見つきでは何の似合ふものか？こちらは兎も角お召しを來てゐるのに、渠は木綿着だ。やがては何か一ついいのを買つて進上しようと思つてるのだけれども、そして母もそれに同意して呉れてるのだけれども、まだ渠に向つてそれを云ひ出す折りがないのであつた。が、この時思はずひやりとしたのには、そんなことの不釣り合ひを考へたばかりではなく、こちらをまた見知つてるものではないかと思つた。が、こちらをふり向いた渠と顏を見合はすと、渠も亦ちよツと耻かしさうにもみぢ色になつてゐた。それを見て、こちらのひやりにも亦熱が加はつた。察するところ、渠はあんな女の子がにや〳〵と底意地悪い笑ひを見せながら向ふからやつて來たので、それを恥かしくツて足を早めたのであつたらしい。

『……』うひ〳〵しい渠も物を云はないで進んだ。

『さくらの時とはちがて、秋は矢張り人もすくのおす、な。』こちらは全く別なことにかこつけて、やツと口を出した。が、心では男と一緒に並んで歩いてのるが一番嬉しかつた。若し自分が卑しい素性だと云ふことをうち明けても、なほこのつき合ひができるものなら、――そしてその爲めに却つて二人の情愛がしツかり結び附くものなら、――一度渠に何もかもすツかりうち明けて共に泣いて貰ひたいほど、この自分の、秋が滲み込んだやうに寂しい胸の中には、正直な心が浮んで來ないではなかつた。

が、向ふ岸の松の根もとをすツきりした姿の女――どこかの奥さんだらう――が、すぼめたかうもり傘を地に引いて、その旦那さんらしい洋服と共にむつましさうに歩いてゐるのを見ると、その見物

ぶりがうらやましくなつたと同時に、自分の境遇が返り見られた。そして自分の斯うしてゐるのが寂しいよりも、悲しいよりも、一しほおそろしくなつた。そして、それには巡査のがちや〳〵云はせる軍劍が思ひ出された。

部落の或娘が女中奉公に出た。すると、その前に一度部落づめであつた巡査がその近所に來てゐて或時そこへ戸口調査に來てそれを發見した。そして、知つたか振りをして、

『お前は穢多ではないか』と云つた。さう云はれた娘はその場にゐたたまらなくなつて、その家を逃げ出した。そしてまた別なところへ奉公して見た。すると、また、折り悪くも同じ巡査に發見されて、

『また來てる、な』と云はれた。今度は別に穢多であるぞと云ふことはあばかなかつたけれども、その娘は同じやうにおち恐れてそこをも逃げ出したと云ふ。

自分らはそんなことを聽き知つてるので、部落の巡査どもには、それがひとりびとり來る度毎に、よくしてあるつもりだ。が、渠等はいつも駐在場所がかはるものだから、さきにゐたものが、あらし山附近に來てゐないとも限らない。そしてそれにでも行き合つたら？

さうだ、渠等のうちにはいやらしいことを云つて、こちらをぶしつけにからかつたものもあつた。そんな者に若しこんな場所でこんなところを見られたら、今の女の子の冷かしどころではなく、以前の恨みを報いるのはこんな時だなどと考へて、もツと、もツとひどいことを云はれるかも知れない。

それが最もおそろしいのであつた。

植原さんは渡月橋まで來ると、

『どうです、山へ這入つて見まひよか』と云つた。

『えい。』こちらもその方が贊成なので、橋を渡ることにした。人出が少いと云つてもぽつ〳〵見える間を、わざ〳〵かうもり傘で顏を隱すやうにして歩いてるよりも、どこか皆とかけ離れたところで二人ツ切りになりたかつた。それほど自分の心が沈み氣味になつてゐたのである。

が、渠は大變にはしやぎ出した。山全體を我が物がほにして、あちらの巖へかけ上つたり、こちらの木の根に飛び付いたりした。そして一ケ所、水の幅びろく滲み出たのがやま路を横切つてる、そのあひだを飛び越えた。僅かの幅だけれども、こちらはそれを獨りでまたぐことが女としてできかねた。お腰のうちまで見られるやうで。それに、はいてる空氣草履をぬらしたくもなかつた。で、さきに進むのを

『植原はん』と呼びとめた。この時、下の川の水音が右手から聽えて來たが、——『頼みまツさ！』

『……』渠はあとをふり向くと、直ぐ戻つて來たけれども、ただ突ツ立つてゐるのであつた。そしてあたりの木々の葉いろが映つてるばかりでもないと思はれるほどその顏を赤くしてゐた。

『……』こちらはすぼめた傘を左りの手に突いて、右の足を湧き水に出てゐる石の上に乘せてゐな

がら、俄かにからだがぐら〳〵するほど納のとどろきをおぼえた。が、向ふへさし延べた右の手を引ツ込めることもできない氣がして、思ひ切り命令するやうな、またあまへるやうな聲が、『さア！』

『……』渠はこちらの手を取つて呉れなかつた。『ちよツと待つておゐやす』と云つて、おもさうな石を兩手で持つて來て、それを今一つの渡りにして呉れた。

つまり、こちらの心の望み通りにして呉れなかつた、のをむツとして、自分は獨りで二つの石を渡つたのだ。が、そんな轉婆にはまだ經驗がないので、渡つたことは渡つたが、そのはづみで倒れかけて手のひらを地上に突いてしまつた。そして傘のひわ色をも少しぬらした。

『あんた薄情や、な――あんたは！』こちらの目には十分恨みを籠めて渠をにらんだ。そして絹ハンケチを出してよごれた手のひらを燒けにふきながら、この手がさはつた位で身の穢れがうつるものでもあるまいにと思つた。

『衣物をぬらさんでよろしゆおした。』渠はすみませんとも云はないで、また無邪氣さうにさきに立つた。そして大きなもみぢの樹が一つ、太い幹や枝々を大きな岩の横から下の流れをのぞくやうに出してる、その根もとへ來ると、それへ馬乘りになつた。

『べべがよごれますが、な！』斯う寂しい聲でだが、こちらが微笑しながらそのそばへ立ちどまつた。

『えい景色やおへんか？』

『さよどす、な。』こちらも渠の言葉や樣子通りに打たれて、まじめになつた。

目をじツと明けておられないほど危險さうに川の中へ突き出てゐるところだ。下の方からは水の音が川しもよりもひどく聽えると思つたら、川の中には岩が多くあるのであつた。木の廣げたえだ葉が家のひさしのやうに平たく二段にも三段にもなつてる、そのあひだをとほして眺めると、多くの岩と岩とのあひだに、水の渦が卷いてゐる。その中をまた船が一つ下だつて來たが、岩にぶつかりかけると、乘つてる人がさをを持つてその岩を突くのだ。すると、船の方向が器用に轉じる。男の客が二名乘つてる。そして次の岩に來ると、またそのさをで船を少しよこへ向ける。すると、また次ぎの岩だ。これまでに見たこともない自分には、それがあぶなツかしくツて見てゐられなかつた。けれども、

『あれが例の保津川下りの船どす』と說明した渠は、さう云つた時に一度こちらをふり向いた切り、じツと下を見つめた。そして、ついには『おもしろい、なア』と云ふ獨り言になつた。

『……』こちらは男と云ふものを憎らしいものだと思へた。こちらが渠を思つてるのは大抵分つてる筈だのに――若し渠の無邪氣がわざとであつて、その實、本心では、渠が二種族でないことの故を以つてこちらを嫌つてゐるのなら、渠を今ここから突き落して自分も一緒に死んでしまつてもよかつた。が、死ぬなり殺すなりはいつでもできると思つて、『もう、いきまひよ』と渠を促した。

橋のたもとまで山を下りて來ると、橋をまた向ふへ渡つた。そして渠の好みに從つて三軒家の茶屋へあがり、渠の爲めに鯉こくを御馳走した。酒を飲むなら取りますと云つて見たけれども、渠は飲みたくないと答へた。この時にも、結局、自分は渠の心を捕へてしまうことができなかつたのである。自分としては、いま〳〵しい遠慮やら弱みやらが自分にこびり附いてるからで——。

けれども、渠は箸を運びながら、別に少しも惡意がないやうすを以つて、

『僕、あんたと一緒に日本中のあはれな部落民の爲めに盡しまひよか』と云つたッけ——穢多とか特殊部落とか云ふことを無遠慮に云ふやうになつたのを見ると、初めのほどとは違つて、こちらをそれとはしないで、夫婦になつてもいいと思つてるやうにも見える——『慈善事業でもして？それには丁度あんたは事情も分つてて都合がよろしゆおすやろ。』

『そんでも、わて穢多はきらひどす』と、こちらは一も二もなく答へた。

渠は母のゐる前でも言葉を遠慮しなくなつて來た。そして滋賀縣にゐる時、或友人の寫眞機を持つて二人で穢多村を撮影しに行つたことを語つた。その村で割り合ひに立派さうな家に向つてレンズを向けてゐたら、その家からひげの長くはえた人が出て來て、如何にもおも〳〵しい調子で、

『國に要塞あり、一家に主人あり』と云つた。何をされるか分らなかつたので、寫眞機をそのままに手ぶらで逃げて來たさうだ。

『穢多にかて國右衛門を初め、えらい人がをりまッさかい』と、母はこの時返事したが——

『……』そんな辯解をするだけ穢多の根性に落ちてるのではないか？

九

『あんたはまだ書生はんも同じどすさかい、おかねがいる時分にはいつでもわたいらのとこへ云ふておいでやすや』と、母も渠の爲めに好意を添へる氣になつてゐた。

が、渠は——どうしたつもりか——そんな無心を云ふやうすもなかつた。ただ無邪氣さうに世間ばなしをして、それでも割り合ひに世間のことをよく知つてるので、こちらの狹い見聞を廣げて呉れた。或夜など、母のかはりに、

『僕がお經をよんであげまッさ』と云つて、佛壇に向つて阿彌陀經一卷を讀んだ『によぜがもん、いちじぶつさいしやゑこくぎじゆぎこどくをん。よだいびくそうせんにひやくごじふにんく。』なか〳〵上手であつた。

『若いのに感心な人やで——』母は半ばお寺の住職に對するほどの信用を以つて渠をも信じてゐたので、高子がたび〳〵渠と行き來するのを少しも邪魔しなかつた。で、かの女は自分として自分の切な心が十分に渠に通じるやうにさへすればよかつたのである。

好きだと云ふむし菓子を持つて行つたこともある。一緒に喰べる爲めに牛肉を買つて行つたこともある。銘仙の中ぶるを外出着に與へたこともある。また、銀貨やお札を無理に渡したこともある。けれども、渠がこちらを女として飽くまで愼み深くしてゐるのをこちらは憎いとも、また一しほ奥ゆかしいとも思つて來た。

向ふからだッて、たまには、こちらの手に觸れようとして來たと思はれることがないでもなかつたけれども、そんな時には渠も顏を眞ッ赤にして中止した。その顏を赤めるのが事をさし控へるしるしででもあつたやうに。

それがやがて渠の女に對するうぶで卑怯な爲めだとは分つたが、さうかと云つて、こちらからも手を出す折りがなかつたのである。まかり間違つて拒絶でもされたら、自分が若い女としてこの上に生きてゐやうがないのだ。

東京へ出ようと決心したのは、好きでない人にでもかまはず何とかして貰ふ覺悟の爲めであつたが、植原さんを知つてからは、今や死ぬにも渠でなければならぬやうな氣だ。たとへからだの關係がないうちに自分が死ぬにしても、渠と共にでなければ往生ができさうでもない。それだのに、渠の方では平生あんまりかかはりがなさ過ぎてる！

『あんた死にとなることがおすか』と、こちらがそれとなく聽いて見た時、渠は取り付く島もないやうな返事をした、

『そんなことはあんたはんのお母はんにまかせときなはれ。』

『……』尤も、こちらの信じたところでは、渠はもッと勉强してえらいものにならねばならぬと云ふことを心から考へてゐたのだ。それも賴母しかつたので、兼て母と相談して置いた通り、向ふが養子になつて呉れるなら、そしてこちらの兄が見棄てた家をこちらと共に繼いで呉れるなら、望みの學校へ入れてあげてもいいと云ふつもりで、『都合によれば、あんたの學費はうちで出してあげてもよろしゆおす』とまで、これもそれとなく、うち明けて見たこともある。

が、渠の返事はそんな時に限つて煮え切れなかつた。何となくその胸にまだ一物を持つてるかのやうに、

『お心さしはありがとおすけれど――』などと。で、こちらは母には、もう、あきらめてる樣子を見せて、はッきりと

『とても駄目どす、わ』と告げながらも、渠に向つては、この點に關する渠の決心を促すやうなことにばかり、逢ふ度毎に意を盡してゐた。

『特殊部落民の爲めに慈善事業を――』

『……』こちらの本意ではないけれども、そんなことで先づ以つて渠の意を迎へることができるな

ら、それでもかまはないとまで思つた。いよ／＼結婚してしまへば、もツと別なことを勸めて二人で心づよく、また安心して、廣い東京へなりどこへなり自由な家を持つてもよからうと――私かに。

そのうち渠は或朝尋ぬて來て、出しぬけに

『鐵道の方をやめました』と告げた。

『……』では、いよ／＼こちらの望み通りになるつもりかとその初めには見て取つた。が、それにしては前以つて何の相談もなしに突然のことであつた。『一體』と、暫らくこちらは渠の顏を見てゐたが、『どうしてどす？』

『國から歸れ云ふて來ましたさかい。』

『國から――歸れ――？』ぢやア、これはきツとこちらをいやになつて急に逃げるのだと思はれた。水をあびせかけられたほど俄かに冷やかになつて、わざとらしくただ『へい――』と云つた。そしてそのわざとの冷やかさがその場に心をまでも眞ツさをに塗りかへたかと思はれるほどのすご味を自分に感じた。逃がすものか、どこまでも行くところへ追ツかけて行つてやる！

『實は、兵隊に行かねばならんことになりました。』

『兵隊はんどすかい、な？』母はそれを眞に受けたらしいが――。

『……』こちらはそんな手に乘るものかと、心で叫んだ。まじめ腐つて、そんなうそを！　いふなら正直にいやと云へ、殺してやる！どうせ、お互ひは世間から執念深いとも云はれてる仲間ではないか？斯うなると、渠をも穢多の仲間と見ないではゐられなくなつたのだ。こちらの日常生活にも實際に親しみを持つてゐながら、一方ではまたそれを嫌ふ。嫌つてそしてこちらの愛を途中から受けまいとする。そんな奴はまた他の世間へもぐり込んで、無理にも第二の父となり、また第二の高子を產ませるのだらう。自分の生まれを呪ふだけ、ます／＼そんな考への人を自分は許すに堪へられなくなつた。目も引き釣つてるだらうと思ひながらも、俄か思ひ付きの意地惡い皮肉を口に出して、『あんたもいぢめられまッせ』と云つた。自分の聽いてるところでは、自分の同種族は軍隊に這入つても他のものよりひどく虐待されるのだ。

けれども、渠はこちらを惡く取らなかつたのか、それともなほ白ばツくれてか、

『僕も行きとないのどすけれど』と、相變らず親しみのある言葉ぶりであつた。『これは國の爲めやさかい仕よがおへん。』

『困つたことになつた、なア』と、母もがッかりしたやうすだ。

『……』母のやうすは、その實、こちらの失望を示めして呉れたのであつた。思ひ返して見ると、渠は矢張り近頃の渠であつて、もとのそれではない。若し逃げるつもりなのなら、もとの、初め通りの、渠に立ち返つてるところがどこかに見えなければならぬ。ところが、もとのやうな

『わたくしは』で初まる堅苦しさは再び見たいと云つても見られないのであつた。そこにこちらの心はまたひとりでに和らいで來るのをおぼえた。

『ほんまどすかい、な』と、微笑になつて、改めて問ひ返した。

『ほんま――』渠はその優しい目を以つてこちらを不思議さうにながめた。『僕前に云ふてたやおへんか、徴兵のがれにまだ中學に學籍を置いてますと？』その不自然な行きかたを學校も承知しなくなつて、國の役場へ通知した。そして役場からまた渠の實父へかけ合つたのだ。『あんたはうそやおもてやはるけれど、この手紙を讀んでお呉れなはれ』と云つて、渠は今度は不平さうにその實父から叱つて來たのを見せた。

『……』それを讀んで見ると、どうせ一度は行かねばならぬ兵隊のことだから、いッそ今のうちに行つてしまう方がいいとあつた。無論、ことし、試驗なしで入隊するのだ。『ほしたら、行ておいでやす。その代り、な、すんだら直ぐ戻つて來てお呉れやすや』と、もう、こちらにさう要求する權利でもあるかのやうに云つた。

『……』渠も名殘り惜しさうに別れを告げた。

こちらはまた渠の歸國の旅に要する喰べ物に入隊までの小使ひを添へて見送りをした。が、別れてから日が重なるに從つて、戀しさがいや增した。そして渠を假りそめにも自分の同族と思つたことを勿體ないやうな氣がして來た。

『可哀さうに、な、あの人までをちょッとでも穢多やおもて。』

『わても確かにさうやないおもてます』と、母も答へた。『はやう兵隊はんの三年が明けて呉れりや――』

『……』いよ〳〵入隊の通知が來ると、その三年がます〳〵待ち遠しくなつた。そしてそのあひだに、今まで渠を多少見くびつた報いとして、こちらが忘れられてしまうやうな氣がしてならなかつた。いや、さう云ふ氣を向ふに向けながら、こちらはまたどうせこんな身でと云ふあきらめを着けつつあつたことに氣が付かなかつた。

一〇

それは、然し、渠の兄だと云ふ坊さんが無心を云ひに來たので、こちら自身に意識されたのである。

さふらふ文のやり取りではどうもこの寂しさに滿足が與へられないので、最後には一つ見舞ひがてら渠のところへ行つて來ようかとも思ひ出した。そしてその意を相談がてら向ふへも通じて見たのだけれども、その返事が相變らず責え切らなかつた。その上、向ふからの手紙の十日目が二十日目にな

り、二十日が一ケ月置きになつた。

こちらも旅費を使ふ代りに、一度拾圓のかはせをためしに送つて見た。そしてそれに對する返事を待つてゐると、待ち受けた期日より廿日も後れて、――渠の返事ではなく、――渠の兄と云ふのがやつて來た。そして先日の禮を云ひ傳へたのは滿足だが、同時にまた五百圓の無心をした。銀閣寺の近處で養鶏事業をやつてる人があるが、それに資本を出してやらぬか、儲けは分配するからと云つて。

『人を穢多と見て、馬鹿にして來たのや』と、こちらは直ぐ見破つてしまつた。植原さんの兄がひとり京都に坊主をしてゐることは兼て知つてゐたが、放蕩に身を持ち崩してゐるので、渠もそれを避けて成るべく會はなやいうにしてゐた。こんな人がかねを目當てに養子に來ると、かねを使ひ果したうへ、家をも子をも見棄てて逃げてしまうのだらうと思へた。

『うちはこの通り貧乏どすさかい、とてもお望みには從へまへん』と、母もきッぱり斷わつてしまつた。

『然し』と、その人は、植原さんの兄であるのを笠に着て、『おとうとにもさう貢いで戴けるほどなら――』

『……』何を云ふのだ、畜生！母はかねのことを云はれたのでぎよッとしてしまつただけだらうが、こちらには今一ついま〳〵しいことがあつた。坊主の袈裟をまとつてゐながら、そのこちらを誘ふやうないやらしい目つきには、こちらのからだを――おとうとにも許したと思つてだらうが――この兄にも許せと云つてゐた。

慎みのうへに考へ深くあるべきことをそれとなく行ひの上に敎へて呉れたあの植原さんがなかつたら、或はこんなのらくら坊主にも――ただ正しい種を得たいと云ふだけの故を以て――こちらの身を許したかも知れない。が、今や自分は慎みを敎へられたうへにも、また、考へ深い人だツてその身うち以外では少しも頼みにならぬことをも知つた。

もう、植原さんが手紙で直ぐ挨拶をしないで、冷淡にもこんな坊主をよこしたことは責めない。渠には如何に放蕩者でも、無禮ものでも、その身うちの方が穢多よりも大切に考へられたのであらう。こちらはこれだけ心を盡してゐたのに、そんなことは少しも取り合はないで、渠はその兄の事業費か放蕩費かの爲めに世間に秘密な金の出どころを敎へたとは！少くとも、確かに穢多だと告げたらう。

斯うなると、こちらにも自分の兄があることが俄かにまた思ひ出された。そして、それがこちらと同じく結婚もできないで、獨り困つてゐるだらうと戀しくなつた。そしてまた、植原さんへの當てつけに、自分は自分で朝鮮へその兄の手助けに行つてやらうと考へられた。先づ植原さんへ手紙を出したのだが、――

『あなた樣のお言づては本日』と、わざ〳〵期日のあまりに後れたことを思はせる爲めに『三月十一日』

の日附けを示めし、『お兄様より承はり候。わたくし事生憎病氣にて十分にお相手致しかね、誠にすみません。』これは本統のことだが、さきに渠が始めて尋ねて來た時の病氣の誇張とは反對に、わざと何でもないやうに見せたのである。若し渠の兄に少しでも思ひやりがあつて、こちらの弱つてる樣子を直ぐ向ふへ報告して呉れたら、よく分ることだ。自分は渠を思ひはじめてから肥えたからだが痩せて來たばかりでなく、鏡に向へば分る通り、また兩の頰に自分のいのちと見たゑくぼが消えて來たばかりでなく、せきをすることが多くなつて、――寢つづけてはゐないけれども――醫者の言葉によると肺が惡くなつてるのである。因果のうへの因果と諦らめてるのだ。『その上お兄樣には五百圓を融通致すやうわたくしかたへお賴みに候へども、御存じの通りの貧乏に候へば、お斷わり申上候。何卒惡からずお思召し下されたく候。また、わたくしは今回朝鮮へでも渡らうかと考へ居り候。どうせ長くは生きること叶はぬ身に候へば、――』ここまで來ると、然し、自分で自分を泣いてゐた。『お斷り申上候』で感じた渠に對する反感が俄かに腰を折つて、斯う書いて置けば、何とかいい返事が來はしないかとも望まれた。『せめては、一度兄の世話なりと致して見たく候。末筆ながらあなた樣の末長き御健康を祈り上げ候。』

これに對する返事が直ぐ來たことは來たが、そして渠の兄の無心は渠の本意でなかつたことを呉れぐれも辯明してあつたが、そしてまた

『お斷り下され候て却つて結構に候』とも書いてあつたが、こちらの病氣の見舞ひは通り一遍の言葉に過ぎなかつたし、朝鮮行きに關してはなにも云つてなかつた。

『お高』と、母もそれを讀み終つてから、こちらを絶望と病氣との床に返り見て、『これではあんまり薄情やないか？』

『わて、疾から諦らめてまツさ――』湧き出る涙を意地にも押し返しながら、自分を生んで呉れた母にまでも恨みを籠めて、『どないしたかて、穢多の種どすさかい、な。』

一一

いつのまにか冬も過ぎてしまつた。

けれども、高子自身には去年の秋からの戀病ひがいよ〳〵肺病に變じてしまつたばかりだ。

まだ輕いとは云はれたが、自分にはどうせ不治のやまひをいやな世界に寢て暮すことはできなかつた。

あらし山の遊びは、もう、一と昔以前のことにもなつたやうな思ひをしながら、同じ山に人々が春をうかれる頃、思ひ切つて兄のところへ出發することにした。そして母に向つては、

わて出發しましたら、な、植原はんへはただ遠方へ行たとだけお母はんから知らせといてお呉れや

すや』と云ひ置きした。わさ〳〵朝鮮とまで斷わる必要もないと思つてだ。いや、朝鮮がやがてこの病氣の爲めにあの世に變はると思つて。

――（大正八年三月）――

蜜蜂の家

この作は事件の性質上『征服』と聯絡してみるべきものである。

一

『……』目かけにでもしてそとへ圍つて置くには、却つて、一般の目かけなどとは違つて、波瀾もあり話し相手にもなつて、たま〳〵會ふには手ごたへがあつて面白いかも知れぬ。が、長く一緒に住むべき女ではなかつたことを、耕次は近ごろになつてやツと發見したのであつた。

東京にゐた時は、矢張り、一緒であつたとは云ひながら、まだお互ひに各自の好奇心やら自重心やらが勝つてゐて、愛は接近して來ながらも、互ひに戸籍上の立ち場が別々であつた如く、また人間としての立ち場も獨立してゐた。從つて、そこにまだ互ひの遠慮もあり、尊敬もあつた。

が、かの女の窮極の意志が矢張りこちらの正式な妻になつてしまひたいのであることが分つて來たので、さう來ると、もう、こちらは自分の從來の考へ通り遠慮をも好奇心をも撤回して、女に對する征服と男に對する服從とを正面から要求しなければならなくなつた。愛は強者が弱者を誠實に征服するところに成立することを明らかに信じてゐるからである。

東京は西大久保に於ける生活がかの女をこちらの品のよきいろ女から女房に落す順序であつたと云へる。が、その末期に於いては、經濟上、殆どかかる生活をつづけてゐるわけに行かなくなつて、渠は先づかの女を殘して大阪の或新聞社に雇はれて來た。そしてかの女が女中の老婆を伴つて東京を引き上げて來たのは――これも經濟上の都合で――一ケ月ばかりもあとのことであつた。

梅田の停車場へ渠が迎へに行くと、改札口の向ふから最初にこちらを認めたぶよ〳〵と太つた婆アやが先づ

『旦那さま』と、嬉しさうに叫んだ。この婆アやは西大久保のいつも行きつけの湯屋で、自分のところの奥さんのことをお目かけだと云はれて憤慨し、『あんなに仲のいい御夫婦も珍らしいのですよ』と辯解したこともあるさうだ。實際に、耕次等は他のものに知れるやうな喧嘩やいさかひはしなかつた。若しその必要がある時は、戸山の原へ出てか、床へ這入つてからかにするのであつた。詳しいことを知らぬ婆アやは、その主人の最初の妻、と云つてもまだ戸籍だけは抜けてゐないのが、時々かねの無心に來るのを、ただあまりに世間外れの不心得な女だと云つて、をんな主人の方の肩ばかり持つてゐた。

『……』その婆アやの後ろから、澄子は疲れてゐる時にいつもするやうな筋肉のゆるんだ顏つきを無理さうに引き立てながら、何も云はないで微笑して來た。そしてその自分の手には、袋に入れた自

分の絹かうもり傘と共に、こちらの棄たてつもりで殘して來たところの繻子まがひのかうもりと櫻の安ステキとをも紐にしばつて、大切さうにかかへてゐた。

『こんなステキなど、うツちやつて來ればいいのに、――貧乏くさい！』耕次はこちらへ來てからまだ一ケ月になるかならないのだけれども、東京に於けるやうな行き當りばツたりの生活では行かないことが分つてゐた。かねのある時はあるやうに、またない時は湯錢にも困ると云ふやうな、ごく自由なやりかたはこの友人も知人もない土地では全くとほらないのであつた。自分の同僚どもを見ても、すべてがきちやうめんにして、ぼろを見せないやうにしてゐるのが、如何にも、世間並みに本統のことだと思はれた。そして自分も成るべくけち臭く、貧乏くさく見えることはしたくなくなつてゐたので、澄子をこちらで見た時のこの第一印象が既に面白くなかつた。

『でも、あなたの不斷お持ちになつてた物ですから、うツちやつて來ては惡いと思つて――』かの女のきまり惡さうな返事には、然し、こちらに對する無邪氣な誠實があつた。そこに、こちらも自分とかの女との東京からの愛情的聯絡をそツくり受け容れることができた。

『が、然しだ』と、耕次は大阪人の生活ぶりの一般に堅實にして、おもて向きを亂さぬことを說明したのち、『僕等もそのつもりで馬鹿にされないやうにやりましよう。それには、東京で同棲などと云つて意張つてたことはこツちぢやア：そのまま通りまんから、先づ、あなたが相變らず近藤と名乘るのをやめて、今から關根澄子になつておしまひなさい。どうせ、いつかはさうなるべきものですから』と勸めた。

『……』かの女もそれには異議がなかつたが――

二

大阪から五里を離れた池田の室町は、耕次の勤める新聞社に關係のある電軌會社が經營する邸宅地である。その上、そこから電車はたツた三十分で大阪へ達するので、渠は同會社のすすめによつてそこの碁盤の目並みに殆ど同じやうな家が立て込んでる、その一つを借りて住むことにしたのだ。

二階にあがつて見ると、左りの方には、寶塚行きの電車軌道で新市街と舊市街とを一直線に横に仕切つて、そのさきの舊市街を越えて池田山が手近く見える。また右の室の窓に倚ると、六甲山の眺めもさう遠くない。家の向きで云へばその後ろをたツた四五十間ばかり離れたところに、電車の鐵橋を渡した猪名川が流れてゐる。その土堤にも、五月のことだから、大きな並み樹があをあをと繁つた枝を廣げてゐる。それに、電車軌道とこちらの家との間に幅二十間ばかりの牡丹ばたけがずツと電車停留場の方へまで延びてゐる。

『……』東京をいやな記念ばかりのちまただと云つて嫌つてる爲めに、こちらの大阪行きには一も

二もなく贊成したかの女は、矢張り、同じ意味をも含めてだらう、天然好きの得意を叫ぶやうに、『いいところです、ね』と喜んだ。

『景色だけは、ね。』耕次には餘りいい返事ができなかつた。自分がかの女も喜ぶだらうと思つてこの地を選定して置きながら、それを賞められると、いやな氣のするのは自分でも不思議のやうであつた。が、よく考へて見ると、別にこの地には何も直接に關係のないことであつた。然しやがては自分の正式な妻となるべきものが東京を嫌つてるのは、かの女のしたいろ〳〵な失敗や耻辱を思ひ出させることが多いからであらう。一種の人間ぎらひになつてるので、――して見ると、その反動としてかの女が天然に憧憬してゐるのは、おのれでおのれのふる傷を忘れようとするに過ぎなからう。前にも一度渠はかの女に向つて云つた、

『あなたの好きだと云ふ自然は單純な天然のことで、少しも人間味が生じてゐません。』

『だから、高尚なのでしよう』と、かの女はぷり〳〵して而も得意さうに答へた。『人間ばなれがしてゐて？』

『單純過ぎますよ』と、その時和らかにだがこちらから投げ與へた言葉を思ひ出すさへ面白くなかつた。渠には、單純な天然憧憬などに耽りつつ互ひの戀をもて遊ぶやうな餘裕がないほどに自分の思索と生活とに緊張してゐたのである。そしてその緊張を破らずに自分の戀をも取り入れようとすると、どうしてもかの女からは露骨に見られた。が、この止むを得ず露骨になる實例を自分は今度大阪人の生活に於いても確かに發見して、それを是認したのだ。

一般に大阪人には金と女としかないと云はれる。そして大阪人自身もそれを他の一般と共に低級な生活のやうに卑しめながら、そのまま生き通してゐる。が、渠等にだつてえらい人物がないではない。若し金儲け以外のことに專心に手を出したら、他の土地の人のやうに矢ツ張りえらくなる要素を持つてる人がゐないではない。さう云ふ人々までも周圍の空氣に養はれてかねにばかり努力する。ところで、男子としてこの努力をする性質は、學問の爲め若しくは人間救濟の爲めに努力のそれと少しも違つたことはない。若しかねを手段に過ぎないと云へば、學問だツて人間救濟だツて自己の爲めには手段でないか？いづれも自分から見れば勝り劣りはない。その上に持つて來て、現今の人間救濟に直接に從事する宗教家や、學問の府に引ツ込んでる學者どもは、周圍の刺戟と自己の要求とが少い爲めに、――但し、これは新聞記者や政治家もさうだが、――うわツつらばかりに高尚をてらふ遊びの、實は、安ツぽい氣ぶんに慣れ切つてる狀態ではないか？それに比べると、實業家には春秋二期の決算報告が直ちに物を云ふ爲め、そして主人や株主なるものがなか〳〵默つてゐない爲め、一日一刻も油斷できない。古來の大阪人がかねに眞劍なのは、つまり、さうした心理からである。そして毎日の眞劍な業を終へてから、夜、いろ町へ飛び込むものが多いのは、その英氣を最も手ツ取り早く養ふ爲め

である。それをはたから見れば、あまりに區別が附いてるやうだ。露骨に見えるのはそれだが、本人から云へば、緊張の內部的連續だ。

斯う云ふことも、渠はそれとなくかの女に說明したけれども、かの女の先入見には受け容れられたやうすもなかつた。そしてうわべばかりの言葉や風俗やの違ひをあげ足取りのやうに擧げて、かの女は婆アやと共に笑ひ合つた。かの女の到着の翌日であつたが、耕次が社から歸宅すると、かの女は東京で云ふ七輪をわざ〳〵持ち出して來て、笑ひながら、

『七輪たら八輪たら云ふもんはこれだツせ』と云つた。室町の購買組合の小僧さんが注文をさう云つて持つて來たさうだ。

『カンテキ、さ』と、渠は鼻を高くして答へた。

『旦那さまはよく御存じだこと。』婆アやはそばにゐて感心したやうすだ。

『これでもおれはかみがた生れだから、ね。』渠は斯う云つて澄子らに向ふのを、今のところ、一番自分に釣り合つた氣ぶんと見た。

池田驛から五つ六つ驛を越えたところに、寶塚の溫泉場がある。武庫川をさし狹んでその舊新の場所が別れてゐる。新溫泉とはただ川の水を吸み上げてあツためたに過ぎないのだが、浴場が大理石作りの建築であるのが呼び物だ。何萬と云ふかねを、損益の問題はあとまはしとして、大きく人にゆだねて經營させることにしたその本人の、大膽勇猛の企てを耕次は自分の考へに比して買つてゐるのだけれども、澄子にはただ

『俗ツぽいの、ね』としか見えなかつた。山を利用した箕面の動物園もかの女にはさうばかり見えた。そして大阪の婦人どもは齒ぎれの悪い言葉を發し、おしやべりで品がなく、着物を惜むせいか、ややともすると裾をはしよつて、ふるぼけた長襦袢や腰卷きを耻かしげもなく出して、『まるで腰卷きの行列か展覽會かをやつてるやうだ』と云つた。

『……』その展覽會はこちらにもさういい趣味とは見えなかつたが、大阪婦人どものおしやべりは、澄子のやうなつんと澄ました氣取りを持たない爲めで、却つて渠等の西洋婦人流に社交的ないい傾向を示してゐるのである。また、大阪言葉がかの女に齒初れ悪く聽えるのは、獨逸語や英語の力點本位に慣れたものが佛蘭西語のねツとりした優しみある口調の味はひを解しないのと同樣である。若しまた齒切れの悪いのを事實だとして見たところで、そこにその優しみのあるところは、澄子その人の言葉のぎくしやくして、時には神經的にきんと響くのよりはまだまだましではないか？

耕次の同鄕人で、子供の時ぶんに無邪氣な初戀の仲であつた婦人が、大阪に於いて、長らく產婆をやつてるのである。それが一度、

『關根はんの今度の奧さんを見たい』と云つて、十歲になる男の子をつれて池田へ尋ねて來た。その

子は、かの女が耕次に最初の妻ができたのを知つて燒けを起し、或男と關係して產んだのだが、その男とは直ぐ死に別れた。そしてまた老母と共に獨身をとほして來た。子供がやツと這ひ初めた頃、一度耕次が尋ねて行つたことがあるが、その時、皆が渠の歡待の用意に急がしかつたうちに、その子が二階のはしごを獨りでしたまでころげ落ちた。あたまを打つたらしいので、その結果が馬鹿にでもなつてはしないかと心配して、今回の來阪に、それとなく訪問して見ると、幸ひにも小學校で成績がよく、いたづらは隨分ひどいけれども級中では二番か三番を爭つてた。ここへ來ても直ぐ、庭の蜜蜂にいたづらをして早速その手をさされた。

『來れば動物園ぐらゐはつれてツてやらねばなるまい』と云ふことは澄子、にも兼て云ひ含めてあり、子供にも約束してあつたので、耕次はその用意をしながら、かの女に向つて、『あなたも一緒にどうです』と促した。が、應じなかつた。そして三人が出て行くのを二階の窓からでも見てゐたと見え、渠が獨りで歸つて來ると、直ぐ、

『よく似合つてゐましたよ』と、いや味ツたらしく云つて、內ら向きの目つきであつた。

『……』耕次としては、今更ら同い年の女と、如何にさきが獨身でも、關係するなどと云ふ野心は夢にも持つてゐないのだが——。澄子がさう云ふのは、こちらには、自分がかの女の中野に關する追回を成るべく遮斷させようとしてゐるのに對するあわい嫉妬的復讐とも取れた。

兎に角、耕次は天然をも人間化してゐないでは承知できないのに對して、澄子は成るべく人間を遠ざかつて行かうとした。東京から去つたのもかの女にはただ人間を離れたのであるから、こちらへ來ても、不慣れな、そしてそれが爲めにかの女には不快と見える空氣の中に生活する人間には、なほ更ら近づかうとしなかつた。

そしてゆふぐれの定刻に耕次が池田停留所で電車を下りて來るのをも、天然風景の一部ででもあるかのやうにして、かの女はいつも家の門に出て寂しさうに待つてゐた。そして、

『斯う云ふとこへ來てゐては、もう、婆アやだッて、あたしだッて、あなたばかりが手頼りですから、ね』と云つた。

『……』渠は或人が强情な女を服從させるには山へつれて行くに限ると云つたことを思ひ出した。寂しがらせて、素直な依頼心を起すやうにするからであらう。こちらに對する澄子の態度も可なり一變したのである。曾て寢どこを反抗的に起き出でて、

『ながゝ御厄介になりました。あたしはこれから父のところへ歸ります』と云つて、兩手にそろへた五本の指でその目を押へながら室　出たが、夜中のことであるので、乘りつけた車屋も寢てゐた。で、斷念して逆もどりして來た時の却つて一層素直になつたのよりも、もツと素直な優しみを見せて、今や、その心のかどが取れて、そのぎくしやくした言葉ぶりも直つたやうに見えた。

二人のあひだにまだ用ゐ殘つてた不自然な隔ても、かの女からいよ〳〵撤回するやうに申し出た。そして渠はこの申し出を丁度自分がかの女の天然癖に讓歩してゐるやうに許した。

三

けれども、耕次は東京に於ける浪人生活とは違ひ、大阪では雇はれの身であつた。毎日出勤するには及ばなかつたが、社用の爲めに兎角外出がちであつた。或時は、全國玉突き大會の一審判官として同會に立ち會ふ爲め、夜おそく歸つたり、とまつて來たりした。また、本願寺の式能に招待されて、京都へも行つた。社で京都、大阪。神戸の三都美人遊覽團の催しをした時には、三都の藝者や幇間を引きつれて、岡山の金神さんや、安藝の宮島や、別府溫泉までも一週間ばかり家を留守にした。

そんなことにもすべてかの女は自分らの生活を飽き足らなかつた。そしてその反動としてのやうに、頻りに風景あさりをした。すツと昔、學校の修學旅行で耕次も行つて見たことのある、箕面公園の一番奥なる瀧をかの女は獨りで見に行つた。また、猪名川の上流にある昔の城あとで、自分らもよく知つてる同業者上司小劍氏の故郷なる多田神社をもかの女は音づれた。さうしたあひだにも、かの女が若し、こちらとの同棲以前からかの女自身でも本心にはすさび穢れてたと思つてる筈なら、その節操若しくは品性をいい方へ取り直して呉れるなら、まことに結構だが――と、耕次には思はれた。

結局は、平凡に正式な家庭生活を望んでる女であることが分つた以上、耕次にも普通並みの注文があつて――自分の妻だるものに關係以前のふる傷を思ひ出しも出させもしたくなかつた。そしてそれがなくなるだけ、かの女が耕次や世間に對して有する引け味や、ひがみや、その結果の强情やもなくなつて、かの女の心がもツとゆツたりと、そしてもツと廣く、實際的になるだらうと想像された。

けれども、そんなことをこちらが正直に云へば云ふで、かの女は別に小理窟を附けて、

『あなたがあたしに冷淡なのでしよう』と、かどのある言葉にかどのある目つきまで添へて、而も訴へるやうに答へた。『あたしの趣味をもツと考へて下すつて、あたしの面白く思ふところへも一緒につれてツて下さればいいでしよう――？』

『また、中野はさうでなかつたと云ふんでしよう？』耕次は度々のことにうるさいので、つい、自分から先手を打つこともあつた。

『ふん！』かの女は鼻であしらつて、横を向いた。

『……』中野のことはただ靈的にとどまつてたなどと云ふ辯解を何度されても、耕次には矢ツ張りかの女のふる傷の一つであつた。それを自分らの友人どもには今でもかの女の辯解通り肉の關係が少しもなかつたのだと云つてるが、それは外部からかの女がその傷を突ツ付かれていら〳〵する度合ひを少しでも減らして置きたい渠の考へからであつた。が、かの女はさうとも知らず、自分の鈍潔であ

つたことを信じられてるものと早や合點して、その標準で小理窟を云ふのがこちらにはうるさかつた、そして一たびちよツと納まつたやうであつた衝突がまたつづき初めた。

渠は實際にかの女の趣味におつき合ひをしてゐるだけの餘裕がなかつた。そして東京ではそれが思索と創作との爲めであつたが、こちらへ來てから、その緊張が少し方向を轉じてゐた。

第一に、今の社に於いて新聞記者たることにそも〳〵からの不平をいだかせられた。記者たることそのことが別に下だらないわけでもないだらうが、今の社は來て見ると思つたよりもちツぽけであつた。それに、社が自分を持て爲すことに於いて初めの約束を違へてしまつた。うへには見聞の狹い、見識の低い編輯長があり、したにはまだ改革前の末輩どもが編輯長を初め東京下だりのものに對して攻守同盟を結んでゐて、その爲めにいろ〳〵な理由を附してこちらに對する執筆範圍の自由を制限した。文章や思想問題には觸れさせても、こちらの一種得意の政治論は許されなかつた。また出勤自由の條件もすんでのことで撤回されるところであつた。その次ぎには、こちらが東京の諸雜誌に書く創作や論文を手内職も同樣と見て、社員の内職禁止と云ふ動議が編輯總會に出た。で、

『ちよツと申しますが』と云つて、耕次は椅子を立ちあがつた。『若しこの動議が成り立つとして、内職を禁止される社員と云ふのに僕も數へられるのでしようか？』

『無論です――社員なら』と、さう云ひ出しさうにこちらが豫期してゐた記者が果して得たりかしこしと云ふ風に應じた。反對同盟のうちででも一番彌次馬であり、一番役に立つ讀み物を提供してゐると云ふ自信ある人だ。そして耕次もその人の雜駁だが面白い隨感的記事を新聞の一讀み物として必要だとは思つてゐたが、自分はそんな物で別に競爭する氣がなかつただけだ。

『それなら云つて置きますが――』渠はわざとにも落ち着いて、向ふよりはもツと高いところにある氣持ちであつた。自分が日々の記事に於いてたとへ全く役に立たなかつたとしても、自分のゐることを以つて社は一つの飾りにしてゐることが分つてゐたからである。『僕には東京で發表する原稿の方が本職です。こツちのは寧ろ内職ですから。』これは若しいよ〳〵社員の内職禁止が自分にも及ぶとなれば、自分は直ちに辭職するだけのことだと云ふ意味だ。そして辭職は自分の來さう〳〵から約束が違つてる爲めの覺悟であつた。すると、社長は

『君は別ですから』と口を出した、『御心配には及びません。』

『別に心配したわけではないのですが――』耕次は正直な微笑に碎けて、『皆さんとおつき合ひをしなければならぬと云ふなら、僕もこの社に於ける内職をやめようと思ひまして。』

『問題が違ひます。』

『おやア――』斯う云つた切りでもとに返つたが、渠は別に意張つたつもりでもなかつた。そしてますます東京に於ける注意を自分の爲めに引くやうな創作なり論文なりをできるだけ努めて發表するこ

とが社その物の本意に叶ふのだらうと云ふ責任感を増した。

渠は決して社長の宅を訪問しなかつた。また、別派なる主幹の機嫌を取らうともしなかつた。どちらかと云へば、東京から一緒に來た編輯長の馬鹿にされてる苦境に同情して、できるだけその肩を持つてやらうと思つた。が、編輯長もその初めにこちらに向つて吹いたやうな計劃はすべてその獨り合點の空想であつたことをきまり悪がつてるのかして、東京下だりの銘々に向つては社の實際と違つてゐるやうなことをばかり云つて、お茶を濁すだけになつてることが分つた。

耕次は他のもツと大きな社へ轉じる運動もして見た。ところが、あとで聽いて見ると、そこの幹部會で、あの男の細君がしたたか者で、箕面公園などをステツキをふりまはして歩くからあぶなくツて近よれないなどと云ひ出したのがあつたので、一も二もなく否決になつたのだと云ふ。まさか、かの女もそんなことはしてゐない。が、一度、こちらの舊友を怒らせてしまつたことがある。舊友は大阪に於いて耕次も曾て入學してゐた英語學校の現在校主だが、氣候も投あみにいい時となつたので、こちらの家を足ばとして猪名川に本年第一回のあゆ獵をやつた。澄子や、かの女のちよツと話し相手になつてる出入り八百屋の若主人もついて來た。皆が一緒に川の淺瀬を渡つたり、川を上下したりして、あゆを初め、鮒やなまづや川えびやその他のものを滿足するほどに取つた。そして家に來て、皆で料理して喰べた。

この時、男どもは酒になつてたので、氣が付かないでゐると、かの女はとがつた聲で、『あなた、少し婆アやにだツてやつて下さいよ。大抵な世話ぢやアなかつたのですから』と云つた。『……』それで耕次にも、さツきから、澄子が變な顏をして渠の友人からすすめられても自分の手を出さずにゐた意味が分つた。が、そんなことを云ふ位なら、あとで少し友人の細君のところへも届けさせるやうに女としては注意すべきであつた。だのに、それをしなかつたので、友人を二重に怒らせてしまつた。

『あんな失禮な女はない』と、友人は耕次がそこの英語教師に世話した社員にかの女を讒侮したさうだ。『それに、あの八百屋とくツ付いてるよ。』

『馬鹿！』耕次はそれを社で聽かせられた時、私かに斯う叫んで、心で友人を怒り返した。如何にかの女が浮氣であつたとしても、あんな者に一時の寂しみを許すとは、かの女の不斷の氣取りから云つてもあるべきことではなかつた。西大久保にゐる時、かの女が

『木山さんなどはむやみに○○○と云つて、あの顏の長い老人の獨り者を馬鹿にしていらツしやるけれど、あの人だツて若し誠實に女を求めて來れば、あたしなら打ち込んでもやります』と云つたことはある。が、それはこちらに對してもツとあまい誠實を催促する一種のおどし言葉であつた。だから、こちらは輕く受けて、

『そんなことは、まア、僕とまた手の切れた時にでも云つて貰はう』と、かの女に向つて答へて置いた。まして今回の八百屋と云ふのは、東京の一法律學校にゐたことはあるが、禿頭病の爲めにあたまが全くつるりとなつてる男で、而も既に女房持ちではないか？

女が少し親しさうに男と交際すると、直ぐそこに怪しい關係を豫想する今の教育者流の、姑息にして時代後れの考へは許してやるとして置いて。澄子が『失敬』だと云はれるその理由がこちらに分ると、耕次はまたかと云はぬばかりにかの女が家庭の主婦らしくできてない缺點を思ひ出した。そしてその時、友人に對しては、一面には申しわけする、そして他面ではまたその蒙をひらくやうな、二つの意味の手紙を一封書いた。

四

社に於ける不愉快な氣ぶんと、澄子の案外粗笨に見える性質に對する失望と近ごろでは思ふやうに創作が書けなくなつた苦しみとが、亂れた絲の固まりのやうにこんぐらかつた、そしてそれが自分のいのちになつてるやうに緊張した心の狀態に於いて、一つの新らしい希望が自分を貫いてるのが、耕次には自分でまだ頼母しいことに見えた。

それはほかでもない——自分の舊友や、新らしくできた知り合ひや、東京でさらにあるのなどとは違つて一般に大きな會社やが、かれ儲けの爲めに全心または全力をそそいでるその男らしさ、勇ましさ、緊張味に釣られて、自分も今一度それに似たことをやつて見たくなつた。つまり、北海道や樺太へまで出かけて行つて失敗した自分の實業慾が再び恢復して來たのである。以前には、これでも父の遺産をだが投資することができたけれども、今はまだ東京に於ける米代の殘りをいまだに月賦で少しづつ送つてるほどの素寒貧だ。が、それでも、この慾望は達しられるやうに思へた。と云ふのは、無一文から實驗的に進んで行く方が却つて堅實で、失敗の恐れがないからである。自分の出直しになると云ふことは、既にこれまでにも一二度あつたので、そしてその氣持ちが恐らく仕慣れた成功に於ける喜びよりも一層さツぱりと新らしいことを經驗して知つてるので、自分はこれを少しも恥辱や損耗だと考へない。

そしてさうした考へから耕次は蜜蜂の飼養とその研究とに本氣になつたのである。が、その飼養の初めはほんのでき心からであつた。それに關する雜誌や書物は自分も英語で時々讀んでゐないことはなかつた。そして或時は飼養して見たい氣も出た。ところが、池田へ移つて來てから、まだまもない時であつた、自分が澄子と共に散歩がてら、舊市街の山手を町から大分離れたところまで、たんぽぽなどを摘みながら行くと、その糞面街道に添つて蜂飼ひの家が一軒あるのを發見した、

『あ、養蜂をしてゐる、ね。』

『ちやア、寄つて見ましよう』と云つて、かの女がさきに立つて這入つて行つた。そして多くの小さい蜂が五つ六つの箱からその自分の箱を間違はずに出入りするのが面白くなつたと見え、かの女はその一群を買はうと云ひ出した。そしてその二三日後の朝早く、蜂屋が新たに分封したと云ふ一と箱を持つて來た。

かの女にはそれも人間離れのした天然であらうが、生き物ならすべて好きな耕次はその生き物なる故を以つて蜂の生活をも人間のそれのやうに見た。產むものが一匹、產ませるものが少數あつて、あとはすべて男性の變形なる中性の働き蜂ばかりになつて、この群が力を合はせて一つの生活を整然として經營してゐる。

これを天然と見ようが、人間的としようが、この少しも動かせない生きた事實を見て樂しめるところに、二人は兩方面から期せずして趣味の一致ができた。初めはそれだけでよかつたのだ。が、耕次はそれを趣味ばかりにとどめず、やがては實益にも供しようと云ふつもりになつて、その研究を進めた。箱の中を時々明けて、巢のわくを取り出し、巢がどうなつてゐるか、蜜のたまりかたはどうか、女王が兒の產み工合ひはと調べて見る時、自分が顏をおほふ爲めのベイルも買つた。外國まで行つて研究して來たもツとえらい養蜂家が池田山のふもとにゐると聽いて、その人をも敎へを乞ひに訪問した。そしてその方にばかり今度は自分の緊張が向いて行つた。

『然し、緊張以外に人間の生活の捕らへどころを拵らへるのは、何と云つても結局は理想的固定觀であつて、流動的現實主義の生活には必要のないことだ』としてゐる渠には、方向の轉じるのは少しも人格に變化を與へるものではなかつた。かかる人格その物が既に浮氣だ、氣が多いのだと云はれても、そんなことは愚論としか見えなかつた。緊張が乃ち充實した生活の內容であり、實質であるからである。そして問題はこの內容實質を實現しつつあるかどうかに在つた。

けれども、渠が養蜂の敎師と屢々行き來することがまた一つ澄子との衝突をふやす原因になつた。と云ふのは、敎師は大阪生れで、從つてその言葉も人物も大阪的であつた。それを耕次は共鳴こそすれ、不思議とも何とも思はなかつたが、澄子はあたまから卑しんだ。そして渠が敎師と共に飲みに行つたり、玉突きを試みたりするやうになつてからは　かの女は自分をうとんじられると見て渠にそれとなくいろんな邪魔や難題を持ちかけた。

渠がまた蜂のことで外出するとでも豫想した時は、かの女は前以つて豫防線の爲めに、

『けふは何とかして支樂座につれてツて下さいよ』とか、『三越へ行つて來なけりやアならないのですが』とか云つた。

『そんなかねがどこにある？』

『だから、何とかして――』

『……』渠はただむツつりして答へなかつた。實際に、大阪への往復も無賃乘車券を持つてればこそで、電車の上を全くむてで往復することが度々になつてゐた。小使ひを貰ひたいにも、貰ふみなもとをかの女に與へてない時が屢々つづいた。經濟上、一時の苦しみを脱しようとして、安い月給の新聞社などへ赴任して來たことが後悔された。そして社に於いても家に在つてもむしやくしやと面白くないことばかりになつた。

そのむしやくしやしたあたまを乘せて、或日、歸宅すると、定刻よりも少し早かつたせいか、かの女も姿アやも聲さへなく、迎へに出なかつた。いら〳〵してゐるこちらには、それがわけもなく癪にさわつた。そして澄子がかの女自身のいつわりの氣取りや無反省の要求を原因として泣きツつらをしてゐるのを想像して見て、寧ろそれを直接に見ない方がいいと思へた。で、そのまま、すツと二階へあがつて、渠は自分の書齋の疊の上へどんと下へも聽えるやうに音を立てて自分のからだを投げ出して、横になつてしまつた。

『湯どのので今あせをふいてしまつたので――』かの女は二階へあがつて來てから斯う云つた。いつもとげとげしいと云はれる聲を無理に押さへてゐるやうであつた。次ぎの室からかい卷きを出して來て、それを掛けて呉れてから、こちらの枕もとへ倒れるやうに坐わるが早いか、かい卷きの襟の上からこちらを押さへて、『どうなすつたの？』

『……』渠はかの女の顫えた聲には十分同情しないではなかつた。自分の目を見ひらけば、きツと涙がぽろ〳〵とこぼれるに違いないと思つた。若しこれが相變らずいろ女に對する關係以上に進まないでゐたものとしたら、それだけこちらの要求もさし控へられ、それだけこちらの責任も輕いわけだらうが――。そしてただその場のがれに速かに妥協してその場の喜ばせを與へてかの女からもその場の愉快な反應を手ツ取り早く味ひ取つた方がよかつた。が、それだけではかの女自身の本心に横たはつてる望みが滿足しないのである。

さうかと云つて、かの女は今日まで戀の概念をただ表面的に押し付けて行けばいいと云ふかの如き態度にとどまつてゐて、本統にその本心の望みに適應するほどの、内部からの緻密な優しみや注意深さをもたらして來ない。月並みには戀を知り、戀を感じてゐながらも、つまり、まだ女としての一と皮むけた、いつはりのない純全性が、中野その他の中途半端な男に對するこれも半端な追回や復讐心の爲めにさへぎられて、實際に現はれて來ない。それを現はれさせるに至つてこそ、こちらのかの女に對する最も誠實な征服の事業も成就されるのであらう。が、かの女はそれを悟らないでゐる。そしてこちらからかの女を悟らせようとする努力を――丁度、かの女が耕次の知り合ひとしてかの女にも近づいて來るものを退けたやうに――退けてゐるのである。かの女がこちらに飽き足りないのは、その實、かの女自身に飽き足りないのであらねばならぬ。

耕次は自分が殆ど第二の妻としてさじを投げた女に自分の溢れようとする涙を見せたくなかつたので、返事をするまでに至らないうちに、つと、また立ちあがつた。そしてはしご段をばたばたさせて行つて、庭へ下りた。もみぢの木や松や檜葉の根のあひだには、もう、また雜草が大分に延びてゐた。引ツ越し當時はこちらがそとの用事で急がしかつたので、草も拔かないで置いた。すると、それが板塀のふし穴から馬飼ひにのぞかれたのを緣として、耕次の留守に四十錢に買つて行かれた。

『東京ぢやア、とてもないことです、ね。』澄子はそれをあとで面白さうに語つた。

『また生やして置きましようよ』と、婆アやはまた慾張つてゐた。『いつでも買ひ手ツさと云つてましたから。』

『それに、生やして置けば、秋になつて蟲が聽けるでしよう――。』

『……』耕次も別に反對はしなかつた。その草の明きに、澄子が土堤から取つて來た月見草の花も咲いてゐる。

巢はけさ急いでゐた爲めによく見てやらなかつた蜜蜂の働きぶりを見たかつたのである。さきの一群はこちらへ來てからまた王蜂を四つ五つ拵らへたが、そのうち一番恰好のを一つ殘して、あとを皆わざ〳〵つぶして置いたら、その一つにやがて王蜂が生まれて分封した。今ごろ分封させるのが既にそのもとをも子をも冬になつて滅亡に至らしめることになると云はれてゐたのだが、研究の爲めにやつて見た。で、箱が二つになつてるが、そのいづれもの群がゆふがたの月見草に行つて來るかして、働き蜂は各々あか黃いろい花粉をたんまりとその兩方の足につけて運んでゐる。たまには、灰白の花粉を運ぶのもあるのを見ると、どこかのクローバにも行つて來たらしい。さう云ふ觀察が少し巢の心を落ち付けた。

が、また考へて見ると、子供のやうに自分を教訓するのでもないが、蜂のせツせといとなむ生活を見るにつけても、自分はもツと奮發しなければならなかつた。どうせ澄子とは尋常に家庭を持てぬものとすれば、丁度自分が社に於いてわざ〳〵好んで孤立してゐるやうに、家に於いても寧ろ一本立ちになつてる方がよかつた。自分が北海道で受けて來た絕望と疲勞とを最初に直して呉れたのはかの女であつたのだから、それはそれとしていつまでも感謝することにして置いて――。

五

晩食も無言ですませると、直ぐいつもの室町倶樂部へ出かけた。

そこには玉突き臺の備へがあつて、購買組合の主人が世話をしてゐる。この主人とも澄子はかき附けのつは遠ひから衝突してしまつたが、こちらには玉に於いて殆ど同點のいい相手であつた。耕次は先日連中の大會に一等賞を取つた餘勢がまだ殘つてたので、十二時過ぎまでそこで玉を突いてから歸

つて來ると、門のくぐりはいつも通り明いたが、廣く平ベッたい敷き石を二間ばかり行つた玄關の、こまかい格子になつてるがらす戸はわざとらしく締まつてゐた。

『……』くわッとあたまへ來たので、握りこぶしで思ひ切りひどくその戸を三たびつづけさまに叩いた。

『旦那さまでございますか』と云ふ、婆アやのあわてた聲が聽えた。

『明けろ！』知れ切つてると云はぬばかりに。斯うして、自分は不斷澄子のとがつた聲を責めながら自分も亦もッと大きくそのとがり聲になつて行くのであつた。

耕次の無言はその翌日もつづいて、かの女の目をさけるやうにして家を出た。夜になつて歸つて來ても、無理にかたちの上の出迎へをしてゐるらしい澄子のやうすを見ると、婆アやがかの女に代つて『お歸りなさいまし』と云つたのをも聽かぬふりで、またすッと二階へあがつた。そして机に向つてたばこにマチの火をつけたが、自分の席ではないかのやうに落ち付かなかつた。

『御飯は』と、澄子が聽きに來たのを、

『入らない』と、一言のもとにはね付けた。實際、大阪でわざ〳〵すませて來たのだ。

『あたしは肉的でないから』とか、『男にあまへる事も心が許さないから』とか云ふことをかの女はよく云つた。そしてそれも一種の痴話喧嘩の種に過ぎなかつた。こんな時にもさう思つてるのかも知れないが、問題はそんな單純な、淺薄なところになかつた。寧ろ、不純と粗製との爲めにそんな見當違ひの氣取りが云へてるのを心から直すべきであつた。かの女の所謂情熱はそんなところにあると云ふのだらうが、眞の情熱なる物はそんな言葉の上にはない。かの女にはそれが云つてもどうせ分らない。また玉突きへ出かけて行つて夜をふかした。そして歸つたのは十一時だ。

ゆふべよりも一時間早い。あまりうちのもの等を心配させるのもよくないと思つた爲めにそんな見當違の無言の行はこちらから初めたのだから、またこちらから中止すべきであつた。かの女の初めたのはかの女から先づ取り消すのが例になつてゐたのである。それに、渠は自分が男子としての要求も起つてゐた。かの女の外に女を持たない自分がそれを要求するのは當前の權利でもあつた。が、まだ〳〵いま〳〵しいので、かの女がこちらの書齋に來て、雜誌を讀んでるのに聲もかけないで、自分の机の前で机と丁字がたのあふ向けに横になつた。そして兩手を自分のあたまの下に入れてぼんやりと考へると、ふと、東京の讀賣新聞へ書く原稿があるのを思ひ出した。

半身を起して机に向ひ、かた手であたまのふけをぼり〳〵掻きながら、且考へ、且筆を進めた。やがてかの女は、

『もう、十二時ですから、あたしはお先きへ失禮いたします』と云つて、狹い廊下を隔てた次ぎの室へ引きさがつた。

『……』渠はかの女の聲がずツと當り前になつたのを知つて、かの女も亦こちらの樣子を既に見て取つたのだと思へた。あと一時間ばかりで原稿を書き終へたので、それを小よりにとぢてから、自分もかの女の方へ行くと、果してまた眠らないでゐて、まくらの上からこちらをにツこりして見た。

『……』かの女はその目で氣がすんだのと云つてるやうであつた。

『新聞記者なんかやめてしまはうか？』渠は自分ながらまだ少しどこかにちから瘤が殘つてるやうであつた。

『……』かの女は暫らく默つてこちらの樣子をうかがつてたが、やがて和らかに微笑して、『そんなら記者をやめて、東京へお歸りになつたらどうでしよう？』

『東京へも歸りたくない。歸つたツて喰へやアしない！』

『……』かの女は見る〳〵その顏いろを變へた。そしてそのからだの痙攣がこちらにも感じられた。泣き出しさうな聲で、『ぢやア、つまり、あたし達がゐるのがお邪魔になるのでしよう――？』

『……』渠もさうした考へを――殊に、經濟上では――この頃私かに持たないではなかつた。が、さう面と向つて女に云はれると、こちらも男として『まさか』と笑つてのけるより仕かたがなかつた。

『ぢやア、社でまた何か面白くないことがありましたの？』

『つまり、あんなことをしてゐただけでは、段々葬むられてしまうばかりだ』

『ぢやア、どうしようとおツしやるの？』

『まア、蜂でもしツかり飼つて見ます。』『大きな事業を起さうたツて、その資本もないのだから、直ぐには望めないことであつた。

『……』かの女はまた少し自分で聯想の惡さうな顏つきをしたが、やがてその頰にまで耻かしげを見せて、『あたし、變なことがありましたのですよ――お話しするをりがございませんでしたけれど。』

『何が？』よく聽いて見ると、この二三日前、便所に於いてかの女の子宮の破裂したやうな音がした。けれども、そのあとは別に何ともなかつたさうだ。思ふに、子を產んだ經驗のないかの女がごく初期の流產に氣が付かなかつたのだらう。

かの女との間はそれから少し融和するやうになつた。が、今度は婆アやが突然に歸京したいと云ひ出した。その前から婆アやは氣が變になつたのでないか知らんと耕次らに思はれたことには、少しせツせと用事を仕初めると、きツと口のうちで

『くしや〳〵くしや、』『くしや〳〵くしや』と云ふやうな　何だか分らないことを云つた。多分、主人が一二度外國語の本を音讀したその眞似だとは思はれたが、それを井戸ばたなどでやつてゐると、隣りへも聽えさうで見ツともなかつた。

『また、婆アや――およしよ』と、澄子が叱り付けることも度々になつた。

『お前、あんまり熱いのでのぼせてしまつたんぢやアないかい？』耕次も斯う云つて痛はつて見もした。けれども、婆アやの新たらしく得た癖は直らなかつた。

『旦那さまがあまり奥さまをお叱りになるので、わたしはどうしてもおひまを戴きます』と、澄子にはこツそりつげたさうだ。

『あたし達のおもて向きは仲のいいやうに見えてたのをあんまり信じ込んでゐたので』と、かの女は婆アやを哀れむやうに、そして渠を戒めるやうに云つた、『近頃のやうすを俄かにがツかりしたせいでしようよ。』

『さうかも知れない。』然し、どうすることもできなかつた。もう五十を越えてもゐるもので、こんな遠方へ來てまさかのことでもあつたらなほ大變だから、云ふ通りにして歸してやつた。

それから、土地の女中はいづれもゐつかないで、幾人も變はつた。例の八百屋か、耕次が東京から呼んだ記者かが遊びに來ない時には、三ツ目小僧のお化けが出さうにして、澄子ひとりで留守をしてゐることも度々あつた。

或夜、十時過ぎに歸つて來ると、かの女は下に見えなかつた。はしご段をあがらうとすると、書齋のふすまのあはひからけむりが吹き出してゐた。火事かと思つて驅けあがり、そのふすまを明けると黑いけむりが大きな瀬戸のまる火鉢からむく〳〵と上つてゐる。そのかたわらに澄子が火ばしを持つて坐わつてて、けむたさうな目をしてこちらをじろりと見上げた。

『これであなたの不愉快な根本原因がなくなりましよう。』

『……』何かと思ふと、かの女が戀の記念だと稱して行李の底深くしまひ込んで置いたところの、中野の手紙をすべて燒き棄ててるのであつた。耕次はまだこちらに突ツ立つてゐながら、『それもその一つでしようが――。』

『まだあるんですか？』斯う云つて、かの女は目を火の方に伏せた。

『明けてすればいいぢやアないか〻』渠は一たび窓の一方を自分で明け放つた。『薄い紙の灰が部屋中に飛んでる！』そんなことをしたツて、くその役にも立たないとは思つたが、曾てはこちらが燒き棄てろとも云つたし、また、もうおそいが、いよ〳〵燒き棄てる氣になつただけでもかの女が純全の方へ一歩を進んで來たのかと見えたので、少しでもその手傳ひをしてやるつもりであつた。涼しい夜かぜが山や川の方から吹き入つて來て、けむりは段々とそとへ逃げて行つた。

『あたしの友達を少し拵らへて下すつたらいいぢやアありませんか』と、それからよく云ふやうになつたけれども、人に對して氣六ケしいかの女に向きさうなものは――かの女自身がえらび出さない限り――見付かりさうでなかつた。男ならまだしも、婦人のうちからではとてもなかつた。社へ新らしく這入つた婦人記者をどうかと云つて見たら、こちらが一度芝居の記者席へ同道してやつたのを、も

う、社では怪しんでると云ふ話をしてあつたので、澄子は相手にしなかつた。そして獨りでかの女はこちらが養蜂の教師としてゐる人の細君を――昔の高等女子師範の出だから多少は話せるだらうと云つて――訪問した。が、それも相變らず一般の消極的引ッ込み思案の人であつたので失望したやうすだ。けれども、そこの若い二番目娘を耕次のところへよく來る第三の養蜂家に媒介しようと努めた。それは娘の父がさきの男を信用しないので駄目になつた。

『一つあなたのいい友人をつれて來てあげましよう』と云つて、耕次は社の物置きで生まれた犬の兒を一匹、電車にのせて持つて來て、かの女に與へた。そして自分は矢ッ張り自分を緊張を一番多く蜜蜂の研究に向け、そしてその緊張の連續を、云はば大阪流に、澄子と玉突きの勝負とに向けた。現在に握れる生活の內容若しくは實質はただそこにだけあつて、これに外れないやうに努めるのを以つて自分はやッと自分の存在を認めてゐた。

『あなたも實際は孤獨の人、ね』と云ふことを、かの女からはここまで徹底して云つて貰ひたかつた。

『……』渠はかの女とのあひだにまだ隨分の隔たりがあるのを感じた。

氣を取り直して、渠はまた同じやうなことを繰り返すこともあつたが、かの女は病み付きになつたのかと思はれるほど、その自分ばかりを寂しがつた。そしてたま〳〵こちらが二晩もつづけて玉突きに遲くなると、かの女は家を明けッ放しにして倶樂部の窓したまでやつて來て、出しぬけに泣き出したやうな聲で、

『あなた』と、こちらを呼んだ、『もう、遲いぢやアありませんか?』

『……』渠は直ぐそれが自分の耳に這入つたと同時に、かの女の顏のすぢがぴく〳〵してゐるそのしがめッつらを見るやうであつた。人の手まへもかまはずにまた何と云ふ無作法だらうと心で怒つた。が、自分の爲めに自分の緊張連續の的と的とが相衝突したのだと私かに思つた。たとへば、他の或人に付いて云へば、本妻と目かけ、または目かけと目かけ同士が――。但しこの倶樂部には女ッけはなかつた。『今行くよ。』うッちやつても置けないので、自分もそこ〳〵にして、その窓とは別ながはにひらけてゐる出ぐちからまわつて行つて、かの女に合した。そして無言で歩きながら、かの女のまかせてゐるその手を引いてゐた。こんな時の方が却つて自由自在になるのであつた。

*　*　*

『あんな夫婦はあんたの飼ふてる蜜蜂のやうやさかい。』これは耕次に對して購買組合の主人が冷かし半分に云ひ出した言葉であつた。そしてこちらのいろんな內情を知らない人々は、皆でそれを繰り返すやうになつた。

『君は蜜蜂を飼つてなさるんですか』とも、大阪で名の出てゐる實業家や會社の重役などまでが不思

議さうに聽いた。

『なアに、まだ研究中です』と答へた。そして渠は渠等の仕事に對しても內容と實質に於いては同格だと云ふ自信があつた。

『蜜蜂の家』と云ふことがさうして耕次の家の別名になつてしまつた。

六

かの女は『關根澄子』と改めて、博文館の或婦人雜誌に頼まれてから、三四ケ月もつづけて雜文を書いた。そして毎月十圓づつは取つてゐた。それが中絶した頃になつて、また、東京の新らしい女の一團體から出初めた機關雜誌の寄稿者に頼まれた。そして小說を二つばかり發表した。この方は少しもかの女の小使ひにさへならなかつたが、耕次はかの女がさう云ふ風にして再び社會に顏出しができるやうになれば、段々と眞にかの女の――單に堅い言葉や空想の上にでなく――根本からの獨立もできるだらうと喜んだ。眞にかの女が獨立獨歩ができれば、必らずしもこちらと一緒に苦しませて置くにも及ばないと云ふ考へが、この頃では、渠には、さきに或女を女優に仕立てようとした時に考へた如く、出てゐた。またつづけて一緒に住むとしても、かの女がさうして新らしく社會に返り咲きがやれれば、それだけもとのふる傷をも忘れて、心がゆツたりして來るばかりもその人格や品質が改善されることにならうと考へられた。

そのうち、新らしい女の團體幹部の一名が大阪へ來た何かのついでを以つて池田へ澄子を訪ねて來た。そしてその歡迎會の爲めにと云つて、耕次が世話した記者の細君(これも筆が執れる婦人)がキュラソを一と瓶寄附して來た。豫定の婦人連が集まる前に、耕次のところへも、或小い新聞社の一記者が――これが初めてだが――訪ねて來たので、

『まア、一杯飲まさうか』と云つて、耕次は寄附の瓶を拔いた。そして自分も同じ小いコツプで二杯をかたむけた。庭さきを見て蜂の話などしながら、客に三杯目をつがうとすると、その同じ室にキュラソの寄附者と共にこれも蜂のことを語つてゐた澄子が、突然、例のけんある聲でこちらを叱り付けた、

『さうむやみに飲んでしまつちやア困りますが、ね――それはあなたがたの物ぢやアありませんよ。○○さんが會に寄附して下すつたんですから!』

『ぢやア、やめだ』と云つて、耕次は微笑しながら何げなく瓶の口をした。

それがこちらの初めて來た客を怒らせてしまつたのであつた。客の書いた翌々日の新聞には、『澄子と離別せよ』と云ふ見出しで、二段ばかりに渡つた罵倒の記事が掲載された。キュラソの事件が書き並べられたあとに、『自分は何もそんな物を飲まされないでもよかつたが、こちらを文學上の木

ツ葉武者と見て、初めから鼻にもかけぬかの女の態度が如何にも心外であつた。自分は澄子なる者に敎へを乞ひに行つたのでないことは分つてるが、こちらに對する遠慮若しくは禮儀と云ふことも知らないで、かの女がその自分の夫を自由に左右してゐることを自慢らしく見せたのは、最もこちらを馬鹿にしたのである。あんな女に左右されてる〇〇氏も鼻ツたらしだ。賞むべきことではない。どうせ正式の細君ではなく、妾ではないか？僕は氏の爲めに速かに澄子を離別せんことを勸める。』

『……』耕次はそれを讀んだ時、一度は怒りもしたが、また、筆者が大阪へ下だつた前に東京にゐて、いろんなことをまた聽きしてゐたことを種にして、青年としては餘りに詰らないおせツかひを云ふとも考へられた。離別する時が來れば、そんなことをはたから云はれないでもするだらう。が、一たびこちらからしよひ込んだ以上、こちらの責任だけは輕んじたくなかつた。東京、大阪の友人中にもそれとなく同じやうなことを云ふものがあつたが、渠は同じ意味を以つて答へて來たのである。自分としては、女に煩はされてゐることが――これまでの經驗上――左ほど苦ではなかつた。いや、苦ではあるに違ひないが、人生はすべて苦であるから、これもその一部として、そして燃燒する時は全部ともして、それを身に帶びつつ勇猛に努力する方が氣持ちいいのであつた。

室町神社の森に蜂がたんと來てをりますと云ふ報告を出入りの小僧がもたらして來たので、耕次はどこからか飛んで來た分封群ではないかと思つて、澄子と共に急いで行つて見た。すると、神社の後方で、おほ杉が立ち並んでるそのあひだなる一本の木へ、蜜を取りに來てゐるのであつた。何か知らぬ木の一丈あまりも高い枝々の周圍に、白いこまかい花が澤山咲いてる。そこへ何千匹と云ふ蜜蜂がたかつて、嬉しさうにぶん〳〵云つてる。かたちの大きいのを見ると、多分、耕次の敎師のところの西洋蜂らしかつた。欲しいけれども、蜜取りには王のついて來るわけがないので、どうすることもできなかつた。それに、とまつてるところが高かつた。渠はただそこを肩の痛くなるまでも久しく見上げてゐて、そのよく働いてる狀態に感心した。

或日、また報告があつた。それは購買組合の主人が云つて來て呉れたのだが、

『倶樂部のすぢ向ふのうちへ仰山蜂が飛んで來て、庭の松の木の枝にとまつてをります――』ぶんぶん云つてやかましいばかりでなく、子供の爲めにあぶないから、早く何とかして呉れろと云ふのであつた。

『……』今度は分封群に違ひないと渠は思つた。然し、先づ、『そのうちは主人が迷信家ぢやアないか、ね』と聽いて見た。福の神として貴ぶところもあるのだ。梅田停車場のそばの宿屋で飛んで來た蜂群を大切に飼つてから、その家が繁昌したと云ふ話もある。また、電軌會社の某重役の住宅が舊市街の山手に在つて、そこの物置きの家根へ熊蜂が巣を拵らへてると云ふので、それを耕次が主導者になつて、自分の敎師やその敎師の弟子と共に、棒のさきの竹の皮一面に鳥もちをつけたのや、一匹づ

つをはたき付ける爲めの庭球ラケトやを、他の武裝と一緒に用意して、退治に行つた。そこの主人は丁度留守であつたが、あとで大いに怒つた。と云ふのは、こちらには熊蜂が黄蜂と共に最も有害の敵であるけれども、主人は私かに矢ツ張り蜂を福來のしるしだと思つてた。

『そんなことはありまへんやろ――今、留守やが、奥さんや御隱居さんが僕に早う何とかして呉れと云やはるのやさかい。』

『ぢやア、一緒に行かう』と云つて、耕次は一つのから箱とベイル附きの帽子とを以つて行つて見た。

土地に慣れ切つてる爲め、氣ままで氣六ケしいと云はれる日本蜂だから、逃走者であらうと思つたが、その騒ぎをやツと納めたところであつて、庭の眞ン中なる低い松の枝にかかつてる圓がた葱に密集してとまつてゐる。王を發見して箱に入れさへすれば、あとは皆ついて來るのだ。が、渠はベイルをかぶりつつ大きな茶碗を以つてかたツぱしからその密集群をすくひ移すのだけれども、また散亂するばかりであつた。王のゐどころが發見されなかつた。けれども、若し王を失つてるものなら、斯う一つに集つてるわけがないと見たから、今一度靜かに密集するのを待つて、葱ごとそツくり箱に入れて持ち歸つた。

『收容の仕かたがまだ本統ではない。先づ、霧を吹ッかけてからにしたら、さう散亂はさせなかつただらう。』教師から斯うあとで敎へられた。實は、耕次も理窟では知つてたが、ちよッとあはてた爲めに忘れたのだ。『然し』と敎師の言葉はつづいて、『蜂のとまつてる物ごとそツくり持つて來たのは、まア、七十點ぐらゐに價へする思ひ付きぢや。』

『……』第三の養蜂家に告げて見ても、そこでは逃がした群はないと云ふので、耕次はその收容した群をも自分の物にして、置くことにして、他の二群から蜜やたまごの附いた巣の枠を一つ宛拔き取つて、それにから枠をもつけて新らしい蜂群に與へた。それがまた四方に働き出して、箱の中には蠟で眞ッ白の綺麗な巣ができ初めた。そして一つびとつの房には新らしいたまごがふえて行つた。庭の空を眺めてゐると、黑い小いものが澤山勢ひよく飛んで行つたり來たりする。まるでおほ風の日に音なく雨が降つてるやうであつた。

栗の實が熟し初める頃には、この小人間どもの喰ひ物が少くなつて來るので、蜜蜂以外のなまけ蜂はよく蜜蜂の箱を目がけて襲ひ來たる。で、熊蜂や黄蜂が一匹でも庭へやつて來ると、耕次はラケトの代りに雜誌などを手にしてはたき落した。その頃では、ます〳〵社の仕事よりもこの方に渠の心がそそがれてゐた。

或日、渠はぼんやりと庭に向つてそらを眺めてゐると、いつもの黑いかたちよりもずツと大きなのが一つ塀のうへに浮び現はれた。ただ一つかと思ふと、また一つ。そして、また一つ。いや、五匹までもが揃つてやつて來たのである。

『……』黄蜂の襲來！渠は斯う思つた時、ぎよッとして自分ながら胸のとどろくのをおぼえた。日本の海軍が露西亞艦隊に遭遇した最初の勇ましさと恐怖とはこんなものでなかつたかと思はれるやうな氣持ちをいだいた。そして急いで二階の扇子を取りに行つてから、庭へ下りた。

黄蜂は箱の入り口の方に隱れてゐて、歸つて來る蜜蜂を襲ふが、熊蜂は直接に箱の入り口に向ふ。手わけをしたやうにあちらこちらの箱を狙つてる敵を、耕次は三匹まではたき落したが、そのうちに他の二匹を逸してしまつた。それでも、自分はいい氣持ちであつた。

すべて自分の生活に收される範圍は自分の國家ではないか！自分は今その自國防衛上、自分の思ふ通りの自由と全力とを以つて現實的正義の戰ひを戰つたのである。

七

また、この頃は蜜蜂逃走の時期でもあるので、山の方からでもまたやつて來ないか知らんと思つたのが、ふと或日の出來ごころになつて、渠は自分から澄子を促して池田山へ登つて見る氣になつた。かのかも喜んで從つて來た。

八百屋が時々恭の相手につれて來る禪僧が山の中腹に住んでゐて、その寺へは耕次も澄子も行つたことがあるので、

『そこの道は知つてるから、もう、面白くないでしようよ』と、かの女は云つた。

『ぢやア、一つ別なところから。』つい、こないだ祭りがあつた稲荷のおやしろのあるところから登つて行くと、正面の方角が違つてて、猪名川の向ふがよく見えた。平地の稲田のあひだを寶塚の方へ電車が消えて行く山の鼻まで。然し、谷を一つ上へまはらなければ、室町の方の見える高みへは行けないのであつた。

『行つて見ましよう。』かの女はさきに立つて進んだ。『松だけがありさうなものです、ね』とも云つて、ぽこ〳〵した土をかうもり傘のさきで引ツくり返して見もした。

山を一つ移ると、兩がはに高い赤松が立つてゐて、そのあひだから下の樹木のあたまを越えて市街がよく臨めるところがあつた。舊い方のをばかりでなく、そのさきもだ――いや、そのまたずツとさきの伊丹あたりも可なりはツきりと。そして六甲山はその右手にそびえ列なつてる。いろいろな事業――戀をも籠めて――のけむりに曇つてる大阪市は、少し左り手にそれと分るだけにうす遠く。

さう云ふ風にこちらの眼界を廣げてゐると、横ながに走つてる箕面有馬の電車軌道は殆ど眞ぢかの眼下に在るやうだ。その軌道がまた、池田の部分では、わざ〳〵新舊市街をその兩方から目かくしするやうに高くなつて走つてゐる。そして行き來の電車に隱れたり見えたりする新開室町の家々は、それぞれ小さくマッチ箱のやうに仕切られてる。そのうち、正面の並びの川づつみに寄つた方に、自

分らの『蜜蜂の家』もそれとゆび指された。

『ああ、いいこと！』

澄子が少し前にさう叫んだのであるが、それが聽えてゐなかつたかの如くして、耕次は改めて別に簡單に斯う尋ねた、

『どうだ、ね？』

『いいところです、わ――あなたは早くつれて來て下さらないんですもの！』かねがねの不平が全く喜びに變じたと云はぬばかりにして、かの女は先づそこに据ゑつけてある切り石に腰をかけた。そしてこちらの手を握つて無意氣と思はれるほどぐッと引いて、『あなたもおかけなさいよ。』

『……』渠は、かの女の不斷沈んで血のけの失せたやうになつてた顏に時ならぬうしほべにがさしてゐたのを見て、自分もちよッと頰のあたりが赤くなつたやうに思つた。そして寧ろ秘密で自由な家にゐたかつた。

『また衝動が』と、然し、かの女にほんのうはべばかりの氣取りや高尙がりを以つて――これは實にかの女の小理窟に過ぎないではないか？――こちらをただの一ときでも滑稽化されるのが面白くない爲めに、――さうだ、それが爲めにこちらはわざと家を遲くまで明けて、かの女を小理窟が出ないほどに泣き氣持ちにさせてやるのだが、――今もただ默つてかの女のわきへ腰をおろした。

『……』暫らく無言がつづいた。

『いいぢやアありませんか？あなたも何とかおッしやいよ。』

『いい、ね。』渠は止むを得ずただ機械的に返事をした。そして私かにかの女の浮かれかたが曾て熱海の梅林に於いて現はれたのと同じやうであると考へて見た。少しでも天然の風景に打たれなければ、直接の愛情が起らないとは不思議でないか？愛情的神經麻痺の傾向でもあらうか？また、かの女に關する昔の聯想がよくなかつた。そしてます〳〵そんな遊びにはわざとにもおつき合ひはできなかつた。早く歸宅して蜂の働きをでも見てゐる方がまだ〳〵ましであつた。

『……』かの女はこちらがかの女の天然憧憬にかかはらないのをじれ出したやうにただ獨りで立つて見たり、坐わつて見たり、また坐わつたり立つたりした。

『……』渠はそれを見てゐるのも馬鹿々々しくなつた、心は張り詰めてゐながらもだ。一間ばかり前方のはづれまで進んだかの女の後ろから聲をかけて、『もう、行かうぢやアないか？』それとも、こんな時にこそ、かの女がこれまで云はないで內心にばかりこじれさせてることをすべて白狀するか？

『もう、少しゐましようよ。』あまへる聲ではあつたが、向ふ向きのままだ。

『……』渠は往生して立つ氣もなくなつた。かの女のだらりとさがつた雨がすり綿お召しの書生羽織り――これを先日からまた出して不斷羽織りに着初めたのだか――の脊中に向つてこちらからげん

こつを一つ喰らはせる眞似をした。それから、『ちやア、いらッしやい。』

『……』かの女はこちらを見ながら素直ににこ〳〵して立ち戻つて來た。その口に渠はいきなり接吻した。――かの女はそれからその目を內らに向けて、下の市街の方へ暫らく後ろを見せて立つてゐた。

やがて山を下だつて行つたが、途中で出會つた三名の書生に耕次は特別にじろ〳〵見られる氣がした。そして計らずも知つてる禪寺の前庭へ下りた。道がさうついてたからである。友人がゐればそこへ一と先づ立ち寄つて、一服してもいいと思つたが、見られなかつたことにも氣が引けて、直ぐその門を出た。

もう、松だけも澤山出て、いよ〳〵秋の中ごろの景色になつた時、耕次は二階の書齋で、近ごろ外國から注文で届いた養蜂書の一つを讀んでゐた。すると、澄子が遊びがてらあがつて來た。そして、『今度の女中は落ち付きさうです、ね』などと云ひながら、明け放した窓の欄干にかた腕を奥までもたせかけて、澄み渡つた空をながめてゐた。やがてまたこちらに向いて、『何でしよう、ね、あれは？』『あれかい？』渠もそれに氣が付いてゐないではなかつた。こないだから、何か知らん、この近所のそらでぎやアッ〳〵と云ふ聲が聽えてゐたのである。五位さぎにしてはその聲が大き過ぎた。けれども、左ほど興味のあることでもないので、今も亦聽き流して、書物に書いてある王蜂製造法のことから目を離さなかつた。

生き物を製造することができれば、人間の女をだッて好きなやうに造り換へられるわけだが、ここでは少し用語例が變はつてるのである。一群に王が逃げるか死ぬかした時、その群の散亂若しくは絕滅や、働き蜂の不自然女性への還元やを妨ぐ方法は二つしかない。他から王を持つて來て與へるか、働き蜂になるべき幼蟲を途中から王臺に入れて、それを仕立て上げさせるか。若し後者の場合には、幼蟲を小房から王臺に移す時、小さい銀さじを以つてそれを痛めないやうにそッと一つ移してやらねばならぬとある。

『鶴ですよ――鶴です、わ！』

『どれ、どれ？』渠も俄かに珍らしい氣がしたのでかの女のそばへ立つて行つて、聲のする方のそらを見まはしたが、近眼の目がね越しではなか〳〵見えなかつた。

『而も二羽、――つがひでしよう。』

『……』渠は、かの女のあちらこちらと二三度に急がしくゆび指す方を追つて行つて、やッとその形を認めた。おほ空のうへに高いから小さく見えるけれども、羽根が白く、足が長い鳥で、その勢ひと云ひ、飛びかたと云ひ、初めて見たのだが、如何にも鶴の趣きであるらしかつた。こないだ自分らが登つて見て二度とはない徒ら氣を起した池田山をすり鉢の底として、そのずッと上のそらへ無形の

周圍とふちとを廣げた大圓をゑがいて、二羽の鳥が遠くかけ離れて兩方から鳴きかはしつつ、大きくゆッたりと飛んでゐる。自分にはそれがよそごとではなかつた。そらも鳥も、またその底なる山も皆自分なる緊張生活者のものになつてしまつて、渠はかの女に禪僧の如く無言の微笑を以つてそのつがひ鳥の數と同じだけの指を出して見せた。

『およしなさい』と、かの女はそれをひら手でよこにはたきのけた。その時のかの女には不斷のいやな氣取りも高尚ぶりも見えなかつた。ただ恥かしかつたやうにこちらを見る視線が亂れながら、『あなたも隨分ひどい、わ。』

『……』渠はたださう聽いただけででもけふの空の如くいつに無い天空海濶な一種の征服慾を滿足させた。

八

或新聞社の催しで、大阪から箕面まで五里間の徒步競爭があつた。その到着點が箕面公園なのでそこへ耕次も澄子をつれて見物に行つた。すると、意外にも、耕次とその最初の妻との爲めに媒介人となつた農學士の細君に出逢つた。かの女は出しぬけから、

『どうしたのです、ね、この頃の評判は』と云つた。

『どうも斯うもないです。向ふにも弱みができたのですから、早く別れて呉れさへすりやアいいのです。』

『そりやア、どうせさうより仕かたがないのでしようから、一度よくお話を伺ひたいと思つてましたの。』

『こッちにいらッしやるとは知りませんでしたから――』『よく聽いて見ると、その所天は大阪府の技師をしてゐるのであつた。そしてけふはその親類の子の應援に來たのであつた。

その一週間ばかり後になつて、東京なる妻も呼ばれて農學士のところへ來てゐたが、耕次は會ひたくないので、その別室に於いて學士夫婦と共に離婚の協議をした。そして手切れ金として拂ふべきものの一部なる百五十圓を學士から借りて拂つた。

『お禮も云つて貰はなければならないし、またこれからおつき合ひもしたいのですから、一度、今度の奥さんをおよこしなさいよ』と云はれた。

『あんなに物をつけ〳〵云ふ人にあたしは會ひたくありません』と云つて、然し、澄子は一度も行かうとしなかつた。けれども、耕次の見たところでは、つけ〳〵云ふ女は却つてこちらの方であつた。渠の推察をめぐらして見ると、かの女は自分からも他日同じやうな場合に立ち至つた時、自分らには――かの房子さんを別にちやんとした媒介者に賴んだわけでもなかつたから――一人もそんな時の離

婚の媒介をさへして呉れるものがなからうと云ふことを寂しんだのかも知れなかつた。別れてゐればこそかの女は手紙も時々出してゐるが、東京にゐた頃は、もとのやうにさう親しく房子を思つてゐなかつた――これも澄子がふる傷にさはられるのを避ける爲めのやうに。

兎に角、隨分長い間の一問題が解決したし　養蜂のこともいよ〳〵獨り立ちでやつて行けるやうに思へて來たので、

『これを機會に東京へ歸らうか』と、渠はかの女の意を探つて見た。

『そりやア、あの新らしい女の團體の爲めにもいいかも知れませんが、ね――折角、わざ〳〵こちらへ來たものぢやアございませんか？』

『……』その返事によると、渠が見たところ、かの女は果して東京並びにそこに住む舊知人どもに對する反感がまだ殘つてるのであつた。そしてまたこの地に於いて新らしく得たところの戀愛的記念物――そのうちには鶴もあらう。やま川もあらう――に執着し初めたのであつた。

――（大正八年三月）――

わが子のやうに

『……』姉崎は、第二の妻の生みの子でない者がひとりゐる爲め兎角家庭に波瀾が生じるのを見て、さきに一度先妻のところから呼び返した子ではあるけれども、再び思ひ切つて手放してしまつた。あたまもよく、中學での成績も可なりいい方ではあつたが、その第二の母に向つてはどうしても反感ばかりを持つてゐた。勉強をすることはするが、女中のせいにして瀬戸物を毀わして置いたり、砂糖をなめてしまつたりした。そんなことならまだしもよかつたが――母が中途半端な西洋音樂の趣味に飽いて三味線をまじめに稽古し初めたのをも、子は自分の勉強の妨魔になると云つて、いつのまにか三味線の皮を破つたりした。そんなことが段々と嵩じて行つて、ついには、母の女としてはいのちとも云ふべき姿見にもひびを入れてしまつた。

父として、正面から又うちわからも、何と敎へたりなだめたりしたツて、とても駄目であつた。それに、斯く生意氣になり出した子をうまく操縱して行かうとするには、今の母は少し年が若過ぎて六ケしかつた。で、止むを得ず、思ひ切つて、商店の小僧に出してしまつた。何かになつても世に出る素質が備はつてるなら、小僧からでもきツとあたまを持ち上げて來るだらうと云ふ最後の希望をもつてた。尤も、父の云ふことを聽かぬ子に殆ど全く愛想をつかしてだが――。

すると、矢ッ張り、渠にはその周圍がそれだけ少し寂しく感じられた。さア、これを書き寫せとか、直ぐ郵便局まで行つて來いとか命令するには、全く無學な女中では物足りなかつた、それでも、初めのうちは辛抱してゐたのである。が、近頃になつて多少有利な事件の辯護を二つも引き受けたりして、自分の新らしい職業の方にも少し急がし味をおぼえてゐたところへ、

『どうだらう一つ、君のうちに置いて貰ひたい書生があるが――』と紹介して來たものがあつた。

『話しによれば置いてもいいが』と答へた。そしてそれがいよ〳〵本箱や蒲團を荷車に乘せて届けて來た。が、荷が届いてゐながら、當の本人が來ないので、

『どうしましよう、ね、運び賃を拂つて呉れいと云ふのですが?』妻は決しかねてゐた。

『拂つて置くのは何でもないが――』と答へながら、姉崎も玄關に出て見た。本人は一緒について來なかつたか?』

『へい』と、車屋はよわつてゐた。『さきへ電車で行つたものと思つてをりました。』

『それぢやアそれで、早く來てゐなけりやア駄目だのに! 第一、いくらで約束したのか分らないし、――』

『それは確かに壹圓五拾錢でした。』

〈それにしたツても、受け取つた荷を本人が見てまだ足りない物があるとでも云はれたら困るからな。』

『そんな不正直なことはしてありません。』

『それはさうだらうが』などと、あしらひながら、まア、少し待たせてあつた。が、まだ早い時間を歸ればまだ仕事ができるのにと思ふと、餘り可哀さうになつたので、云ふ通りに拂つて置けと妻に命じた。

『……』本人はそのうちにやつて來た。

『荷が届きましたよ。』妻の聲であつた、『壹圓五拾錢でしたか？』

『さうですが――拂つて下さつたのでしようか？』

『……』まだ隨分のん氣さうなことを云つてるのが聽えるので、姉崎も二階から下りて來た。『一體、荷をさきへ届かせると云ふものがどこにある？君が先づ來てゐなけりやア、約束が分らないし、また、荷物が滿足であるかどうかも分らないだらう――？』

『すみませんでした――友人のところへちよツと寄つてをりましたので。』

『そも〈から君は一つの失敗をしたのだよ――注意し給へ。斯う云ひながらも、私かに新らしい子を貰つたやうな氣で、もと實子を入れてあつた室を渠に當てがつてやつた。堀を隔てて帝國議會の方に向いてゐる玄關の格子戸を這入つた、つき當りの三疊の、その右手にある四疊半だ。小さい机は渠も持つて來たけれども、そこにあるティブルと椅子とを使はせてやることにした。

増田と云つて、〇〇大學の法律科に這入つてたものだが、親からの學費が絶えてまご付いてたのであつた。そとへ出したわが子に比べては、たツた三つしかうへでないのだが、この青年のおとなびてゐる點に於いてはとてもわが子などは――たとへ、たまに歸つて來たとしても――及びも付かないだらうと思はれた。尤も、この年齡の時代には、年が二つ三つ違へば、もう、おとな同士で云へば二三十年の違ひと同じであるかも知れないが――そして、さうして見ると、わが子も今年一杯、若しくは來年ぢうには、これと同じほどにませるのだらうが――。

先生、これからはわたくしはどうせ獨學でいかなければならないのですが、先生にも敎はりながら、どう云ふ風に勉强していけばよろしいのでしよう？』

『……』こちらはこの時増田がどんな書物を持つたゐるかと云ふ好奇心で、渠の部屋の椅子に腰をかけて渠の立て並べてある本を調べてゐた。多くの筆記のほかに、綺麗な製本の憲法論や法學通論や民法總論などがあるあひだに、夏目漱石の『虞美人草』もあつた。『君は小說を好んで讀むか、な？』

『はい、時々讀みます。』書生はかた手をテーブルのはしにかけて立つてゐた。『いけないでしようか？』

『……』姉崎はわが子もいろんな小説を人に借りて來て讀んでたことを思ひ出しながら、『いけないこともないが、その讀みかたにある、な。』斯う答へるより外に――自分には經驗が少いので――何とも云ひやうがなかつた。今どきの青年は教育家らの心配する通り、それが爲めに墮落し易いのではなからうか？考へて見ると、自分も若い時に女郎買ひはしたことはあるが、情神まで墮落したことはない。いや、そんな餘裕がなかつたのだ。『前以つて云つて置くが、僕も獨學ぐみの方で――人とはその出が全く違ふから、ね。長らく憲兵さんの一人であつて、やツと辯護士試驗にとほつたのだから。』

『では、わたくしも先生に倣らつて奮發しましよう。』

『あア、そのつもりで勉强し給へ。』主人らしく云つてのけたが、自分には殆んど讀んだ經驗もない小說を讀んで、而かもそれが正當に分る男とすれば、さう馬鹿にもできまいと思へた。言葉もはき〳〵として、賴母しいところがあつた。それで、ほん立てのあひだにあめちよこの十錢入りがあつたのなどには、左ほど氣をとめなかつた。

皆が一緒に食事をしてゐる時であつた、妻はこちらに向つて、

『增田さんはうちへ來てから、御はんがおいしくツて溜らないんですツて』と告げた。

『それはまたどうしてだ』と受けて、增田に飯をよそはせながら、『僕も經驗がないではないが、自炊をしてをれば自分の焚いた物がうまい筈だが、な？』

『もとは自炊もやりましたが、めし屋へたべに行つてたんですツて』と、妻は說明した。『自炊がめんどくさくなつて。』

『それぢやア仕やうがない。』

『ところが、めし屋のは何度場所を換へて見ても、うまいところがないのです。だから、つい、好きな物を買つてすますやうになります。』

『好きな物とは――？』

『それが、ね』と、果物ずきな妻が引き取つて、『いやなことには、あまい物ですと。さうして增田さんは自分の胃を毀わしてゐるのですよ。』

『……』姉崎には直ぐさツきのあめちよこ入れと小說とのことが一緒に心に浮んだ。そして增田を矢ツ張り書生ツぽだ、いや、うちの子どもも同樣だらうと見て、渠に對して相當に有してゐたところの、尊敬心が先づ可なりうすらひでしまつた。けれども、その方が堅くるしくない親しみになつていいだらうと考へながら、『道理で君の顏の色つやが惡いと思つた。黃疸病になりかけのやうだぜ。目の色も尋常ぢやない。』

『さうでしようか？』增田も餘ほど心配さうになつた。

『それに』と、姉崎は子どもを時々戒しめたのと同じやうな心持ちになつて、『君の目がねも恐らく近

眼のぢやあるまい。』

『老眼のです。』

『さうだらう。まだ微兵まへだと云ふのに、――近眼ならまだしも――老眼をかけてをると云ふのは、そこに何か意味があらう、な。きツと、君の喰ひ過ぎや、あまい物過食の結果だらう。注意し給へよ。』

『若しそれぢやア　わたくしも何とか改良しなければ――。』

『増田さんはたべ過ぎちやア、タカヂヤスターゼを飲んでいらツしやるのですよ。わたしはそりやアよくないと云つてゐますの。』

『さう、さ。』姉崎は然しうちが喰ひ物をけち臭くやかましいのだと思はれない爲めに言葉を添へて、

『めしの喰ひ過ぎはまだいいとしても、菓子の喰ひ過ぎにはうちの子どもも一度やられて黄疸になりかけたことがある。』

『そんな時にはしじみの味噌しるが一番よくききましたが、ね』と、妻は増田に語つて、それからこちらに向ひ、『一度増田さんにもたべさせて見ましようか?』

『それもよからうが――本人が直す氣にならないぢや駄目、さ。』

『これから直します』と答へゐてた。が、その日にまた渠はこツそり菓子を買つて來た。そしてそれを自分の部屋で喰べてるところを、うちの下の女の兒が見付けて、

『増田さん、あたしにも頂戴』と云つたさうだ。で、止むを得ず一つを與へた。すると、今一人、妻のつれ子の男の子も欲しさうに見てゐたかして、貰ふことになつた。それをあとになつて、その男の子が母にうち明けたので分つてしまつた。

『わたしはよして頂戴とおこつてやりました、わ』と、妻は二階へ來て私かにそれをこちらへ告げた。

『子供のためにならないぢやアございませんか――いやしくなつて?それに、たべるのは子供だましの駄菓子ですよ。貰さんの時のやうに、また近處の評判になつてしまひます、わ。』

『困つたものだ、な。』姉崎は自分の妻が妻自身のことをばかり考へてゐたのでないことは前にもよく分つてゐた。貰もよくうちで喰ひ過ぎた。その上にも、やつてある小使ひを以てよく買ひ喰ひをした。毎日、中學へ出て行く時は十分にめしを喰つてるのにも拘らず、そとへ出ると直ぐ焼き芋屋へ行つた。それが近處一般の評判になつて、近處のかみさんどもが貰の出て行く後ろ姿を見ると、

『また姉崎さんのところの坊ちやんが芋屋へ寄るから見て御覽よ』などと云ひ合つたさうだ。

『……』それをこちらは最初に氣が付かなかつたが、注意して呉れるものがあつたので分つた。つまり、妻がまましいので、まま子に十分に食物を與へないからであると見られてゐたのだ。以つての外のことであつた。それは子供によく云つて聽かせて直つたが、矢ッ張り、どこからか物を買つて來

て、親や兄弟や女中に見られないやうにして、寢どこの中でむしや〳〵やつたり、便所へ行つてたべたりした。それが爲めにだらう、勉强はよくしても、いつもあたまが痛い、痛いと云つてゐた。

ところが、今回の書生もまた、やがては、便所でこツそり物を喰ふやうになつたのである。貢の時には妻も子供の教育上には犧牲を惜しまぬからと云つて、便所のきん隱しの前の方に白い不思議なこなが散らかつてるのをゆび先につけてちよツとなめて見た。

『さうしたら、果してあまい味がして、お菓子のこなぢやアありませんか？まるでおはなしに在る意地きたないお嫁さんや、しうとさんのやうです、わ、ね！』

『困つた、な』と、その時も答へた。それと同じやうなことを妻はまた發見したのだ。けれども、喰ひたい病はとめられると却つてます〳〵意地ぎたなさがつのるものだし、それに今回のは自分らの子でもないのだから、さしさはりのない限り、成るべくうツちやつて置くことに夫婦は相談をきめた。

『然し、わたし達の食事中にははばかりへ行くことだけはやめて下さいよ』と、妻は增田に對して少し神經質的になつて宣言した。增田は齒が殆ど皆取れて入れ齒になつてると云ふので、堅い物が喰へず、また食事の進みが遲いけれども、妻が子供の世話や所天の給仕をしながら箸を運ぶのよりも早くおしまひになる。そして渠は箸を置くが早いか、必らず便所へ行くのであつた。

『……』姉崎は妻がさういふまでは左ほど氣が付かなかつたので、妻や女中の急がしい時には增田にも自分のめし茶碗を渡すことが度々であつた。が、喰ふと直ぐ下へ出しに行くと云ふことに氣が付いてからは、自分も增田の給仕を餘りどツと感じなくなつた。たばこになつてから、『君、便所へは起きると直ぐ行く習慣をつけるといい、ね。時間から云つても一番便利な時で、それがまた一度習慣になると、毎日その時刻でなければ出たくならぬものだ』と云ふ、自分の經驗などを敎へた。

『ちやア、さうして見ましよう。』增田は他の點に於いてはごく素直で、從順で、一度子供に懲りたこちらに取つては、氣持ちのいい青年であつた。或手紙の文句を書かせても可なり書けた。

『あのくせが直りさへすれば、いい男です、わ』と、妻もかげで賞めてゐた。

主人が湯好きの爲めに朝から立てて置く風呂のことに就いても、大抵の女中では石炭に火をつけるこつがなか〳〵敎へても分らないけれども、增田はさすが男だけに――うちの釜が舊式で火が燃えにくいにも拘らず――直きにおぼえてしまつた。

朝は主人と主婦とだけが這入つてしまつたあとを、またよく燃して置いてゆふがたまで湯の加減を持たせ、再び主人夫婦と子どもが這入つてから、あとを書生や女中に與へるのである。が、增田は、

『けふはやめて置きます』と云つて、湯に這入らないことが多かつた。

『折角、君がせツせと焚いて置きながら、這入らんとはどうしたんだ――うちでは、皆綺麗好きなのだから、ひとりでもあかだらけになつてをる者があると面白くないのだから、な？』

『然し、湯に這入ると、ぞッとすることがあります。』

『それはこれまで這入りつけぬ爲めだらう――？』一つには、また、それも增田の胃が慢性的に惡くなつてゐて、その結果が皮膚をまでもよわくしてゐるのだらうと思はれた。

或日、客と下の座敷で將棋をさしてゐると、增田もやつて來て、

『拜見してもよろしうございますか』と云つた。

『君も分るのかい？』

『少しは知つてゐます。』

『……』何だかなか〳〵分つてゐさうで、むづ〳〵してゐるやうすが見えたが、姉崎は主人としてただ寛大にうッちやつて置いた。增田はやがてふところの中から何物かを出して、口へ持つて行つた。そしてその口をもぐ〳〵させた。それが一度ですむかと默つてゐたら、二度やつた。そしてまた三度。その初めはそれでも遠慮しながらのやうに多少の時を置いたが、三度目四度目になると、殆どつづけざまになつた。酒がつのると、ただうちで飲んでるのでは面白くなくなつて、雪見や花見やその他の變はつた場所へ行つて興を添へたがると云ふが、增田の喰ひけも、こちらの勝負に私かに興を添へさせてゐるのかと思ふと、少し癪にさはらないではゐられなかつた。で、こちらは初めての怒りを顏に見せて、それでもまだ言葉は優しくして『君は、まア、向ふへ行つてゐ給へ』と命令した。

『はい』と、增田は相變らず素直に行つてしまつた。

客が歸つてからのことであるが、主人は渠に向つて、

『君はあんなことぢや落第だよ。これから一人前になつて行かうと云ふ男が主人の客がゐる前で駄菓子を喰つてるなんて――まさか、子供ぢやあるまいし！』

『すみません。氣が付かなんだのです。』

『あんなことに氣が付かないぢやア――』それでも、增田に對して子供らしい意地ぎたなだけが直ればいいと考へてゐたのだ。

が、或日、ゆふがたから渠がちよッと友人のところへ遊びに行きたいと云ふ許しを得て、出て行つたあとで、女中がその主婦に向つて渠のひどいしらみたかりであることを訴へた。すると、主婦はまたこれをその所天に訴へたのである。

『あなた、ちよッと來て下さい、な』と云はれたので、姉崎は二階を下りて、もう、子供を寢かしてある妻の部屋へ行つて見ると、かの女は氣味の惡さうな顏つきをして、『增田さんにはどッさりしらみがたかつてるさうですよ。』

『さうか？』直ぐ二三日前に自分のした紐に大きなのが一匹ゐたのを思ひ出した。かの女にも告げようと思つてたのだが、その後何ともなく、且、仕事に急がしかつたので、そのままになつてゐた。『お

れにも一つゐたが、それぢやア増田のだ、な。』

『わたしはまた二匹取りました、わ―どうも不思議だと思つてましたが、あの湯殿へ腰卷きを置くのがよくなかつたのです、ね。』

『……』姉崎は、寧ろ蟲のことよりも、その蟲が夫婦以外のものにも共通であつたことを先づ面白くなく感じた。で、何となくいきどほらしい感情が先きに立つて、『直ぐ追ひ出してしまはう、きたならしい！』

『そりやア、どうせさうしなけりやアならないでしようが、まア、思つてもぞツとするぢやアありませんか、これも貢さんの時のやうに』と云つて、かの女が女中の告げたことを取り次いだによると、自分らに移つてゐたのと同樣に麥つぶほど大きなのが、襦袢の襟うらなどにづらりと行列してゐた。女中が何げなく襦袢を洗つてやると云つたら、増田はそれに及ばぬと答へてゐたさうだが、自分でも知つてたからであらうと云ふのだ。無理にぬがせてよく調べて見ると、襟うらに限らず縫ひ目と云ふ縫ひ目にはずつと白い玉子が殆どすきまもなく附いてゐて、そのあひだにまた大きな親がいくつも喰ひ込んでゐた。それをつぶしただけでも五勺や一合にはなつただらうと云ふのだ。

『ぢやア、湯に這入るとぞツとすると云ふのも恐らくその關係だらう。』胃病の爲めだとは取り消しであつた。

『つぶせるだけはつぶして、假りに洗つて置いたさうですが』と、妻はなほその聲までをも氣味惡さうにして、『子供のおしめなどと一緒のところぢやア移つても困ると思つて、別なところにしたのです。きツと、あの人の衣物や蒲團にもついてゐますよ。あの人はよく、どてらを着て御はんでも何でもたべるでしよう――きたないぢやアございませんか？なんだツて、麥つぶほどもあると云ふんですもの。それがぞろぞろ匐つてゐちやア――。けふはねイやがたツた一枚の襦袢におほかた半日かかつてると思つてましたら、今聽いて見ると、その麥つぶを澤山地めんへ並べてうへの子供と一緒に競爭させたりなんかしてゐたんださうですよ。』

『ねイやも亦馬鹿なことをする、なア――一體、その襦袢を洗つたりしないで、――どうせさうなつては取り盡せないものだから――ひらペッたい石の上にのせて、また石か何かで打てばいいのだ。』貢の場合を考へて見ても、その母が不精で、その子をしらみたかりにさせたままでこちらへ渡したのだ。何も知らない子は、ただからだがかゆい爲めに、夜なかでも夢中に爪でぼり〳〵かいたものらしい。こちらが氣づいてからの渠をはだかにして見ると、からだ中の皮膚と云ふ皮膚はかき荒されてがんがさのやうに血がにじんだり、でき物になつたりしてゐた。最初の妻と無理に別れたのをまだ多少は氣の毒に思つてた自分だが、かの女の不精もその子をこんなにまで苦しめて知らないでゐるのかと俄かに憎ましくなつた。その時は、自分がさきに立つて子供のシャツをそのまま石の上にのせ、かなづち

を持つて打ち叩いた。すると、その叩く度毎にぴしり〳〵と云ふ音がした。そして不都合な先妻をあはれな子の爲めになぐり付けてるだけの氣持ちよさをおぼえた。が、その子をも亦別な不都合の爲めに家から出してしまはねばならぬやうになつた。

『どうしましよう、ね？』

『……』たとへ置いてやるにしても、このままでは妻が承知しないにきまつてた。かの女は貫に對しても或程度までの讓歩をしてなほ穏和ができぬと見た時、こちらに向つて止むを得ないから何とか別な道を講じて呉れろと訴へた。そしてそれはこちらに取つても尤もだと見えた。まして今回のは出してしまへばもとの他人である。そんな者の爲めに今後の家庭にまた騒ぎを起すでもなかつた。『斷わつてしまうより仕かたがないのだが――それは今夜歸つて來たら、おれからよく云ふから。』女が正面に出て物を云ふとさうでもないことにも角が立つと思つたからである。

けふよそから糟護の相談を受けた事件に關してなほ民法を調べてゐると、十一時ごろになつて增田は歸つて來た。戸は締めた樣子であつたが、はしご段の下から、

『只いま歸りました』と云つた切りであつた。待つてゐても別に顏を見せないので、便所に行きながら下りて行つた、

『增田、ちよツと話があるんだ。』

『何か御用ですか』と云つて、渠があがつて來たのを見ると、不斷どほりで、別に赤い顏もしてゐなかつた。あア買ひ喰ひをしてゐたら、高が知れた所有金も直きになくなるだらうから、そのあとはうちの物をどうするか知れないと云ふ疑問を持つてゐたのが、これまでのところでは幸ひにも夫婦のわる推量に終りさうであつた。その代り、また、おそくそとから歸つて來ても顏を見せないのは、てツきり酒でも飲んで來たのぢやアないかと思はれた。が、それも幸ひに無事のやうすだ。

『……』いい青年で惜しいが、止むを得ないと云ふ考へを先づあたまに持ちながら、『ほかでもないが、ね』と、こちらは主人らしく堅くるしくなつて、左りの手を事務デスクの前にかけた。そしてデスクの横手に突ツ立つてゐる增田を見あげた主人の顏つきが少し違つてると見て取つた爲めか、渠が何を云はれるかとをぢけ〻やうに伏し目になつてるのを私かにあはれみながら、『君にゐて貰ふことができないことが――實は、突然だが――出來したのだ。』

『さうですか？』ちよツとこちらを見たが、また目を伏せた。

『けふ、女中が君の糟袢を洗つたので分つたのだが、君にはしらみが澤山たかつてるさうだよ。』

『さうですか？』

『さうですかツて、君にはそれが分らなかつたのか？』

『へい――』

『何だか曖昧な返事だが、それを今更ら責めるのではない。兎も角、うちには子供もゐることだから移つては困るので一先づそツくり立ちのいて貰ひたいと云ふわけで――實は、僕にもそれが一匹たかつてゐて、不思議だと思つてをつたが、今夜女中の話で初めてその原因が分つたのぢや――』事實としては、まだ一つ云つて聽かせたいことがあつたが、自分の妻にもたかつてゐたと云ふことだけは――自分の妻のからだを渠に解放でもしたのと同じやうに思はれるのを恐れた爲めに――云ひたくなかつた。その代り、自分の息子の場合を詳しく語つてやつた。そして、實際に同情もしながら、子供や書生の時代には、自分も經驗があつて止むを得ないと云へば云へるが、自分の子もその時湯に這入るとぞツとすると云ふことを云つてたのを見ると、矢張り、しらみたかりが原因らしく、湯に這入らないと蟲が涌き、蟲が涌くとまた這入りたくなくなるのだらうとも。そして增田の爪に黑いあかがたまつてゐるのに氣が付きながら、『きツと、君のからだ中にひツかきむしつたあとができてをるのだらう?』

『そんなものはありません』との答へであつた。

『……』うそとは思つたけれども、『して見ると、君のからだは喰ひ過ぎの爲めにでも皮膚までがしびれてをるのだらう――餘ほど注意せんと駄目だぞ。』

『そりやア、これまでにも一匹二匹は見付けたことがありますが――』

『話によると、それどころぢやない――まア、うちで見られても困るが、衣物でも蒲團でも親類のところへ歸つて行つてからよく調べて見給へ。』

『若しそれとしたら、親類でも嫌ひましようから、もと〳〵通り、友人のところへ行きます。友人とは同じ蒲團に寢てをりましたから、同じやうにたかつてをりましようが――』

『……』姉崎は、自分の子供もよそへ出てゐては、――年も一層しただから――またそんな狀態になつてはゐないか知らんと思ひながら、蒲團やどてらは棄てるのも惜しいだらうが、シヤツや股引きはどうしても思ひ切つて直ぐ棄てるがいいと念を押してやつた。

『そんなものですか、あの蟲の猛勢は?』などと、增田はまだ左ほど氣味惡くもおそろしくもないかのやうに問ひ返してゐた。

『しらみの爲めに苦しみ死にをしたものもあるのだ――尤も、それは今一つ別種の、毛穴に喰ひ込むやつだが』とも、をどして置いた。

『ちやア、これから行くさきをきめてまゐります』と云つて、渠がその翌朝こちらの枕もとへ來て挨拶した時には、自分としてまことに氣持ちが惡かつた。一匹でもここへ落して行きはしないかと思つてだ。

自分はゆふべ寢たのがおそかつたので、少し不斷よりも寢坊をしてゐた。

妻には書生の立ちのき料には餘るほどの金を與へるやうに命じて置いたので、かの女はそれを次ぎ

の茶の間で實行してゐるやうであつた。それが渠の禮を云ふ聲に終はると、またかの女の聲で、

『然し、まア、ちよツとこツちへ來てシャツの襟を見せて御覽なさい。』

『……』若しその相手がこちらと同じやうな紳士であつたら――と云ふやうな、あわいねたみも出た。が、姉崎は矢ッ張りあふ向けになつたまま、かの女が椽がはへ出たけはひに耳をかたむけてゐた。

増田のシャツの襟うらをでもひツくり返して見たらしいかの女は、やがて頓狂に叫び出した、――

『あ！うぢや〳〵ゐますよ――ほんとに麥つぶほどのが！左りの方は？あ！ひどい、ひどい！ちよツとじッとしてゐて御覽なさい（一匹をつまみひねつてゐるらしかつたが）、そうれ、この通りのが。（手渡しでもしたかと思へると、やがて）あッ』と、特別にまたひどく叫んだ。

『……』その叫びかたが餘り特別にひどかつたので、こちらも床をはね起きて出て行つて見た。すると、かの女はたださへ大きな口を明けて、その喉の奥から

『げッ、げッ』と云つてゐたが、溜りかねたやうにして便所へ逃げ込むと、直ぐげろを吐いたやうすだ。

『一體、どうしたのだ？』姉崎は寢まきのまま立ちながら斯う聽いて見たが、増田も女中もあッけに取られて返事がなかつた。

『もう、直りましたが、ね』と云つて、妻は便所の方から椽がはを歩いて來た。去年住んでた人がうんと手入れをして置いたと聽く庭の藤棚の、澤山その小い芽をむくみ出させた枝々をとほして來る朝日の光に、かの女も照らされながら、『増田さんがその爪と爪とで大きなのを一つつぶした、そのしるがわたしの口へ這入つたのですもの――たださへ氣味が惡いのに！』

『増田の血を吸つてたのだから』と、張りつめてた心も滑稽に碎けて、『さぞお菓子のやうにうまかつただらうよ。』

『もう、云つて下さるな！』かの女はまた庭に向つてつばきをした。そして女中に水を持つて來いと命じた。

『うちぢやこれだから困るの、さ。』姉崎は半ば増田を今一度納得させるやうに、また半ばは自分の妻の我慢づよくない潔癖を責めるやうに云つた。そしてかの女にまた二度目の子種が宿つたのではないかと思ひながら、増田に向つて最後の挨拶をした、『ぢやア、行つて來給へ――友人のところなら拒絶もしまいから。』

『シャツやもも引きはすツかり棄てて改めるつもりですが、羽織りやどてらは大丈夫でしよう、なア！』

『まア、いよ〳〵荷物を運んでからよく調べて見給へ。』どうせ再び見ず知らずのもと〳〵通りに返るのなら、蟲がゐようがゐまいがこちらの問題ではなかつた。

『兎に角、それでは相談して來ますが、どうか惡からず――これもわたくしが不都合でございましたのですから』と云つて、増田が出て行つた。そのあとで、

『では、お父さんのお言葉通り奉公に出ます』と別れの挨拶をして行つた貢の後ろ姿が思ひ出された。今回の書生とは違つて、まだ少しも世慣れぬ爲めに强情でもあり、また口もよく聽けなかつたけれども、まう、日本橋へ行つてからおほかた半年ばかりになつた。

『埼田さんは知らなかつたなんて、うそですよ。ねイやに癪くと、毎朝起きる前にはぼり〳〵と――』

妻はその顏をしかめて胸のあたりを兩手で八方に掻きむしる眞似をしながら、『毎朝、暫らくは、きツと、見てもゐられなかつたさうですの。』

『大きいのがどこにおツこちてをるかも知れんぞ。』

『……』妻はその足もとから板の上や疊の上を調べながら、書生部屋まで行つた。女中もそのつもりでか、立つてゐるあたりを小い眞珠をでも失つたかのやうに探してゐた。

『蒲團や衣物を一つにまとめさせてあるか？』

『それはちやんとして行きましたが、ね――』

『……』それほど素直に分つてゐるものがどうしてあんなに先妻の如く不精なのか不思議であつた。けれども、まだ書生で、年も行かないのだと考へてやると、如何にも冷淡さうに突ツ放したのが可哀さうでもあつた。

『いツそのこと、あなたは決心して一度お國へ歸つて、お母アさんにすツかり蒲團でも洗つて仕立て直してお貰ひなさいよ。』妻は斯う渠に勸めてゐた。

『さうだ、それが君の爲めには一番いい道だが』と、こちらも贊成はした。先妻のやうな不精ものもまたと世にあるまいから、親に行きさへすれば、直して呉れるだらう。ついでに、あの喰ひ辛坊をも直させるやうに手紙を書いてやらうかとも考へた。

午後には小つぶの雨が降つて來た。そのそらを見ると、そらが一面にしらみだらけと想像された。

『もう、春が近いが、春になると、花見じらみと云つて、衣物のうらにをるのがおもてへいくらでも遣ひ出して來るものだ』とも云ひ聽かせてやつたツけ。

さツと春さめまがひの雨が降つてまたやんでしまつたゆふがたになつてから、埼田は再びやつて來た。妻は三味線の糸を買ひに外出して、うちにゐなかつた。が、渠は羽織りこそそのままのやうだが、したの物はすべて取り換へてるのを見ると、ゆふべからこちらが渠の拒絶の爲めに餘り緊張し過ぎてゐたやうにも思へた。

『奥さんは勿論、先生も、わたくしなどから見れば、少し潔癖過ぎます。書生仲間にしらみの五匹や六匹は左ほど苦にもならぬものです』と、渠は云つたのであつた。

『……』こちらは一匹でもゐたら困るけれども、そのみなもとがさツぱりとなれば、もう、それでいいのではないか？

『蟲さへのがれてしまへば、先生、奥さんも御承知の上でまた使つて下さいますか？』

『そりやア――』とまでは答へたが、蟲のみなもとはただシャツや衣物のやうなうはべばかりにとどまらぬことをも考へてゐた。『ついでに、君のお菓子病も直つて來さへすれば。』

兎に角、けふは天氣が悪いし、四五日中に國へ行くかも知れないから、荷物はそツくり預つて置いて呉れと云ふ頼みを殘して歸つて行つた。友人が來てゐてもかまはないと云ふからと云つて。

『紀伊の國は音なしがはアのみなアかみィに』と云ふのを、子供や女中と一緒になつて眞似もし出した無邪氣な青年が、恐らくそのこれまでの一生中に初めての大打撃をかうむつて、出て行つたのだ。懲戒的には本人の爲め一つの進歩になるだらうと考へれば考へるほど、人ごとではなく、わが子のそれのやうに感じられた。

『今そこで増田さんに會ひましたが、ね』と云つて、妻も歸つて來た。『しほ〳〵して行くのが可哀さうになりましたから、すツかり直つたらまた使つてあげますから、ね、と云つて置きましたよ。それでいいでしよう――別に、何も泥棒したわけでもないんですから、ね？』

『うん、それでよからうが――』姉崎はただ斯うばかり答へて、増田の爲めをばかりではなく、わが子のことも考へてゐた。何とかして悪いくせが直りさへすれば、いつでも再びうちへ呼び返してやるのにと。――

――（大正八年三月）――

二　食主義者

『そりやア、一體、どう云ふわけなのか？　畫めしを拔きにする人はそれだけ宿に儲けがないと云ふので、よそへ行つて呉れろと云ふのか？　多分さうだらう。さうにきまつてる』と、渠は言葉にまでも斷定してしまつた。そして今夜だけはおとまりになつてと云はれたのをもふり切つて、わざ〳〵さして來た宿を直ぐ出ることにした。田舍ものめが！二食主義を儉約の爲めにやつてるのだと見たのだらうから、かねさへ增す約束にしてやれば、それで向ふには何の申しわけもなくなるのだらうが、くわツとあたまへ來たので、そんな讓步をおとなしくするだけの餘地もなかつた。

けふは實に、渠に取つて、初めから面白くないことがつづいた。東京の家を出る時には俄かに小さめが降つてたので、面倒にもかさを持つて出た。電車のうへでは、友人に出逢つた爲めについ市場の景氣などを聽いたり語つたりしてゐて、まだ半分もつかはない回數券をうツかり落してしまつた。兩國停車場前で下りて、今一つ云ひ忘れて來たことをハガキで出してから、急がないでもいいのを急いだ爲めに、停車場前の石のうへで日より下駄をすべらして、膝を突き、膝ツこへすりむき傷をつけた。

『おとなのころんだのア見ツともないものだア、な。』

さう、向ふがはにゐる車夫どもが云つてるのにも神經がいら〳〵した。

『……』ころばうが、起きようが、こちらの勝手次第ぢやアないかと云つてやりたかつたが、車夫どもが相手なので、わざと見向きもしないで切符口へ行つた。

旅行に出て少し海の空氣をでも吸つて來ようと云ふその原因なる神經衰弱がすべてそんな失敗をさせるのだと思ふと、それも止むを得ないのだが——

幸ひに直ぐ乘れて、直ぐ發車であつたものの、途中の驛をさして來たところと聽きちがへた爲め、あまり速くついたと思ひあわてて顏を出して見ようとして、がらす窓にぶつかつた。明いてるのだと思つてだ。こんなことでは、昔どほりの横すぢを二本、がらすにまだ必要とせられるではないか——田舍もののやうに？

それから、稻毛驛に下車すると、あかりがさツぱりついてゐなかつた。汽車が行つてしまうと、たツた獨りぼツちで全く異樣なところへ置き去りにされたやうな感じがした。手さぐりで段々をのぼり、橋を向ふへ下りる時に、やツとその下からがんどう提燈をさし向けて呉れたものがある。多分驛員だらうと見て、半ば獨り言のやうにだが、

『ひどいぢアないか――まツくらで？』

『……』向ふには返事がなく、その提燈をおろしたので、またまツくらになつた。

この時には、然しもう、段をおり切つて改札口の方へ近づいてゐた。あたまばかりでなく、足もふらふらするのを、

『おい、海氣館』と呼んで、見おぼえのある名の弓張り提燈にちから付けた。そしてそれをさし上げてたものに車を呼べと命じた。

『電氣が消えてしまつて――こんなことが月に二三度はあります』と云つてゐた。

東京の方が低く一面にあかく見えるだけで――月のないそらは車夫の提燈の火がうつる範圍以外を眞ツくらであつた。提燈の火が多少こちらの見おぼえある道を押しひらいて行くと、背の高い松原に這入り、松のでこぼこした根もとをとほつて宿のおほ玄關へ來た。

曾て閑院の宮さまが到着せられた時、丁度この玄關の眞うへなる室に新俳優の夫婦が來てゐて、子供のおしめを欄干にほしてあつた。前以つてそんなことのないやうにと通知されてゐたさうだから、それにも拘らずさうしてあつたのはわざとであつたらしい。番頭どもは警察官と共に怒つてその俳優のぶしつけを何とか處分しようと立ち騒いだが、却つて寛大な宮さまは笑つてそのままお許しになつた。その數日後にも渠はここへ來たことがあるが、ここも今電氣が消えてゐた。

がらすの板に圍まれたランプの光りにみち引かれて、渠は山の上なる一つ座敷へ行つた。つれ込みには持つて來いのところだらう。獨りで寢起きするには少し淒いほど寂し過ぎさうだが、どうせ暫らく療養する爲めだから、これも亦一興であつたらう。

番頭が錠まへを明けようとしてもなか〳〵明かなかつた。踏み石の上に置いたランプをこちらがさし上げて見せてやつても、矢ッ張り明かなかつた。

『これは違つてますから』と云つて取りかへに行つたのも、亦、一つの面白くないことであつた。神經の衰弱はいろんなことに緣喜をかつがしめるやうだ。

横の方なる松の根もとへ行つて小便をしてゐると、これはもとからゐた筈の年增女中が火鉢を持つて來た。が、勞れてゐるので暫らくだッたとも直ぐ愛嬌をふり撒く氣にはなれなかつた。

やがて別なをとこ衆と共に鍵を持つて今の番頭が返つて來たが、

『こんな間違ひをして置くのはいけないぢやないか』と、横柄にをとこ衆を叱りながら戸を明けた。

『もう、澤山明けなくてもいいよ』と命じたので、二枚にとどめた。そこの四疊半にあがつてから、例の二食主義をかけ合つたのだ。氣が向けばまた十日ばかりもゐようと思つたからである。が、道理で番頭があまり面白い返事をしないで、再び茶道具を取りに行つて來た女中と入れかはりに去つた。

けれども、それでいいことと思つたので、こちらは少し氣が落ちついて茶をすすつたりした。そし

て風呂にはうちで這入つてから來たので、今夜はやめることにした。時計を見ると、もう十時二十五分にもなつてゐた。酒でも少し飲んでぐツすり眠ればよかつたので、一合だけを命じ添へた。二合も飲めば、いつも苦しくなるのを知つてるからである。ところが、それもまた二食主義と共にただけち臭い註文と見られてしまつたのだ。

『あの、をかしなことを云ふやうですが、な――』と云つて、暫らくしてから立ち戻つて來た女中が云ひにくさうにからだをひねつたりして語つたところでは、さう云ふ註文ではうちではできにくいから、ここの門を右へちよッと行つたところに上總屋と云ふのがあつて、近ごろ新らしい座敷も建てたし、よくお客を歡迎するとのことだ。

『……』渠はそれを皆まで聽かずくわッとなつた。『あたまからよそへ行つて呉れろと云ふのだ、ね。よし！もとの番頭さんがゐれば知つてることだが、おれは前にも十日間ばかりとまつてたことがあるが、矢ッ張り、二食であつたのだ。』

『近ごろは――然し物が高くなりましたので』と、女中は相變らず云ひにくさうに辯解した。

『物が高ければ二食を高く取ればいいぢやアないか？習慣上喰はないと云ふものを無理に三食やつて呉れいなどとは、田舍ものの主人でなけりや云へないことだ――馬鹿々々しいやつだ！』

『では、ちよッと待つて下さい。』

『いや、もう、何もお前から主人にかけ合ふにやア及ばない。』斯う渠は矢ッ張り多少おぼへのあると思へる女中の横がほに向つて云つてのけた。『もッと安い宿があるなんて、客に對して失敬きはまる云ひぶんぢやアないか？おれは安けりやア三食もすると云ふんぢやアない！』

『……』女中は氣の毒さうに默つてしまつた。

『……』渠も默つて籐の小籠をひッさげて庭へ下りた。そして言葉を少しおだやかにして、『代がかわつたのだ、な？』

『代はかはりませんが』と、女中も活路を得たやうになつて、『番頭がかはりました。』

『ぢやア、その爲めだらう』と云つたところへ、その番頭がやつて來た。

『今夜はもう、おそうございますから――』

『いいや、とまらない。』渠はくらい道を下りて行きながら、『何とか別な云ひかたもありさうなものぢやアないか？』

『どうもすみません。』

『まるで田舍者そッくりの云ひ分ぢやアないか、東京では二食主義を實行する紳士が幾らもあるのだ！』

『……』

海に向つた正門手まへの高みで渠は番頭の提燈に離れると、また一とき眞ツくらになつてしまつた。犬の一匹、こちらに向つて吠えながら逃げて行く聲が聽えた。以前にゐたあのつんぼのしろ犬はどうしただらう――つんぼだから、ろくに吠えることもできず、そして手眞似で呼べばどこまでもあとをついて來たが？誰れもちやんとは飼つてやらないけれども、子供のほかの誰れもにあはれまれてゐた。渠は或朝、自分の喰ふ飯をそツくりあの犬にぶちまけてやつたことがある。滯在十日間を何だかめしがうまくないと思つてたら、それが南京米であつたことが分つた。そしてその朝、直ぐ海氣館を引き上げてしまつた。けれども、今夜のことはまさかその時のことを誰れかがおぼえてゐての仕返しとも思へなかつた。知つてるものがあるとすればあの女中だが、それもこちらの顏さへ左ほどおぼえてゐなかつたやうだから、まさか――。

目が段々やみに落ち付くと、正面の海が門の兩方のくひの間から、直ぐ目前に白く見えて來た。それが左右へ全くひろがつてしまうと、渠は海岸のじやり道へ出てゐた。道も白く、海も白くて、自分の周圍をもやが立ち籠めてるかのやうに海陸のけぢめが分らなかつた。子供の時に聽いてる海坊主とやらがぬッと現はれて、その大きな手で以つて自分を深いところへ引ッ込んでしまつても、今なら、誰れにも分らないですむだらうとおぞけ立つた。

人どほりもなく、かたがはの人家もすべて寢しづまつてるやうだ。前も一二年前に來た時とは殆どすッかり違つてるらしい。ここも一昨年の津波でやられたのだらうと思へた。門から二三町目に小いけれども新らしい宿もできた宿があると云はれたのを、幸ひにまだ起きてたので頼むことにした。

『一體』と、渠の心は、然し、まだ直ぐには納らなかつた。『おれはただ二食主義の爲めに嫌はれたのか？それとも、別にまたけちな男だと見えるやうなことを云つたか？』若しけちと見る方から云へば、恐らくきてうめんに物を云ふ奴はすべてけちであらう。ただ酒を飲みたいから一本つけて來いと云つて、飲めないですんだだけは默つて殘して置き、舊い習慣通り三食を持つて來させて、喰ひたくなければ喰はないで置けば、人は喜ぶだらう。が、こちらには無駄なことだ。自分は豫定の十日なり十五日なりを無駄をしてまで人を喜ばしてゐることはできない。そこをけちとするならけちでもいい。ただそんなところに厄介になりたくないだけのことだ。

今一つ考へて見ると、こちらは人と習慣が違ふから人よりも少し食料の割り合ひを高くして呉れてもかまはないと云へば云へた。が、それは向ふでは云ひ出せなかつたのだらうし、こちらも亦おだやかには云ひ後れてしまつた。

『きツと顏の悪い番頭のせいでしよう』と、蠟燭の火を大きなのと取りかへに來た第二の宿の主人が云つた。ここへ來たわけは初めにちよいと聽かせられてたので。

『あれがいけないのかい？』渠には、顏ばかりでなく、目も五分刈りのあたまも圓くくりくしした男

のありさまがはッきりと浮んだ。それが最後にも提燈で以つて山の道を見送つて呉れたのであつた。

遣理で、紳士を馬鹿にすると云つてやつた時返事をしなかつた。

『あの番頭さんにたつてから、あすこの商買ぶりがかはりました。こないだも、同じやうなことでおこつてうちへ來られたお客さんがございました。』

『……』矢ッ張り、二食主義を云つた爲めであらうか、それとも酒、あまり飲めないことを見せた爲めだらうか？或はまた人品を見て勝手にけち臭いものとされてしまつた爲めだらうか？

ふと思ひ出すと、あの女中のことであつた。あの横がほはちょッとこちらの知つてる某子爵の落し子になる武子さんに似てゐた。痩せぎすで、三十五六の、脊がすらりと高いところも、見おぼえがあると思つたのは、さきに自分があの宿へ來てゐた時のことではなく、東京に於いて知つてたからである。それにしては、然し、最初に火鉢を持つて坂をのぼつて來た時に、あの物慣れていつも親しげな物ご　で、

『お久し振りです、な』ぐらゐのことは云ふべきであつた。さうすればこちらも直ぐ

『こんなところへ來てゐるのですか』と少しびッくりして叫んだでもあらう。

若い友人の紹介で初めて物好きにだがかの女をその酒屋の借り二階へ訪問してから――、二度目の妻がまだきまらない時であつたから、都合によると、貰ひ受けようかとも思つてたが、――三四度も訪問をつづけた。どうせ旦那取りをしてゐるか、それともそれを望んで探してゐるかのやうすであつた。友人は年が若いのであんな婆々アぢやア眞ッぴらだと云つてたが、或は一度ぐらゐは當つて見る野心もあつたやうだ。

何と云つても、美人ではあるが、獨りで自炊をしてゐながら、生活費がどうしても七十圓はかかると云つてるので、とても手の出しやうがなかつた。そのうちにハガキが來て、

『今度わたくしは人のゐさふらふになつて行きますから、當分お目にかかりません』と云ふ文句が書いてあつた。で、日かけにでも行つたのだらうと思つてた。

あれが若し果してかの女なら、意外だ。向ふも亦意外なところで出くわして、きまり惡かつた爲め電氣が消えててランプのあかりのうす暗いのをしほに、とぼけてゐたのかも知れない。斷わりを云ひにくさうにからだをひねつたりしてゐたッけ――。うッかりしてゐたので、今一度念を押しに行つてもいい。が、若しかの女とは取つてもつかぬ別人ででもあつたら、こちらは恥ぢのうは塗りをするばかりではないか？

然し、今一度行つて見ようか？いや何でもないことをあまり考へ込んでるのであつたら、これも自分のからだの衰弱してゐるせいにならう。どうもこの頃は、その爲めに相違ないが、一つの糸ぐちがあると、それからそれへと取りとめもなく下だらぬことを考へて行く。これを直す爲めに出て來たの

ではないか？

兎に角、渠はここに前のとはずツとまづい宿屋の一室で蠟燭の火を珍らしい物として見つめながら、前の番頭や女中に拒絶された自分の現在からこれまでにも經過して來た所謂氣まづい人生を返り見ないではゐられなかつた。

『人生はおのれの生活にしかない』と、或人が雜誌で云つたのを見たことがある。自分のやうに思想上のことは他人に考へて貰はないでは考へられない者には、人の言葉のうちで自分がいいと思つたのを信じて行くより外に道がないのである。二食主義も矢ツ張りその一つで――初めは半ばけちな考へも伴つてゐた。或新聞で、ふと、この主義のいいことが生理上、時間上、並びに經濟上から證明されてゐるのを見た。

その頃は、親ゆづりの商賣を全然失敗したあとで、まだ自分の職業が殆ど不定であつた。いろ〳〵小さな仕事を人から人に紹介して、僅かの口錢を取るのが收入のおもなものであつた。從つて、先づ第一に二食主義に共鳴したのは經濟上からであつた。米や副食物が儉約になるだらうと思つてだ。まだ獨身者あがりの妻がゐた時で、

『あんまりけち臭いやうだけれど』と云ひながらも、かの女も不同意ではなかつた。が、使つてゐた婆アやがそれが爲めに逃げ出してしまつた。

『馬鹿なやつだ。二度たら二度のやうに割り合ひを多く喰ふからおなじことぢやアないか――その上に手が省けて』と、渠はあとで妻に語つた。實際、三度に三杯づつ都合九杯喰ふよりは、二度に五杯づつで十杯の方の多いことが分つて來てゐた。その上に手まが省けて、段々とからだにも工合ひがいいのは事實であつた。

けれども、また逃げ出されるのを恐れて女中には再びこの主義を押し付けないやうにすることにした。すると、今度はまた別な理由で妻が逃げ出してしまつた。

『いつまでもこんな生活をしてゐたつて、仕かたがないだらうぢやアないか』などと、屢々繰り返して、こちらの仕事が思ふやうに發展しないのを不平がつてたのだが、下だらぬことから喧嘩を吹ツかけて出て行つてしまつた。それもおもて向きでは二食主義に少しも關係がないとは云へなかつた。かかる種類の女として經濟がへたなので、こちらは一週間毎に改めて毎日のおかずの表を拵らへて、それに相當するだけの小使ひを渡して置くのであつた。すると、或週の終はりにかの女は持ち殘してゐる小使ひをずツと超過するのもかまはないで、まぐろの刺し身を取つた。それが無邪氣にならおこりもしなかつたのだが、どうしてもわざとらしかつたので、

『不都合ぢやないか』と責めて見た。

『……』かの女はそれをきツかけにして、不斷は何とも云はないで來たことまでを持ち出し、『人並

み三度のものを二度にしてゐるのだもの、少しやアおいしい物をたべたツて』などと云ふいや味まで云ひ加へた。

『ぢやア、勝手にしろ！』こちらは、つい、この叫びの勢ひでちやぶ臺の一方をはね上げたから溜らない。臺のうへの物がひツくり返つて、疊へ落ちたのもあつた。が、兩方からおさいのまぐろには手を出さないで、兩方とも強情張つて、その晩食はただ香々ばかりでぼり〳〵すませた。

その翌日、朝から出てゆふかた歸つて見たら、かの女の姿は見えなかつた。かの女の箪笥もすつかりからになつてゐた。身受けだけにも、もと三四千圓はかかつた女であるから、さう容易に逃がさないつもりで心當り、心當りを追ツかけて行つて見た。用意して逃げただけになか〳〵その行くゑが分らなかつた。一つには、かの女の老いぼれおやぢが死んだのをしほにして、再び今一度うは氣をして見たくなつたのであらう。靜岡にゐるかの女の妹――これも人のめかけだ――までは身受け料に對する故障を申し込んで置いたが、ほんの、うはべばかりの申しわけが來たばかりであつた。一度は旅費をかけて靜岡まで行つて見たが、二度とは行く費用もなかつた。

いつになく畜生がをんなだてらに酒に醉つて夜遲く歸宅したことがあるが、それを

『もとの學校友だちに逢つて久し振りにふたりでおそば屋へ寄つてゐた』と云つたのは眞ッ赤なうそで、――これはあとで分つたことだが――もとのいろ男に途中で出逢つて、その時既にその方へまた行く氣になつてたのであらう。

巢は却つてそれから自分で自分を一層奮發させた。そして自分も人並みに戰爭の餘德を受けて、瓦斯に關するこさ〳〵した機械や道具を製造する今の工場を落合に持つやうになつた。そして友人の紹介で二度目の妻をも持つた。これは前のとは違つて決してかねで買つたのではない。その代り、つれ子があつて、もう、五歲になつてゐた。信州の女だが、物好きに自然にあくがれたとかで、どこかの山奥の小學校へ敎員に行つてた。あしかけ二年ばかりの末に遠足があつて、生徒と共にとまつた宿で、かの女はその校長の爲めに夜、夢うつつのあひだに無理なことを行はれてしまつた。母に來て貰つて直ぐ辭職の手續きをしてしまつた。が、たとへ本人にはその氣がなかつたと云つても、まだ十九やはたちの時であつたから、たツた一回のことで自然に男の種を宿したと見え、知らないうちに妊娠となつたのだ。それをいつまでも私生兒として置くのは可哀さうだし、こちらもまた自分の妻にそんな物があるのは不名譽だしするから、自分の子として認定をもしてしまつた。それを十分恩に着た爲めか、妻はこちらの爲めにいとも素直でしとやかに立ち働いた。生まれもよく、相當に自發的な敎育もあつて、藝者あがりなどを持つてゐたこちらに取つては可なり不相應なほどいい女房に見えた。

『君はあんな子供のできそくなひなど貰はないでよかつた。案外な儲け物をしたんだぜ』と、友人も冷かし半分に云つた。

『工場の方もやがて順潮に行くだらうし』と、渠も亦直接に妻に語つた、『お前はまじめだし。』

が、段々と親しみ合つて行くうちに、たツた一度だが、人間のあさましさがかの女にも見えたことがある。忘れもしない、春めいて來た日の午前であつた。

『けふはお被岸だから、お萩をしましよう、ね』と、妻は云つた。

『それもよからう。』こちらには大抵のことに反對はなかつた。が、ふところ合ひには大いに反對があつた。夫婦のあひだに立つた紹介者がこちらの近い將來の發展をまでも現在の勘定に入れて、大分にいいことをかの女に聽かせてあつたので、それをわざ〳〵裏切るまでもないと思ひ、こちらもかの女にまだ全體の收入などは知らせてなかつた。一箇の工場の持ち主になつたとは云ひながら、やツとなれたところであつたから、まだ苦しいやりくり算段をばかりやつてゐた。この時もその前日に丁度材料購入の爲めありツたけのかねを拂つたあとのことであつたので、曖昧なことを云つたあとでだが、

『然し、今かねがないよ。』

『それツばかりの？』かの女は不思議さうであつた。

『……』然し、作る身になつては、かねと云ふものは僅かなことでもさう思ひ通りになるものではないのだ。

『ぢやア、よしましよう——』かの女の品よく引き締まつた顏には、一しほ引き締まつた爲めの皺ができてゐた。そしてこないだぢうから『少しおいしい物をたべなければ』と冗談に云つてたのをいよいよ本氣に直したかのやうな燒け氣味になつて、茶碗に殘つた飯へ湯をかけるが早いか、ちやぶ〳〵とその箸で以つて口のなかへかツ込んだ。かの女はその子にしたらいけないと敎へてることを自分で以つてやつて見せたのだ。

『……』こちらは私かに何たるあさましさだらうと思つた。斯うなると、藝者あがりよりも良家の出の方に寧ろそのあさましさが目に立つのであつた。喰ひ物には苦勞もなく田舍の大家に育つたものは、却つて、如何に敎育があつても、こんな時にはおとなしく辛抱のできないものと想像された。一般の父兄が子女の行儀のことをやかましく云ひ、世間體では不正直や不便を感じてもなほ且喰ひ物や勘定のことに成るべく觸れないやうにするのは、尤もなことだと思はれる。それに比べると、二食主義の如きは精神上から云つても寧ろ正直でもあり、また便利でもないか？

けれども、その初めは矢ツ張り自分の胃弱と貧乏からの思ひ付きであつた。それまでは食鹽水を飲んで見たり、太田胃散を絶やさないやうにしたりしてゐたのだ。如何にも貧乏くさい。先妻が逃げたのも詰りその爲めなら、今の妻が思はずちよツと化けの皮を現はしたのもその爲めだ。一、今では、もう、やツとそんな恐れはなくなつた。工場がま〳〵發展して來たからである。發明品も一つ特許を得た。こないだも、兄のところへ自分の成功を自慢しに行くと、兄よめがこんなことを云つた、

『誠次郎さんは餘ッぽどよくなつたと見える、わ、前にはどこそこへ行くから兄さんの羽織りを貸して呉れいなど云つて來たのに、この頃ぢやア、來るたんびに衣物が違つてるもの！』

『こりやア、なアに、女房がゐますから。』若い妻も渠自身には一つの誇りであつた。

『いくら奥さんばかりが若くッたッて——』

『……』それには遊ひなかつた。妻がます〳〵熱心になつて來たのもこちらの成功の爲めだ。

その代り、また、前ののやうに子宮病でも何でもない女で、割り合にすッと年したなのが熱心である爲めに、こちらの根氣はさう續かないのである。

同じ神經衰弱の爲めにこの稲毛へ來たのでも、前には思ふやうに行かぬ事業の疲れであつたが、今は少しのあひだをでも妻から離れてゐたい爲めにだ。これは二食主義で直せるものではない。この主義の方は自分では、もう、不斷は忘れてゐるほど自然の習慣になつてるのだが、今夜は突然それを自分には不自然に海氣館ではね付けられたのである。そしてそこでも東京紳士の新らしい習慣と云ふことを云つて聽かせたが、ここでも亦主人に向つて同じことを語つて、今度は失敗を繰り返さないやうにそれだけ割り合を高くしろと命じた。

『なアに、それには及びません』と、正直らしい朴訥の主人は答へた。

『……』それで兎に角渠の心は落ち付いた。持つて來させた一と銚子から半分ばかり酒を飲んでから、まだ電氣が來ないので、とこへ這入つた。

あのおちしの白犬も津浪の時にやられたのか知らんと思ひながら、くらやみの天井を見つめてゐると、そとの方で來た時から水の音が絶えずおとなしくしてゐるのが頻りに氣になつて來た。夜おそく、戸の締まつたうちへ這入つて、蠟燭の火で狹い室へ案内されたのだから、そとの樣子は少しも分らなかつた。ぽちや〳〵、ぽちや〳〵、ぽちやと絶えずつづけざまに云つてゐる。

前に來た時、今そこだらうと思へるところに掘り抜き井戸を掘つてたことが思ひ出された。幅半間さし渡し三間ばかりの輪がたが空にかかつて、一人の男がその輪のふちをうちがはから踏み進むと、輪がまわるにつれて、掘り抜き穴にさし込んだそぎ竹のつなぎが卷けて行く。それがまた逆に行くと、穴の方へ押し込まれる。毎日、毎日、まどろッこしくそんなことをして、こちらの滯在間もやめたことはなかつたが、そのうへにも既に何十日とかかつてるのであつた。滿潮どきの海ぎはから五六間しかないところだから、まだ鹽水が出ると云つて、頻りに深く掘り下げてた。それでも水と共に出て來る泥はあか土であつた。

舊式なやりかたではあらうが、その仕かけが面白かつたうへに、毎日こつ〳〵と多人數がかかつてるその熱心に、渠は自分の仕事にも應用すべきものがあると見た。で、自分も毎日宿の阪を下りて來て、門の手まへに立つて、それを垣根越しに見てゐた。しまひには、それも飽いて詰らなくなつたけ

れども、歸京してから、それが自分の考へに――少くとも、そのこつ〳〵とやつてると云ふところが――役に立つて、今の成功を得たのである。して見ると、その音のしてゐる水がさきの物の結果であるとすれば、まんざら自分の仕事に無關係なものではなからう。

ぽちや〳〵、ぽちや〳〵と、矢ツ張り、音がつづいてゐる。出て來た時にはちよツと緣喜の惡い雨が降つたが、今また降り出したわけでないことは分つてるのだ。

『あれはどうしたらう――あれは？』さうだ、あれとは矢張りこの海岸で――つい、この宿から五六間さきで――宿屋の客や通行人を相手に、老いた父母と共にしるこ屋をやつてた娘だ。渠と隣り合せになつた客の話では、かの女を淫賣にしてゐたが、渠が物好きにちよツて當つと見たところではさうでもないやうすであつた。そして東京へ行つてたのだが、親が年取つて來たので近ごろ手助けに歸つて來たと云つてゐたツけが――。

まツくらで氣が付かなかつたが、隣りにも人がとまつてるかして、そのいびきが聽える。また、風も出たかして海のとほ鳴りがして來る。そのとほ鳴りと水の音が自分から離れてゐて珍らしく氣持ちよかつた。妻がそばにゐないのが却つてらく〳〵してゐる。ぐツと自分のからだを獨りで延ばしてゐた。

『……』そのうちに自分の汽車が着いた。自分は籐かごをさげて田舍くさい土地へ下りた。水おとのしてゐる川ぶちの灌木のあひだを拔けて欄干もない板の橋を渡ると、やがてさして來た宿であつた。すると、土地にも似合はぬ大きな西洋料理屋であつて、赤い戸張りや立派な椅子のかいま見えた廣間の入り口に、赤い服を着た肥えた西洋婦人が――脊の高い洋服の男と共に――立ちふさがつて、

『あなた、とまるなら二十圓かかります』と云つた。

『……』はて、こんなところへ來るつもりではなかつたがと、自分はあとずさりした。富士の湖水のほとりにある西洋人專門の旅館がかねのない日本人を馬鹿にして相手にしないと聽いてるが、そこへでも來たのか知らんと考へられた。自分はこれで二度も宿屋からはね付けられるのであつた。そしてその西洋人の後ろについて、燕尾服とかの裾を後ろへはねた、脊の高い男が、武子さんのお父さんなる子爵その人であつたのぢやアないか知らんと思つた。

どうしてそんなことが思へるのか、自分にも分らなかつた。第一、どうしてこんなところへ來たのだらう？　稻毛驛を下りたところにも左右に田はあつたらうが、やみで見えなかつた。山も見えなかつた。が、川のなかつたことは確かだ。當惑して別室に來て見ると、多くの田舍青年が集つてがやがやしてゐた。そして皆こちらへ同情をよせた目つきを見せたが、そのうちの一人が、

『宿屋なら、こんなところにとまらないでも』と、西洋人を輔護したやうにして、――これはこちらにも失望のあひだに少からず慰めとなつた――『今一つうへの橋を渡ればいいのがあります。』

『……』それは然しまだ隨分遠いやうだし、汽車で行くとしては時間を急がねばなるまい。

『野崎さん、ちよツと待つて下さい。』脊びろの男があぐらをかいてゐて、こちらを見知りがほに聲をかけた。『あなたに一つ見て貰ひたいものがあります。』

『……』また瓦斯に關する機械や道具の發明品なら、今の場合、ききたくもなかつた。

『これですが、な』と云つて持つて來たものをちよツと立ちながら一と目見たが、何でも木の札のやうなものであつた。

そのうちにがう〳〵と音を立てて汽車が來たと思つたのは隣りでするいびきの聲であつた。次ぎにまた海の音がする。また、水の垂れる音がする。自分はどうしても二食主義を卑しめられたのが紳士として殘念でもあり、落ち度でもあると思へた。割り合を高く取れと云ひ出したのはあとのことで、自分はその初め矢ツ張りひるが抜きだけ安く行けるものと考へ込んでゐたのだ。自分はさきに自分の新らしい妻のあさましさを責めたが、同じやうな理由で妻から自分が責められても仕かたがなかつた。けちな點で云へば、あのくり〳〵した番頭もこちらも共に同罪であらねばならぬ。

それこそ今一度おほ津浪でも來て、この兩方を帳消しにして呉れたらいいのだ。それにしても、あの白犬はどうなつただらう？　あのしるこ屋の娘はどうしたか？酒の醉ひがさめると共に目も冴えて來ると、まツくらの中に掘り抜き井戸の輪仕かけばかりが今もあるやうに見えてゐた。それがくるくるまわりながら空に高くのぼつて行つたかと思ふと、ぱツも電氣がついた。

もう、何時かと思つて、枕もとの時計を見ると、二時を少し過ぎてゐる。八時ごろからの停電であつたと云ふから、六時間以上を經てやツとついたのだ。たださへ眠られないで來た神經がここへ來てもますます冴えて行く。こんなことなら寧ろ妻のそばにゐて、一番疲れをおぼえたあひだをでもよく眠る方がよかつた。

それからはただうと〳〵してゐるばかりで夜が明けてしまつたのだが、夢に脊びろの男が持ち出した木の札は何であつたらうなどと思ひながら、今一度ぐツすり寢入ることができた。

とこを起き出たのは午前の八時ごろであつた。枕の方でしてゐた水おとは椽さきにある庭の噴水井戸だ。離れの前の大きな瀬戸のわくを涌き出て、直ぐその下の池へ流れ込んでゐる。

その水で渠は先づ顏を洗つた。それから、寢卷きのまま庭から直ぐそとへ出ると、たひらかな海が太陽にかがやいてゐて、そのきら〳〵したおもてを渡つた向ふの正面に、富士の眞ツ白な姿が下の濁つた雲のうへへ大きな食鹽の固まりをきざみ上げたやうに、最も健康さうにそびえてゐた。行つて見たい、行つて見たいとながねん思つてる山をけさも夢に見たのだが、それが海を越えてはツきり見えるところへ思はずも來てゐたのだ。そして廣い海のうへには二つ三つ大小の帆かけぶねがこちらの目ぢよりも高く靜かに浮んでた。

渠がさきにつんぼの犬を手まねで呼び招いて海のうへまでも來させたことのある低い棧橋の鼻や、安藝の宮島のおほ鳥居に似せた淺間神社の海中鳥居などは、もと〳〵通りであるやうだ。が、道路に添つて海に面したかたかはの家々はすべて新らしくなつてゐる。

足を二三歩左りへ運んで、松原の上に引ツ込んで建つてゐる、これも元々通りの旅館を海岸から見上げると、ゆふべ自分が拒絶されたのを憎むやうな、また耻ぢるやうな氣がしながら、あの女中が果して武子さんではなかつたか知らんと云ふ疑ひを再び思ひ起させられた。

『をかしなことを云ひますが、な――』

『……』さうだ、渠も自分のからだを私かにかの女のやうに和らかにひねつて見たかつた。

然し、他人のそら似もあることだし、その上に電氣の光りで見たのではなかつたと思ひ返すと、ただくり〳〵した番頭に對する憎しみだけが殘つた。そしてその下を多少氣恥かしいやうにしてなほ進んで行くと、或畫家が岩崎の屏風にこの稻毛の松原を書いて、多くの金と共に貰つたと云ふ簡單な別莊もなくなつてる。それが管理を頼まれてたしるこ屋の家もあとかたさへなかつた。が、そのかはりにその近處へ誰れのか知らないが立派なのが一つ新築されてゐる。

今、渠がとまつてる宿の後ろの高みにある淺間神社のあたりから、この別莊の少しさきまでは、松が低い道ばたから生えてゐて、すべてそれが後ろの方へかた向いてる。海からの風が一やうにひどく當るからであらう。そのまたさきの松原が崖の上になつてる手まへまで行つて、渠はちよツと掛け茶屋へ這入ってたばこを買つた。ゆふべ別なはなしの爲めに宿の主人に聽きそこなつた津浪の話をそこで詳しく聽き糺すことができたのだが――漁師あがりのやうな嚴丈な老人夫婦がゐて、その時の話をした。

『あア、あア』と、おやぢは大相に受けて、『人のいのちにやアどこも別條はなかつたが、家と云ふ家はみんなやられたア、な。稻毛は後ろが高いから人の逃げどころはいくらでもある。然し家は逃げられない。建て物だからじツとさせて置くより仕かたがない。そのうちに前後左右からおほ浪が來て、ぶつかつたり引ツ張りころがしたりしたのだもの、どんな物だツて溜らねいや、な。一度でやられなけりやア二度目に、二度目がしぶとくツても三度目に。このむさくるしいわら葺き家でもすツかり建て直したので、いい情潔法をして呉れましたよ。警察から清潔法をやつたかと聽きに來たのを、二度までも、へい致しましたと云つて置いたが、そのうその罰が當つて、はア、天道さまがすツかり綺麗にやつて下さつたア、な。』

餘ほど感じてゐたと見えて、つづけざまの不作法にだが、如何にも正直さうなうち明けかたであつた。

『そりやア困つただらう、ね』と、同情的に愛相を云つて見た。すると、おやぢは一層呑氣さうであ

ンた。

『なアに、そんな時にやア慾も得もなくなつてしまはア、おらの一生涯も建て直しだア。』

『……』さうだ、人生はすべてそれだらうと、初めてこんなおやぢに教へられたも同樣だ。家がつぶれてしまへば、別なのが建つ。女房が逃げれば、あとのが直る。そして前のよりもあとのがよくなつて行く。渠は何と云はれても――さうだ――二食主義に於いて自分の胃弱のからだを建て直した。今やこの神經衰弱と睡眠不足とを何によつて直さうか？

思はず富士の遠つた勇ましく健康さうな姿を見たことと、このおやぢのまた健全さうな快活に接したこととで、渠は心を持ちかへて自分の二食主義に對するはたからの卑しめなどを、矢ツ張り、少しも氣にすまいと決心した。同時にまた女房のことでも、若いのを持つた以上は、その熱心を意氣地なくさけるやうなことはしないで、寧ろしツかりと受けてやる方がいいだらうと云ふ氣を振ひ起した。莊なほ、このおやぢから聽いたところによると、しるこ屋は家をさらはれてから一家こぞつて東京へ行つたさうだ。が、つんぼでおうしのあの犬の行くゑは誰れも知つてるものがなかつた。

――（大正八年三月）――

お　常

一

『お常、お前は女中の分際として、一體、主人の子供を主人の留守に呼びつけにしたり、なぐつたりするのはどうしたことだ』と、旦那さんから云はれた。

『……』常は直ぐには返事ができなかつた。皆と一緒に晩の御飯をいただいてた時で、箸と茶碗を持つた兩手を膝の上に置いて、暫らく黙つて顏を赤くした。主人の方を見てゐると、然し、どうしても返事をうながしがほなので、止むを得ず『ぼツちやんが』と先づ口に出た、『ぼツちやんが――わたくしが洗濯をしてをりますと、わたくしの後ろへ來て、棒を以つていたづらを致しましたのです。』

『たとへいたづらをしたツて、こツちへ告げさへすればいいのだ。何も女中が直接に子供の尻ツぺたを叩いたりするにやア及ばない。』

『へい。』常は斯う返事して置きさへすればいいと思つた。告げ口をするやうなぼツちやんなら、また主人の留守には主人のするやうに尻をまくつて白く和らかいところを叩いてやるぞとも。

『それに、お前はまたしたの子をふく、ふくと呼びつけにして叱つてるさうだが、これもどうしたことだ？』

『そんなことはありません。』

『ないとは云はせない！』

『……』さうだ、實際にはあるのだから、默つてるより仕かたがないが、それをもぼツちやんがしやべつたとすれば、今少し手なづけて置く方がいいやうでもあつた。

『ふく、ふくツて呼びつけにしてゐることは』と、奥さんも横合ひから、こちらの意外なことを云つた、『お隣りの奥さんから聽いてちやんと分つてるが、ね、――お留守の時はそれでぢきに分るツて。然し、このふくだツても、もう馬鹿にはできないよ。にイちやんのおちりをぴちやりと叩いたと云ふ手眞似をしたので、お高がかいと問ひ返すと、いいや、つねがと云つたよ。』

『……』たツた三つになるかならないのに小癪な子だ！箸をもちやんと持つて、煮まめでも何でもしツかり挾んで口へ持つて行くのだから。皆の食事がすむと、またここで一と仕切り兩手を腰のあたりへ當てて、ひよい〳〵と、『秋ぞら晴れて日は高し』を踊り出すのかと考へると、ただ〳〵何とも云へず小憎らしくなつた。

『お前はうらはらがあつていけないよ』と云はれてゐるのだ。が、常の心中では、女中にうらはらが

あるのは當り前のことでもあり、また誰れもあることであつた。どうせこの家にもゐられないのなら、こちらでさきまわりをしてまたお高さんをも一緒につれ出してやらうと、毎日、毎日、新聞の廣告をあさつてゐるのだ。

二

常は自分でもこんなに人が惡くなつたのを、つい、近ごろのことだと思つてる。

自分には幼少の時から實父も實母もない。多少の財産はあつたさうだが、後見人の叔父がそれをすべて渠自身の物に書き換へてしまつて、今では自分は渠の同居人になつてるだけだ。

これを知らせて呉れたのは村役場の書記で、菊地さんと云つた。その人とも關係してゐたのだが、別にまた野添と云ふ男があつたので、逃げられてしまつた。野添さんも亦自分獨りを思はないと云つて、日立鑛山へ行つてしまつた切りだ。そのあとへ殘つた男の田島さんも亦東京へ出てしまつた。常は自分でも、ふと、他國へ出て行きたくなつたところへ、

『お前のやうなものがゐるから、お鶴までがだらしなくなつた』と、うちで叱られた。

『……』なんだ、人の財産をすツかり横領したくせに！お鶴はこちらをねイさん、ねイさんと云つてるけれども、實は、年したのいとこで、財産横領者の子だ。自分はかの女にはそのことを語つて聽かせて同情を求めると同時に、自分の男のことを叔父に云はせない爲め、かの女にもひとりの男を紹介してやつた。それも亦すツかり、自分の流産のことからばれてしまつたので、とう〳〵うちにはゐたたまらなくなつた。

丁度宇都宮の呉服屋へ周旋して呉れるものがあつたので、うちのかねをこツそり十五圓盜み出した。そして呉服屋ならいい衣服も自由に着せて呉れるだらうと思ひ樂しみながら、宮へ來て見ると、それは本當の呉服屋ではなく、質屋をかねた古着屋であつた。それでも、なほメリンスの帶や銘仙の衣物や、いろ〳〵派出な物が目に付いた。

女學校へ行くそこのお嬢さん附きになつてゐたので、その教科書を見たり、その仲間の用ゐる言葉を聽いたりして、自分は小學校を出ただけだが、多少は新らしいこともおぼえた。そしてお嬢さんのお下げどめを盜んだり、店の見本切れを隱したりしてゐるうちに、そこの裏向ふに下宿してゐる男がちよツと好きになつた。初めは、お嬢さんの云ひつけで買ひ物に出たりするたんびに、向ふは二階から、こちらは裏門のそとで、互ひに笑ひ合つたり、手眞似でからかひ合つたりした。

或時、向ふがおいで〳〵を手まねでしたので、こちらもおりて來いと云ふ意味を通じた。すると、渠が下りて來た。そして話しをして見ると、下村と云つて、牛乳配達をしてゐるのであつた。そして、『僕のやうな者でもよければ、女房になつて呉れませんか』と云ふのだ。それでも顏を赤くしてゐる

のが可愛かつた。『こないだから、あなたを見て、思つてばかりゐましたのです。』

『わたしのやうな者でもよろしければ』と答へた。尤も、こんな答へはその前にも他の二三の男に向つてしたことであつた。

それから、毎晩のやうに、用事が一とわたり濟むと渠のところへ入りびたつた。(神へ信心しに行くと云つて置けば、主人はおほびらに獨りで外出するのを許して呉れたからである)。そしてお孃さんの黒とみどりの青海波のメリンス切れを盗んで、見付けられない爲めに、渠に預けた時、渠は

『こんな物を取つて來たツて仕方がないや』と云つた。

『でも、これを見えるところへ出して縫へば、いい帶あげができます、わ。』

『帶あげなんか！』

『ちやア、おかね？』常は自分の男の心を迎へるやうに、思はず斯う尋ねた。

『うん』と、渠も嬉しさうに答へた。『さうして一緒に東京へでも行かう。』

『東京にはわたしのにイさんも行つてますから。』かの女は自分では前の男であつた田島のことを云つてゐた。その時でも手紙のやり取りは時々してゐたのだ。

お孃さんの萬年筆を選び出してからと云ふものは、主人がはでは特別にこちらに氣を許さぬやうになつた。で、どうせ長くゐるつもりではなかつたのだから、またをりを見て、簞笥の引き出しから現金九拾圓と、店の銘仙の見本切れ、半幅で七八寸ながのを重ねて五寸だかばかりのとを盗み出して、男と共に高とびをして來た。そして上野停車場近所の〇〇館と云ふのに止宿して、方々へうまい物を喰ひに行つたり、淺草へ活動寫眞を見に行つたりして、骨休めの日を暮してゐた。

そして丁度東京へ來てから一週間目の朝であつた——いつもよりはもツとさんざんな疲れの眠りから午前の九時頃に目をさますと、先づ自分の床が廣くらく〳〵してゐるのに氣が付いた。自分の男は便所にでも行つてるのだらうと思つてあツたかいとこにまだぐツたりしてゐるまま、ゆふべのことなど心に浮べながら待つてゐても、歸つて來るやうすがなかつた。腹這ひになつて首を擧げて見ると、枕もとにぬいであるのは自分の帶と銘仙の羽織を重ねた衣物と、白地に紺の太いすぢが這入つた紀州ネルの腰まきとで——男の物は一つもなかつた。おととひ洗つてやつたのが、きのふやツとかわいたもも引もだ。

それだけなら、まだ何の疑ひも起らなかつたのだが、はしらの釘にかけた鳥打ち帽も見えなかつたので、かの女は俄かに半身をはね起こした。そして蒲團の下に隠してあつた自分のがま口が飛び出してるのを調べて見ると、別くちにしてあつた五十圓の方がそツくり無くなつてゐた。

『泥棒のうはまへをはねて行つた、な！』人を——殊に、ゆふべは——さんざんにおもちやにしたあげく、憎い奴ではあつたが、仕かたなかつた。

『お前と一緒に暮してゐれば、いつおれにも縄が付くか知れやしない。』

『死ねばもろともだから、いいぢやアないの』と、こちらは冗談のつもりでゐたら、男は本氣であつたのだ。そしてその行きがけの駄賃まで不相應に取つて行つた。それでも、五十圓以外の殘金はすべて置いてあるのがまだしも惡人にも人情があると思へた。

『よくお眠りなさいました、ね』と、宿の女中はこちらが顏を洗ひに出た時に云つた。『おつれさんは御飯もあがらないで、早く出られましたが――』

『さうです。』こちらは成るべく心を落ち付けて答へた、『あれは急用ができて國へ歸りました。』

三

宿にゐるあひだに新聞の廣告を見ることを敎へられたので、それを見て京橋の栗岡さんへ山部德子と名乘つて雇はれることになつた。山部は自分の生まれた村に自分のうちの外にも澤山ある姓だが、德子は或オペラ女優の名から取つたのだ。

大きな門がまへで、立派な辯護士だかと思つたのは間違ひであつた。やツと近ごろ試驗に及第して、どこかの法律事務所から獨立したのだ。旦那は薩摩、奥さんは會津とかの人で、いづれもその言葉を東京流に云ふやうにしてゐるけれども、分りにくかつた。その奥さんは十三をかしらに五人もある子供に向つて、

『人間と云ふものは、ね、自分の腹だけはしツかりきめて置いて、他人にはただいいやうに云つてゐればいいのだよ』などと敎へ込んでゐる。

『……』常は自分にもそれが本統だと思はれたけれども、さうおほびらに子供にまで敎へるのは如何にも見ツともないやうに聽えた。自分ながら無敎育を示すやうに見えて。

それに、新らしい箪笥が二つもあるのをこツそり明けて見たら、二つとも、殆どなんにも這入つてゐないと言つてもよかつた。今は不用な夏物――それも大して目ぼしいのではない――のほかには、旦那の紋つき羽織りと袴とばかりで、奥さんの冬物などはなかつた。そしてあるのは質屋の帳面であつた。それから思ひ付いて、常は自分のをんな主人が、

『お德、お前のをばさんと云ふのは何をしてゐる、ね』と云ふのをうへから押し付けるつもりで、宇都宮のことに持つて行き、

『質屋をして、家作も二三十軒持つてをります』と答へた。

『それはいいことをしてゐる！』

『……』ふん、無論いい筈である！ここの奥さんは自分で風呂敷を持つて、毎晩、夜店の青物をも買ひに行くほどだから、女中は一錢や二錢すらも買ひ物代からくすね取ることができないのだ。所處

へ行つても、少しも女中のはばが利かなかつた。

『今度は女中さんがふたりにもなつたのですか』と、こちらまでを冷かすやうに云つて、たツた三十錢のもち菓子をさへ店で貸しては呉れなかつた。

『……』一圓札を奥さんから預けられ、辯護のいい依頼者が來たのだから早く買つて來いと云はれた。が、生憎、店につりがなかつた。では、あとでくづしてから持つて來ますからと云つたけれども、そのあひだだけも貸して置けないとのことであつた。

『あのお宅は信用ができませんから。』

『……』こちらはさう露骨にも報告できないから、『おつりがございませんさうです』と云つて歸つて見ると、

『つりがなければどこかでくづして貰つたらいいではないか』と、奥さんが叱つた。『氣が利かない！』

『……』ふん、さう意張つたツて、誰れにその意張りが利くものか？然し止むを得ないので、別なところへ行つて札をくづして貰つてから、これもいま〳〵しいけれどもまた同じ店の包ませたままになつてる菓子を買つて歸つた。一つだけでも横取りしてやらうと思つたが、奥さんはかね目と合はせて數を勘定するにきまつてゐるから、さし控へて置いた。

お高さんと知り合ひになつたのはこの家でだが、人のよささうなかの女が十九だと云ふのに對して、常のお徳は自分の實際の年を三つも隱して、自分もおないどしにした。そして寒いのを口實にして床を一つに寢て、まだ男を知らぬと云ふ者にいろんなことを云つて聽かせるのを毎晩の樂しみにしてゐた。自分には、今男が三人あるが、ひとり（野添）は鑛山に行つてるし、ひとり（菊地）は國の役場にゐるし、今ひとり（田島）は神田の猿樂町に來てゐるとも聽かせた。

『そんなに持つてどうするの』と、お高さんは心配さうに云つた。

『なアに、男は助平なものだから、直ぐ引ツかかつて來る、わ。』

『でも、子ができたら――』

『……』その問ひに對しては一つ隱してゐることがあつた。常は國で子を孕んだのだが、誰れの子ともきめることができなかつた。幸ひに早く流產したので世間にはさう目立たなかつたが、それが第一の原因で叔父の家にゐられなくなつたのである。けれども、別に懲りてもゐないので、『そんな心配は入らない、わ、男を十人持てば、もう子供はできないと言ふから。』

『さうか知らん？』お高さんも大分に乘り氣になつてゐたのだ。

『わたしがひとりいいのを世話してあげる、わ』と云つて、常はお高を喜ばせて、成るべく多くの仕事をこちらに代つてして呉れるやうにさせてあつた。そして、宮の九十圓を國の十五圓に加へて、百と五圓を國の叔母から盜んでまた別な男と共に出て來たが、その半分以上はその男に持ち逃げされた

ので、その殘りの金で宿賃を拂つてから、ここへ來たのだと告げた。けれども、まだ、金が欲しければ、叔母へ云つてやりさへすれば、どうせすべての財産はこちらの物であつたのだから、いくらでも送つて來て呉れるとも。

お高さんは十分にこちらを信じてゐたけれども、主人の方は――どう見ても――信じて呉れてるやうすがなかつた。主人の目をかすめては常だけがらくをしてゐるのを見付けられて、

『お徳はどうも圖々しい』と云はれた。

『……』むろん、女中なんかしてゐたくないからであつた。宮の時とは違つて夜も籠の鳥のやうにとぢ込められて、男に逢ひにも行けず、さうかと云つて何をくすねると云ふ望みもなく、ただ詰らなく寂しい時には、矢ツ張り、叔父さんのそばにゐた時の割り合にらくで、自由なことが思ひ出された。

『お前は手紙ばかり書いて、郵便の來る時間には玄關ばかり氣にして心が落ち付いてゐない』と、奥さんに云はれた。

『……』こちらは、然し、男の返事ばかりを待つてゐるのではなかつた。國の叔母さんにも詫びの手紙を出して、『これから改心致し候へば、何卒今一度國へ歸れるやうに叔父さんへおはなし下さいませんか』と云ふことを云つてやつた。すると、叔父さんの手で意外な返事が來た。

『お前のうちだから歸郷致したくば直ぐにもよろしきわけ合ひに候へども、お前はまた宇都宮に於いて大變なることを仕でかしたと見え、目下當方へまでも警察の問ひ合せがまゐり居り候。お尋ね者も同樣なれば、今歸つてはお前の爲めにはなり申さずと存じられ候。』

『……』最初にそれを讀んだ時には、常は自分のからだがふるえあがるのをおぼえた。さすが、國の時は身うちのあひだゆゑにそのままにしたが、宮は他人のことであるからおもて沙汰にしてしまつたかと！けれども、二度目に讀み直してゐるうちに、叔父もこちらの賴みに從つてこちらの名を徳と云ふ僞名にして來たのに思ひ及んで、少し安心した――宮では本名の龜子を用ゐてゐたが。そして三度目の讀み直しには、もう、平氣になつてゐた。その上にも、叔父はそんなことをいいしほにして、再び國へ歸つて來させないつもりだらうと云ふことが疑はれた。

『今歸つてはお前の爲めにはなり申さず――』これは本統か？それともうその手か？

『わたし、もう、寂しい人よ、あなたにでも同情して貰はなければ。』斯う云つて、常がお高さんにまことしやかに告げたによると、叔父ではなく、叔母からお前が本統にうちの金を取つたのなら取つたと正直に云つて來い、さうしたらまた取り成しやうもあるとあつた。で、こちらは本統に百五圓を取りましたと云つてやつた。(但し、この金額は自分のうちに財産があると云ふのをお高さんにほのめかす爲めだが。)すると、それツ切り返事がないのは、こちらの白狀を證據にして、二度と再びこちらをうちへ入れないつもりである。

『氣の毒、ね。』お高さんは涙をこぼした。そして『わたし、どこでもあなたの行くところへ行く、わ』と云つた。

『……』常はお高も男が欲しいばかりに何でもこちらの云ふことを聽いてるのだと分つてるので、いいのがあらば紹介してやる、やると云つて、どこまでも引ツ張つて行けばと思つた。

常は自分も逢ひたいし、お高さんにも羨やませてやりたいので、田島を一度手紙で時間を知らせて呼び寄せた。そして主人にはこツそりとお高さんをも引き合はせた。そしてあとになつてから、

『あの人はひよツこり來たのよ』と說明した。それには、つい、きのふ、近處の人に聽いたことが自分のうその種になつた。今、ここの離れと云つてるところは、今でも、門から這入つて、家の横手をぢかに行けるやうになつてるが、それがもと印刷屋であつたと云ふ。『まだあることだと思つて、田島さんは名刺を賴みにひよツこり這入つて來たの。そこへわたしも亦ひよツこり出くわしたの。』

『でも、前に手紙が來たでしよう――？』

『……』如何にもそれを自慢して見せたことは忘れてゐたが、その云ひぬけもできないことはなかつた。『まさか、ここだとは思つてなかつたでしようよ。向ふも、だから、びツくりした、わ。』男を呼び寄せては見たが、一緒にそとへ出て樂しめるわけでもなかつたので、まア、こんなことでもお高さんに語つて、氣休めを云ふより仕かたがなかつた。

『また誰れか別な男と一緒にやつて來たのだらう』と、田島さんは離れへの狹い横手でこちらを窮問したツけ。高い鼻に添つて兩方の眼のするどい視線がこちらへ落ちて來た時には、少しおそろしかつたけれども、思へば、きりりとしたその顏つきがあとまでも賴母しい。

『宇都宮にも叔母さんがあるの、そこから九十圓ばかり盜んで出て來たのだけれど、宿屋にゐるうちに、朝、目がさめて見たら、一緒に來た人がみな取つて行つてなかつたのですもの。』

『馬鹿！』その聲は低かつたけれど、そこぢからがあつた。『お前のすることはみなそんなものだ。ほかにもまだ男があらう？』

『ない、わ、ひとりも。』

『……』田島さんは疑はしさうな顏つきをした。

『若しわたしをいやなら、お高さんを紹介してもいい、わ。』手紙では既にかの女のことをも朋輩として書いて置いたのであつた。

『兎に角、ちよツとどこかへ行け』と、男は押し付けるやうに云つた。

『でも、けふはとても駄目よ――これがゐるから』と、おや指を出して見せた。

『ちやア、なんしに呼んだのだ？』

『顏が見たかつたの。近いうちに財布を一つ縫つて送つてあげる、わ。』斯う云つてやツと男を返し

のだが、宮で盜んだ銘仙の見本切れはこんなことにでも使はなければ、ほかに使ひ道がないのであつた。

四

『お前の縫つた財布はきツとこないだの男に送つてやつたのだらう』と、奥さんは云つた。直接にはさうおこつてゐるやうすは見えなかつたけれども、そんなこんなで常は自分の信用が全く主人の家になくなつてるやうに感づかないではゐなかつた。

『わたし、いつ追ひ出されるかも知れやせん、わ。』

『あなたが出たら、わたしも出ますよ』と、お高さんは同情して呉れた。

『……』常は、自分の受けるべきぶんまでの信用をかの女が古領してゐるかたちになつてるので、心中ではかの女を憎んでゐた。そしてこの憎みがかの女のこちらへの同情を利用してかの女をも出る時は一緒につれ出さないでは置かないと云ふ決心をかためしめた。

また新聞の女中廣告に注意し初めてゐたのだが、丁度、國民新聞に

『女中二名入用、給金各々拾圓』と云ふのが出てゐたので、早速手紙を書いてお高さんに郵便箱へ持つて行かせた。さうすればかの女の方が切手代を出すからであつた。こちらの男へ出す手紙をもさうしてこれまでにいくらもかの女のふところ金から出させたし、またちびり〳〵と五錢や十錢を借りてそのままにしてあるのだ。

『有望な返事が來たら、先づわたしが行つて來ます、わ』と云つて、お高さんには主人への口どめをして置いたのだが、若し一名は既にできてて、あとの一名だけが入用と云ふなら、自分だけがきめて、お高さんをすツぽかしてもよかつた。僅か三圓や五圓の給金でかの女とおつき合ひするまでもなかつたからである。

『ふたり一緒に行けたらよろしいが、な』と、お高さんは返事の來ないうちから泣き付くやうに云つてゐた。

『御返事は封書でお願ひ申し候』と書いた。それが思つたよりも二三日後れた日の朝、奥さんの氣が付かないうちに、第一便で直接に自分の手に受け取れた。直ぐ常は赤と黄と黑との子持ちじまなる手織り木綿の衣物に、黑地に赤の入つた模樣のメリンスだが、はぎばかりある帶を締め、見えるところだけに例の黑とみどりの青海波のメリンスが出る帶あげ（これはここへ來てから安心して縫ひ上げたものだ）をつけ、黑と白茶のぼうじま銘仙の羽織りを引ッかけた。そして何喰はぬ顏をして、ちよッと自分の買ひ物に出る口實を以つて主人の家を出た。

もう、三月に這入つたのだから、水仕事もさう苦しくなくなつたうへに、ずッといい給金を取れる

のだから、大塚行きの電車に乘つてゐても、自分ながら、つい、嬉しいやうなほほゑみがこぼれるのを覺えた。そしてそのゑみをとめると、そのあとへ今度の奥さんのまだ見ぬやうすが想像された。そして貧乏辯護士の奥さんよりも立派な衣物を澤山持つてゐて、而も一層若くツて、もツと間ぬけであつて呉れればよかつた。

書かれてあつた通りに大塚の終點で下りて、左りへ神社の中をぬけたところで人に聽いて見ると、すぐ分つた。まだ東京のまちを不案内なのに少からずおど〳〵してゐたのだが、さして來た『平田』と云ふ家の門をくぐつた時、まアよかつたと云ふ氣がした。

門から二三間で玄關へ達するまでの、左りには庭があつて、何かの草の芽などが出てゐるのを見ると、直ぐかの女のあたまには自分の新らしい主人は――職業が小說家だと書いてあつたから――趣味と云ふものもあるのだらうと思はれた。右手には、然し、小い畑があつて、小松菜のいじけたのが生えてゐるのを見ると、自分にこんな物の世話をさせられるのではないかと思つた。鍬などは、實に、自分が生まれ故郷でさんざん持ち飽きたり、見飽きたりしたところの物であつた。

こんなことを考へてる時には、もう、ここの勝手の方へまわつてゐた。ちよツと氣さくらしさうに見える奥さんが臺どころへ出て、そこから茶の間へ案内して呉れた。

弊からしておそろしいやうな旦那さんや、三つと書いてあつたその兒らしい女の兒もゐて、ちやぶ臺で食事をしてゐた。おひるにはまだ早いやうだし、朝はんとしてはおそ過ぎると思つたら、

『うちでは旦那さんとわたしとは二食なんだが、ね』と、奥さんは云はれた。『女中や、學校へ行つてる子供は、矢ツ張り三度にさせてあるの。』

『さやうですか？』儉約の爲めか知らんと考へて見たが、それだけ手が省けるだらうから嬉しかつた。それに、次ぎの三疊敷きらしい玄關のまに書生見たやうな若い人がゐるのを自分のいい話し相手になると思つた。

『お前の國はどこだい？』これは旦那さんの問ひであつた。

『茨城縣ですが――』

『茨城縣は――？』

「水戸在です』と、少しもぢ〳〵して答へた。これは本統のことだが、若しこれ以上を詳しく聽かれたら、田島の村を云つてやらうと考へてたところ、それだけでその場はすんでしまつた。

『學校はどこまで行つた、ね？』

『女學校を卒業しました。』これもうそだけれども、常は自分ほど漢語を使へるなら、お高さんなどとは違つて、斯う云つて置いてもさしつかへないだらうときめてゐた。

『こないだまでゐた乳母も女學校卒業だツたが、ね』と、奥さんも箸を運ぶあひまに語つた。『それは